

佐知久保畑遺跡

2次調査

大分県中津市三光佐知における店舗建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2020

中津市教育委員会

序

大分県の最北部に位置する中津市は、国指定名勝耶馬溪など緑豊かな自然や城下町の香りを色濃く残す、自然と文化の町として知られています。また、近年は自動車関連会社などの進出・稼働により工業の町としての新たな側面も見せ始めています。

一方、経済活動の発展・促進に付随した開発事業は、埋蔵文化財へ影響を与えています。平成31年度はこうした開発事業にともなう試掘・確認調査が、東九州道などへのアクセス道路整備及び市街地周辺の宅地化などにより、前年度に引き続き増加傾向にあります。埋蔵文化財を取り巻く環境は厳しいところではありますが、文化財は現代に生きる我々が責任をもって未来へ伝えていかななくてはなりません。

本書はこうした開発の中で、中津市三光佐知における店舗建設に先立ち、中津市教育委員会が実施した佐知久保畑遺跡2次調査の発掘調査報告書です。調査により弥生時代から古墳時代の集落に関連する施設が確認され、当地域の歴史を考えるうえで貴重な資料となりました。

本書が歴史教育や学術研究資料としてはもとより、埋蔵文化財の保護やその理解への一助となりましたら幸いです。

最後に、発掘調査から報告書刊行に至るまでご協力を賜りましたセントラル観光株式会社様をはじめ関係各位、並びに調査に従事して下さった方々に対し、深甚から感謝申し上げます。

令和2年3月31日

中津市教育委員会
教育長 栗田 英代

例 言

- 1 本書は、店舗建設工事に伴い、大分県中津市三光佐知で平成30年度・31年度に実施した、佐知久保畑遺跡2次調査の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 調査は、平成31年2月1日にセントラル観光株式会社と中津市が埋蔵文化財発掘調査の委託契約を結び、2月15日から中津市教育委員会が実施した。
- 3 本書に掲載した遺構の略称は、竪穴住居跡がS H、掘立柱建物跡がS B、井戸がS E、土坑がS K、溝状遺構がS D、ピットがS Pと表記した。また、遺構番号はA～Fの区ごとに1から付していった。
- 4 遺構の実測図作成は、調査担当者の末永弥義のほか、岩男純子・久原彩・武吉香子・宮津しのぶ・村上由美子が行った。また、遺構の写真は末永が撮影した。
- 5 出土遺物の整理作業は、安倍方恵・粟田真弥・衛藤京子・吉上かおり・高榎裕美が担当した。
- 6 遺物の実測は安倍・粟田・衛藤・吉上・高榎が、写真撮影は末永が行った。
- 7 本書で使用した座標は、世界測地系第Ⅱ座標系による。
- 8 本書に掲載した佐知久保畑遺跡周辺主要遺跡等分布図は、国土地理院発行の1/50,000「中津」・「宇佐」を改変したものである。
- 9 今回の調査で出土した遺物及び検出した遺構の図面・写真等の記録は、中津市教育委員会に保管している。
- 10 本書の執筆・編集は末永が行った。

本文目次

第1章 調査の経過と組織	1
第1節 調査の経過	1
第2節 調査の組織	1
第2章 遺跡の地理的・歴史的環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3
第3章 調査の内容	7
1 A区	7
① 竪穴住居跡	7
② 土坑	9
③ 溝状遺構	11
④ その他の遺構	13
2 B区	13
① 竪穴住居跡	13

② 土坑	15
③ 溝状遺構	18
④ その他の遺構	20
3 C区	22
① 竪穴住居跡	23
② 掘立柱建物跡	23
③ 土坑	25
④ 溝状遺構	25
⑤ その他の遺構	26
4 D区	27
① 掘立柱建物跡	28
② 土坑	28
③ その他の遺構	29
5 E区	29
① 竪穴住居跡	30
② 掘立柱建物跡	33
③ 土坑	33
④ その他の遺構	33
6 F区	34
① 竪穴住居跡	36
② 掘立柱建物跡	37
③ 井戸	39
④ 土坑	40
⑤ 溝状遺構	40
⑥ その他の遺構	42
7 その他	42
第4章 調査のまとめ	51

挿図目次

第1図 佐知久保畑遺跡周辺主要遺跡等分布図（縮尺1／50,000）	4
第2図 佐知久保畑遺跡2次調査地位置図（縮尺1／10,000）	5
第3図 佐知久保畑遺跡2次調査全体図（縮尺1／300）	6
第4図 佐知久保畑遺跡2次調査A区全体図（縮尺1／100）	7
第5図 A区竪穴住居跡実測図（縮尺1／60）	8
第6図 A区土坑実測図（縮尺1／40）	10
第7図 A区溝状遺構実測図（縮尺1／40）	12

第8図	A区出土遺物実測図（縮尺1／3・1／4）	12
第9図	佐知久保畑遺跡2次調査B区全体図（縮尺1／100）	14
第10図	B区竪穴住居跡実測図（縮尺1／60）	15
第11図	B区土坑実測図（縮尺1／40）	16
第12図	B区溝状遺構実測図（縮尺1／40）	19
第13図	B区出土遺物実測図1（縮尺1／4）	21
第14図	B区出土遺物実測図2（縮尺1／3・1／4）	22
第15図	佐知久保畑遺跡2次調査C区全体図（縮尺1／100）	23
第16図	C区竪穴住居跡実測図（縮尺1／60）	23
第17図	C区掘立柱建物跡実測図（縮尺1／60）	24
第18図	C区土坑実測図（縮尺1／40）	25
第19図	C区溝状遺構実測図（縮尺1／40）	26
第20図	C区出土遺物実測図（縮尺1／3・1／4）	27
第21図	佐知久保畑遺跡2次調査D区全体図（縮尺1／100）	28
第22図	D区掘立柱建物跡実測図（縮尺1／60）	29
第23図	D区土坑実測図（縮尺1／40）	29
第24図	D区出土遺物実測図（縮尺1／4）	29
第25図	佐知久保畑遺跡2次調査E区全体図（縮尺1／100）	30
第26図	E区竪穴住居跡実測図（縮尺1／60）	31
第27図	E区掘立柱建物跡実測図（縮尺1／60）	33
第28図	E区土坑実測図（縮尺1／40）	33
第29図	E区出土遺物実測図（縮尺1／4）	34
第30図	佐知久保畑遺跡2次調査F区全体図（縮尺1／100）	35
第31図	F区竪穴住居跡実測図（縮尺1／60）	36
第32図	F区掘立柱建物跡実測図（縮尺1／60）	38
第33図	F区井戸・土坑実測図（縮尺1／40）	39
第34図	F区溝状遺構実測図1（縮尺1／40）	41
第35図	F区溝状遺構実測図2（縮尺1／40）	42
第36図	F区出土遺物実測図（縮尺1／3・1／4）	42
第37図	クロボク層出土及び表面採集遺物（縮尺1／4）	43

表 目 次

第1表	出土土器観察表	44
第2表	出土土製品・石製品観察表	50

図版目次

- 図版1 (1) 佐知久保畑遺跡2次調査地全景(西から) (2) A区遺構検出状況(北東から)
(3) A区完掘状況(南西から)
- 図版2 (1) A区1号竪穴住居跡(南東から) (2) A区1号竪穴住居跡(北西から)
(3) A区2号竪穴住居跡(南東から) (4) A区2号竪穴住居跡土層断面(南から)
- 図版3 (1) A区1号・2号土坑(北西から) (2) A区3号土坑(西から)
(3) A区4号土坑(南東から) (4) A区7号土坑(南西から)
(5) A区8号土坑(東から)
- 図版4 (1) A区1号・2号溝状遺構(北西から) (2) A区竪穴住居跡出土遺物1
(3) A区竪穴住居跡出土遺物2 (4) A区土坑出土遺物1
(5) A区土坑出土遺物2 (6) A区溝状遺構・ピット出土遺物
(7) A区ピット等出土遺物
- 図版5 (1) B区遺構検出状況(北東から) (2) B区完掘状況(南西から)
(3) B区1号竪穴住居跡(北西から) (4) B区2号竪穴住居跡(南東から)
- 図版6 (1) B区2号竪穴住居跡(西から) (2) B区1号土坑(西から)
(3) B区1号土坑土器出土状況(西から) (4) B区2号・3号土坑(北西から)
(5) B区5号土坑(北西から)
- 図版7 (1) B区5号・6号土坑、1号～3号溝状遺構付近(北西から)
(2) B区6号土坑(北西から) (3) B区7号・8号土坑(南東から)
(4) B区2号溝状遺構(北西から) (5) B区2号溝状遺構(北東から)
(6) B区2号溝状遺構土器出土状況
- 図版8 (1) B区7号・8号土坑、4号・5号溝状遺構付近(南東から)
(2) B区3号溝状遺構(北西から) (3) B区4号溝状遺構(北西から)
(4) B区竪穴住居跡出土遺物1 (5) B区竪穴住居跡出土遺物2
(6) B区竪穴住居跡出土遺物3 (7) B区竪穴住居跡出土遺物4
- 図版9 (1) B区土坑出土遺物1 (2) B区土坑出土遺物2
(3) B区土坑出土遺物3 (4) B区土坑出土遺物4
(5) B区溝状遺構出土遺物1 (6) B区溝状遺構出土遺物2
(7) B区溝状遺構・ピット出土遺物 (8) B区表面採集遺物
- 図版10 (1) C区遺構検出状況(北東から) (2) C区完掘状況(北東から)
(3) C区1号竪穴住居跡(東から) (4) C区1号・2号掘立柱建物跡(北東から)
(5) C区1号・2号掘立柱建物跡(北から)
- 図版11 (1) C区1号土坑(南東から) (2) C区1号土坑土層断面(南東から)
(3) C区1号溝状遺構(北西から) (4) C区1号溝状遺構(北東から)
(5) C区南西端部(南西から) (6) C区2号溝状遺構(南東から)
(7) C区出土遺物1 (8) C区出土遺物2

- 図版12 (1) D区遺構検出状況(南西から) (2) D区完掘状況(北東から)
(3) D区1号掘立柱建物跡(北から) (4) D区1号土坑(南東から)
(5) D区土坑出土遺物 (6) D区ピット出土遺物
- 図版13 (1) E区遺構検出状況(北東から) (2) E区完掘状況(南西から)
(3) E区1号竪穴住居跡(北西から) (4) E区1号竪穴住居跡(北東から)
- 図版14 (1) E区1号竪穴住居跡カマド土層 (2) E区1号竪穴住居跡カマド(北東から)
(3) E区1号竪穴住居跡完掘状況(北東から) (4) E区2号竪穴住居跡(西から)
- 図版15 (1) E区3号・4号竪穴住居跡付近(南東から) (2) E区3号竪穴住居跡(南から)
(3) E区4号竪穴住居跡(北西から) (4) E区5号竪穴住居跡(南東から)
- 図版16 (1) E区1号掘立柱建物跡付近(南東から) (2) E区1号掘立柱建物跡(北東から)
(3) E区1号土坑(東から) (4) E区出土遺物1
(5) E区出土遺物2 (6) E区出土遺物3
(7) E区出土遺物4
- 図版17 (1) F区遺構検出状況(北東から) (2) F区完掘状況(南東から)
(3) F区完掘状況(北西から) (4) F区完掘状況(北東から)
- 図版18 (1) F区1号竪穴住居跡(北西から) (2) F区2号竪穴住居跡(南東から)
(3) F区3号竪穴住居跡(北西から) (4) F区1号掘立柱建物跡(南東から)
- 図版19 (1) F区2号掘立柱建物跡(東から) (2) F区2号掘立柱建物跡(北東から)
(3) F区2号掘立柱建物跡柱穴P3・P4・P5 (4) F区3号掘立柱建物跡(東から)
(5) F区1号土坑(北東から) (6) F区1号井戸(北西から)
(7) F区1号井戸土層(南西から)
- 図版20 (1) F区1号溝状遺構(東から) (2) F区1号溝状遺構(北東から)
(3) F区1号溝状遺構土層(北東から) (4) F区2号溝状遺構(北西から)
(5) F区出土遺物 (6) 2次調査クロボク層出土遺物
(7) 2次調査表面採集遺物1 (8) 2次調査表面採集遺物2

第1章 調査の経過と組織

第1節 調査の経過

佐知久保畑遺跡は山国川が下毛原台地にさえぎられて、流路を北方から北西方向に蛇行させる地点の東側河岸段丘最下面に立地する、縄文時代から古墳時代の集落跡である。この遺跡内の中津市三光佐知字一丁畑926番地2で平成30年8月13日に埋蔵文化財包蔵地の照会ならびに文化財保護法第93条第1項の届出が提出された。事業対象地の現況は大型商業施設の駐車場であったが、それ以前は水田や畑地となっていた。届出があった事業は店舗建設を実施するもので、建物建築部分は掘削工事を伴うものであった。このため、中津市教育委員会は11月19日から21日の間に7本のトレンチによる確認調査を実施した。調査の結果、現地表下2.1m～3.3mの深さで基盤層を確認し、竪穴住居跡・土坑・溝状遺構等を多数検出し、出土遺物からみても、弥生時代から古墳時代の集落跡が分布することが確認された。このため、中津市教育委員会は工事主体者と遺跡の記録保存についての協議を行い、平成31年1月31日に埋蔵文化財発掘調査業務等協定、2月1日に埋蔵文化財発掘調査委託契約を締結した。発掘調査及び報告書作成業務の履行期間は平成31年2月1日から平成32年3月31日までとした。

現地における発掘調査は平成31年2月15日に開始し、最初に調査区の設定を行った。調査区は建物の深い基礎が設置される部分を中心にし、北東-南西方向に長い幅2mのトレンチ状を呈する形態で、西側からA・B・C・D・E・Fの6区を設けた。遺構検出面が3m前後と深く、多量の排土を置く場所を確保するため、隣接する調査区は同時並行して調査ができないことから、調査区の調査順序はA区→E区→C区→F区→D区→B区となった。各調査区の調査期間はA区が2月20日～3月5日、E区が2月26日～3月12日、C区が3月5日～3月18日、F区が3月18日～4月8日、D区が3月26日～4月9日、B区が4月8日～4月17日である。重機による調査区の掘削が終了したのち、作業員による各調査区の調査は遺構の検出→写真撮影→遺構の掘削→写真撮影→遺構の実測の工程で進め、その後埋戻しも並行して行った。埋戻しを含めたすべての現地調査が終了したのは4月19日である。

各地区の調査面積はA区34㎡・B区74㎡・C区70㎡・D区40㎡・E区68㎡・F区201㎡で、合計487㎡である。

現地調査終了後、令和元年8月1日に発掘調査報告書作成のための埋蔵文化財発掘調査委託契約を締結し、出土品の整理作業及び報告書作成作業を実施した。

第2節 調査の組織

今回の佐知久保畑遺跡2次発掘調査に伴う事業執行の組織は次のとおりである。

調査主体 中津市教育委員会

教育長（前任）

廣畑 功

教育長

粟田 英代

調査事務 社会教育課長

高尾 良香

社会教育課文化財室長

高崎 章子

社会教育課管理・文化振興係主幹

村上 豊成

社会教育課管理・文化振興係主幹

社会教育課管理・文化振興係係員

”

”

社会教育課文化財係主幹

社会教育課文化財係副主任研究員

社会教育課文化財係主査

社会教育課文化財係主任

調査担当 社会教育課文化財係嘱託

河野さくら

速水 誠

藤澤麻里奈

渡邊奈津子

花崎 徹

浦井 直幸

丸山 利枝

衛藤 美紀

末永 弥義

また、現地における発掘調査に従事した作業員は次のとおりである。

岩男 純子・衛藤 敏章・奥田 誠・加来 晴美・金崎ミチ子・川野 和夫・木下 陽一・

久原 彩・後藤 哲・後藤 満廣・末廣 洋子・祐成 本文・武吉 香子・中上 好孝・

野田 英幸・松村たか子・宮津しのぶ・村上由美子・山本 一秀



調査風景

第2章 遺跡の地理的・歴史的環境

第1節 地理的環境

大分県中津市は県の北部に位置し、面積は491km²に及ぶ。四至は北方が瀬戸内海西端の周防灘に開け、西が福岡県に、東が宇佐市に、南は玖珠町と日田市に接している。市の西部を北流する一級河川山国川は英彦山（標高約1,200m）を源とし、下流域では福岡県との県境をなすとともに広い沖積平野「沖代平野」を形成する。上中流域は山稜が複雑に延び、その中央部を占める国指定の名勝耶馬溪は流域約50kmに展開する。耶馬溪は頼山陽の命名によるもので、一帯は耶馬日田英彦山国定公園の一部となっている。また、市の東部には犬丸川が北東に流れるが、沖代平野と犬丸川の間には標高10m～30m程度の洪積台地「下毛原台地」が広がっている。

第2節 歴史的環境

市内には旧石器時代以降の遺跡が数多く分布し、その一部は発掘調査されている（第1図参照）。

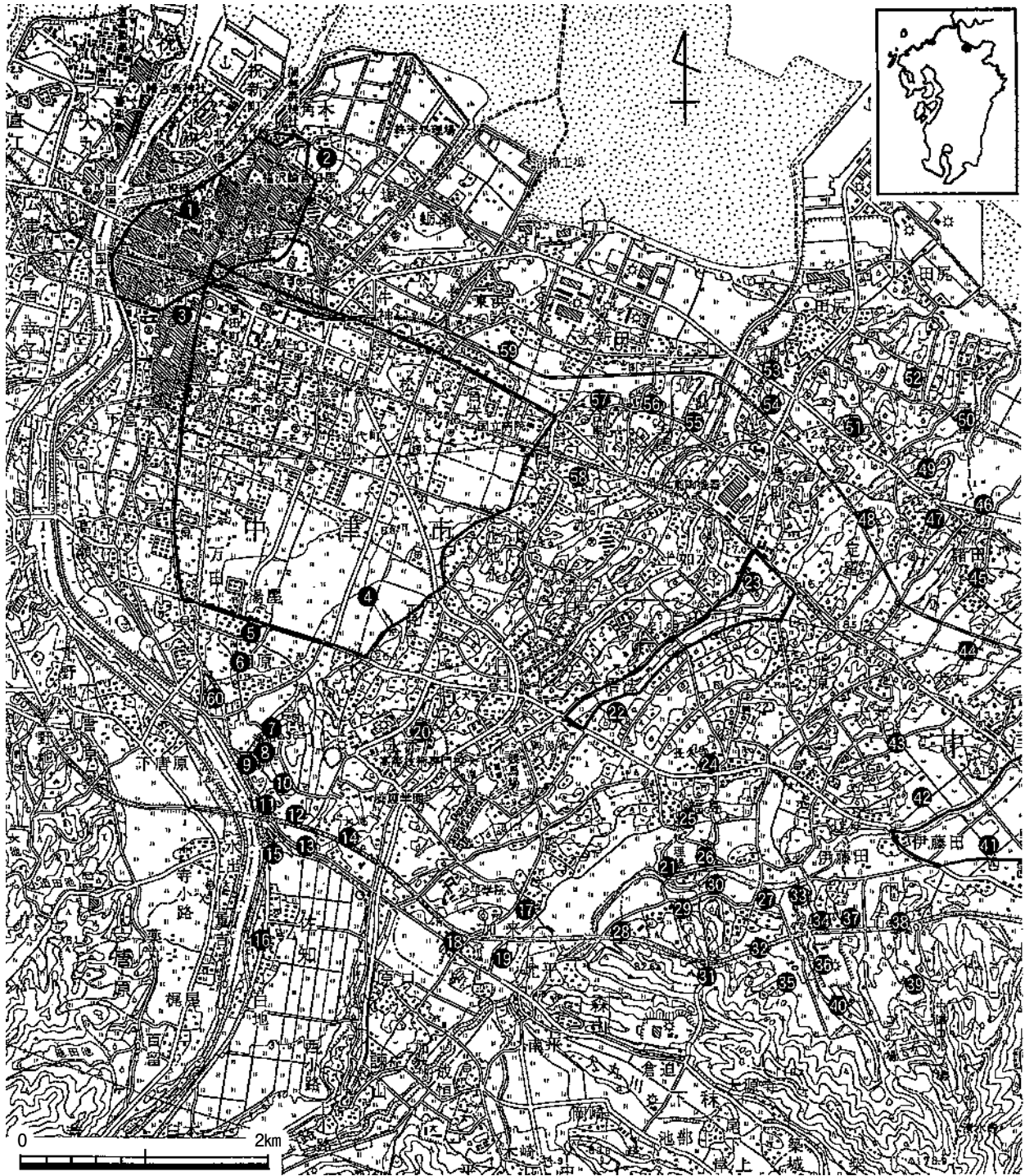
旧石器時代 旧石器時代の遺跡はまだ少ないが、諸田南遺跡（44）で尖頭器やナイフ形石器が出土している他に、才木遺跡（35）・法垣遺跡（19）などでも石器が出土している。

縄文時代 縄文時代になると、上畑成遺跡（43）で早期の無文土器が出土し、早期末から前期の黒水遺跡（18）では陥し穴が発見されている。後期・晩期に属する植野貝塚では牙製垂飾具・貝輪などの装身具や魚類・動物の骨などが出土し、高畑遺跡では土偶も発見されている。集落跡では古田遺跡が調査されているが、法垣遺跡は竪穴住居跡以外にも掘立柱建物跡が検出された重要な遺跡である。

弥生時代 弥生時代になると山国川や犬丸川流域の沖積平野で水稻耕作が拡大していったと考えられる。前期後葉から中期初頭の上ノ原平原遺跡（13）や諸田遺跡（45）で貯蔵穴が発掘されている。中期では福島遺跡（25）で住居跡とともに二列埋葬の土壙墓群が確認されている。また、森山遺跡（28）では前期末から後期初頭の集落全域が把握されている。

古墳時代 古墳時代では集落や生産遺跡・墳墓などの各種の遺跡が確認されている。集落関係では後期に属する中須遺跡・十前垣遺跡・諸田遺跡・定留遺跡（47）などが調査されている。これらのうち十前垣遺跡では移動式カマドが出土し、諸田遺跡ではL字カマドを有する住居跡や鞆の羽口が発見され、渡来人の系譜に属する人々の存在が推測されている。須恵器を生産した城山窯跡群（36）や草場窯跡（37）・踊ヶ迫窯跡（38）・ホヤ池窯跡（39）・大谷窯跡（40）などからなる野依伊藤田窯跡群は犬丸川中流の丘陵地帯に位置し、一部は奈良時代まで継続している。古墳では下毛原台地北部の亀山古墳（58）以外の多くの墳墓は台地の南西部に営まれている。5世紀中ごろには山国川に面する勘助野地遺跡（12）で方形周溝墓が築造され、5世紀後半から7世紀前半には上ノ原横穴墓群（11）が造営される。また、三保地域には後期になると岩井崎横穴墓群（29）・城山古墳群（34）・城山横穴墓群（33）などが築造される。7世紀から9世紀の相原山首遺跡では方墳が作られている。

白鳳～平安時代 7世紀末の白鳳期に創建された相原廃寺（6）は沖代平野の南端部に位置するが、その北方約500mを隔てて西北西－東南東方向に官道「勅使街道」が整備される。沖代地区条里跡（4）はこの官道を南限として8世紀初頭には沖代平野の広範囲に施行されている。古代の下毛郡衙



- | | | | | |
|--------------|--------------|-------------|-------------|--------------|
| 1. 中津城跡 | 13. 上ノ原平原遺跡 | 25. 福島遺跡 | 37. 草場窯跡 | 49. 和間貝塚 |
| 2. 中津城下町遺跡 | 14. 大池南遺跡 | 26. 福島地下式横穴 | 38. 踊ヶ迫窯跡 | 50. 定留鬼塚遺跡 |
| 3. 豊田小学校校庭遺跡 | 15. 佐知久保畑遺跡 | 27. 前田遺跡 | 39. ホヤ池窯跡 | 51. 是能遺跡 |
| 4. 沖代地区条里跡 | 16. 佐知遺跡 | 28. 森山遺跡 | 40. 大谷窯跡 | 52. 田尻大迫遺跡 |
| 5. 市場遺跡 | 17. 加来居屋敷遺跡 | 29. 岩井崎横穴墓群 | 41. 野依遺跡 | 53. 舞手橋東段丘遺跡 |
| 6. 相原廃寺 | 18. 黒水遺跡 | 30. 犬丸川流域遺跡 | 42. 野依地区条里跡 | 54. 是則遺跡 |
| 7. 相原山首遺跡 | 19. 法垣遺跡 | 31. 洞ノ上窯跡 | 43. 上畑成遺跡 | 55. 全徳遺跡 |
| 8. 鶴市神社裏山古墳 | 20. 長者屋敷官衙遺跡 | 32. 安平遺跡 | 44. 諸田南遺跡 | 56. ガラヌノ遺跡 |
| 9. 坂手隈横穴墓群 | 21. ポウガキ遺跡 | 33. 城山横穴墓群 | 45. 諸田遺跡 | 57. 合馬遺跡 |
| 10. 弊旗邸古墳 | 22. 大悟法地区条里跡 | 34. 城山古墳群 | 46. 天貝川遺跡 | 58. 亀山古墳 |
| 11. 上ノ原横穴墓群 | 23. 原遺跡 | 35. 才木遺跡 | 47. 定留遺跡 | 59. 東浜遺跡 |
| 12. 勘助野地遺跡 | 24. 田丸城跡 | 36. 城山窯跡群 | 48. 定留貝塚 | 60. 三口遺跡 |

第1図 佐知久保畑遺跡周辺主要遺跡等分布図 (縮尺=1/50,000)

の正倉跡である長者屋敷官衙遺跡（20）も8世紀後半に官道の南側に建設されている。集落では三口遺跡（60）で10世紀代の緑釉陶器や墨書土器が出土している。

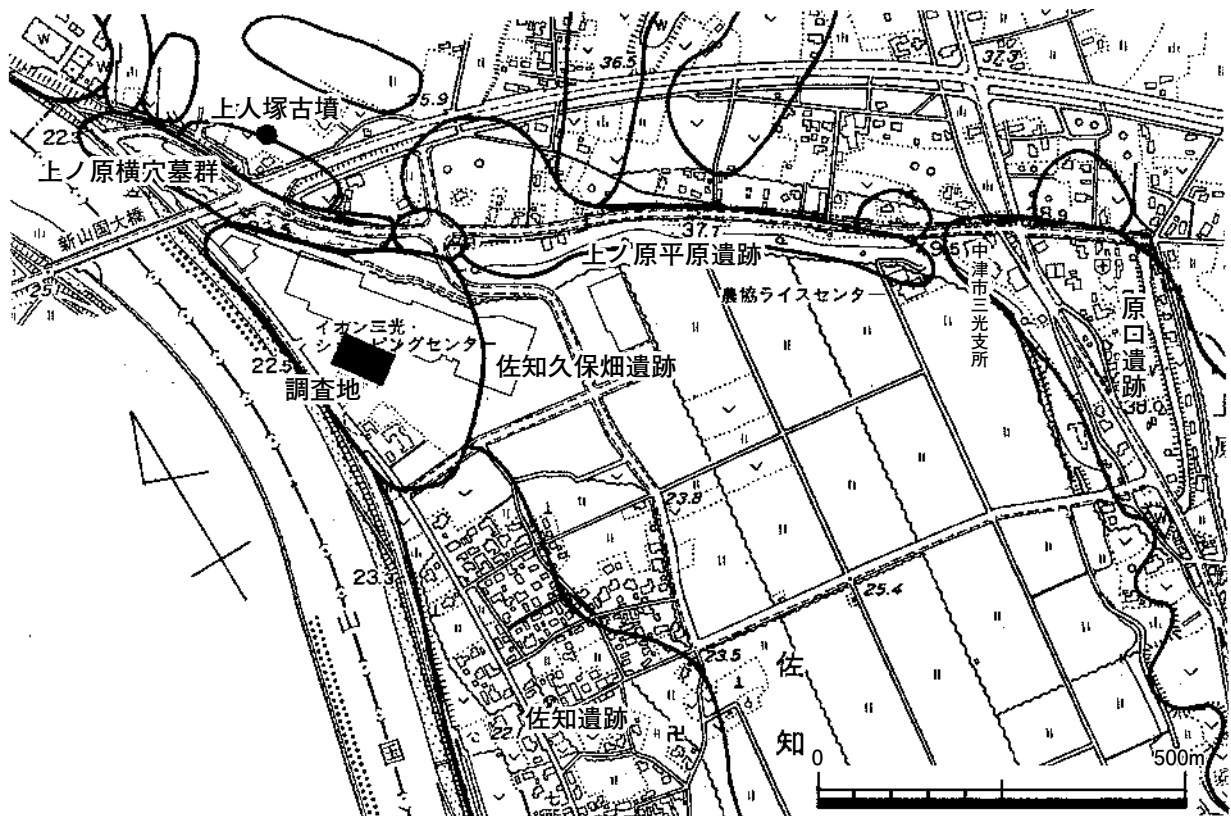
中世 中世の遺跡としては植野古城遺跡・諸田遺跡・中尾城跡・犬丸城跡などがあるが、諸田遺跡では堀に囲まれた居館跡が調査され、中尾城跡では土塁が現存する。犬丸城跡は犬丸氏の居城で、黒田官兵衛の豊前入国に従わず一揆に加わり、黒田氏に攻め落とされる。16世紀末には黒田氏が入封して中津城（1）が築城されるが、石垣に高度な構築技法が採用された九州最古の近世城郭とされている。

近世以降 1600年関ヶ原の合戦の後、黒田氏に替わり細川氏が入部し、城と城下町（2）が整備・拡張される。城下の造営は小笠原氏が入部する1632年に完成し、その後1717年に奥平氏が入部する。

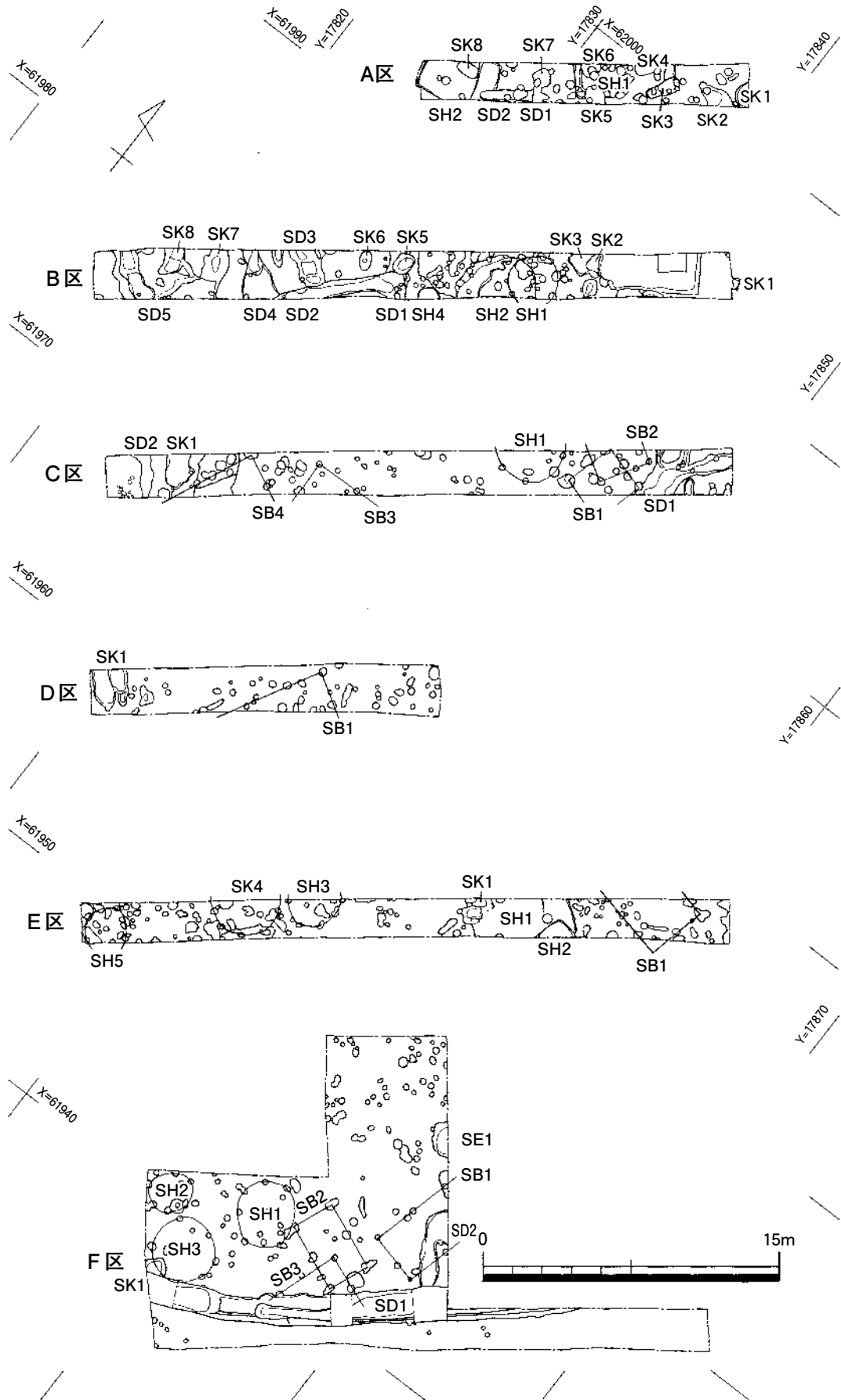
佐知久保畑遺跡2次調査地の周辺遺跡

佐知久保畑遺跡は豊富な水量に恵まれる山国川に隣接する河岸段丘上に立地することから、周辺には集落や墓地などが各時代にわたって断続的に営まれている（第2図）。南側に延びる佐知遺跡は縄文時代から中世にかけての集落跡であり、北東の段丘上位に位置する上ノ原平原遺跡は弥生時代から古墳時代の集落跡である。墓地としては北側の段丘上に上ノ原横穴墓群や上人塚古墳などが主として古墳時代に営まれている。

佐知久保畑遺跡では今回調査地の北東側のショッピングセンター建設に際して、平成4年度と10年度に対象面積約13,000㎡の大規模な発掘調査が行われている。検出された遺構は縄文時代後期から古墳時代に及ぶもので、竪穴住居跡30棟以上のほか掘立柱建物跡や土坑・溝状遺構などが多数調査されている。



第2図 佐知久保畑遺跡2次調査地位置図（縮尺=1/10,000）



第3図 佐知久保畑遺跡2次調査全体図 (縮尺=1/300)

第3章 調査の内容

佐知久保畑遺跡は山国川が沖代平野に流入する直前で蛇行する部位の東岸で、河岸段丘の最下段に立地する。今回の対象地はこの河岸段丘上に建設された大型商業施設内で、現況は駐車場として使用されているが、1990年代初頭までは水田や畑地となっていた土地で、標高は22m程度である。

大型商業施設建設に際して平成4年度と平成10年度に調査対象面積約13,000㎡に及ぶ大規模な発掘調査が実施され、縄文時代後期・晩期、弥生時代前期～後期、古墳時代前期・後期の長期間にわたる集落が断続的に営まれていたことが確認されている。

今回調査地の基本的な層位は、駐車場に伴うアスファルト・砕石と造成土が120cm～190cmと厚く築盛され、その下位に旧表土が30cm前後、さらにその下層にクロボク土が50cm～110cm前後堆積する。遺構検出を行った基盤層はこのクロボク土層の直下で灰黄色弱砂質土である。基盤層は総じて北西から南東に向かって次第に深くなり、現地表面からの深さは230cm～310cm程度である。

調査区は北西から南東に向かってA区・B区・C区・D区・E区・F区と一定の間隔を置いて、並行して設定した(第3図)。各調査区の形状は先述したとおり基本的に幅2.0mで北東-南西方向に主軸をとり、トレンチ状を呈することから、竪穴住居跡や掘立柱建物跡は全体像を確認できなかった遺構が多い。

1 A区

A区は調査対象地の最も北西側に設定した調査区で、長さは16.8mである。各種の遺構は比較的密集して検出された。検出した遺構のうち番号を付した主な遺構は竪穴住居跡2軒・土坑8基・溝状遺構2条である(第4図)。遺構検出面の標高は調査区北東部で約20.3mと低く、南西部では約20.6mと高くなっている。

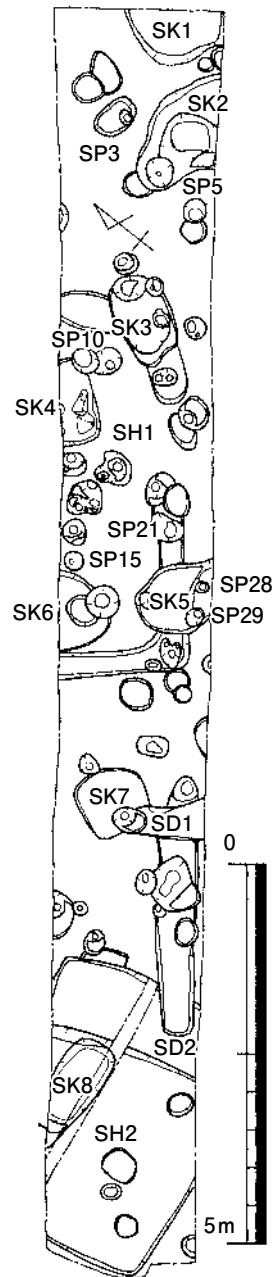
① 竪穴住居跡

竪穴住居跡は調査区中央部と南西部で平面形が方形のものが計2軒検出された。

1号竪穴住居跡(第5図)

1号竪穴住居跡はA区の中央部付近に位置し、遺構検出面の標高は約20.5mである。

遺構全体の1/3～1/4に相当する南東の一部しか調査区内では確認できなかったが、北西側の大部分は調査区外まで続いている。検出された遺構の部位は「コ」の字形につながる北東辺・南東辺・南西辺の周壁直下の周溝の一部と、南側・東側の柱穴各1本である。周壁や床面は削平されている可能性がある。周溝は東隅が3号土坑、南東辺の南側が5号土坑によって切られており、南東



第4図 佐知久保畑遺跡2次調査A区全体図(縮尺=1/100)

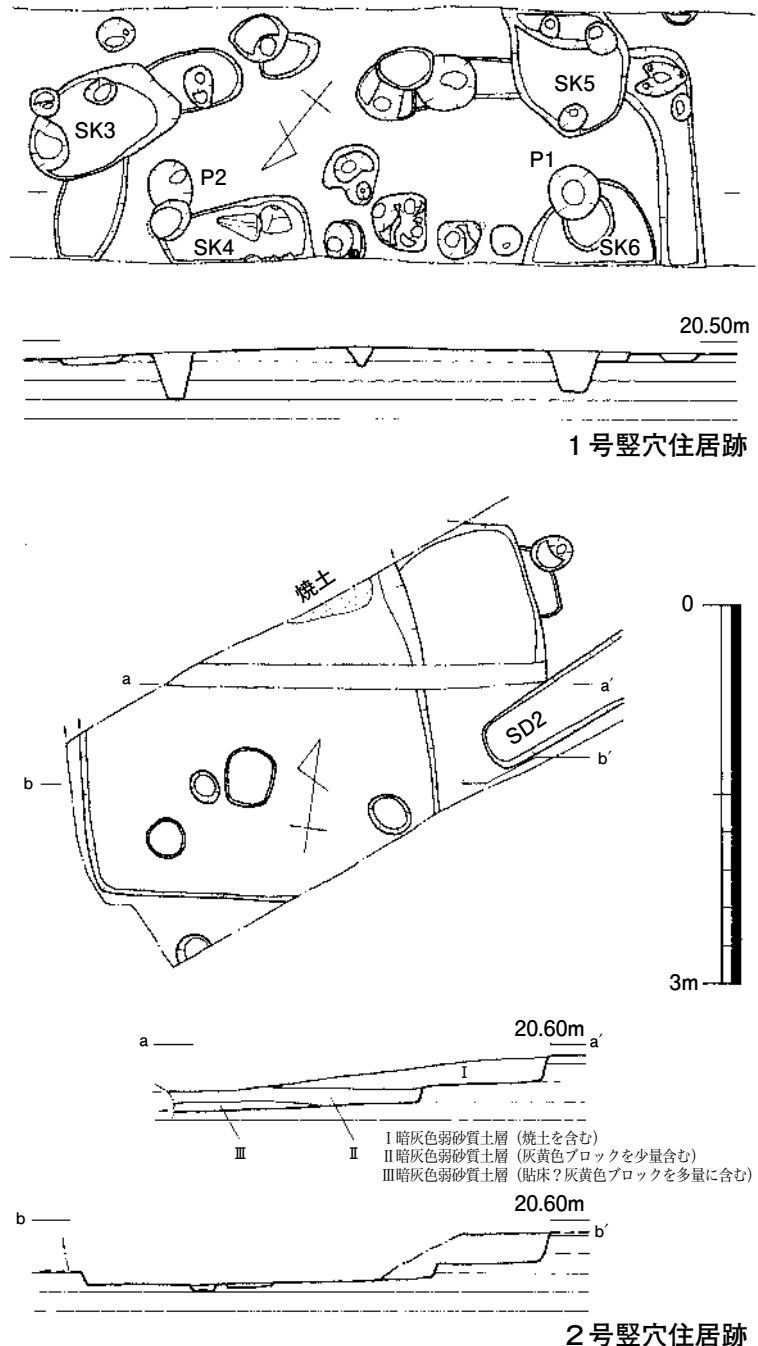
辺の中央部付近は一部途切れているが全体としては方形にめぐっていたと考えられる。周溝の幅は30cm～50cmで、深さは5cm前後と浅く、底面は平坦である。北東辺と南西辺の間隔は外縁部で5.16mをはかり、この長さが住居跡の規模となる。支柱穴はP1・P2の2本が残存した。P1は住居跡床面の南側隅に位置し、6号土坑を切っている。平面形は検出面の直径が40cmの円形、深さは33cmである。P2は東側隅に位置し、平面形は長径40cm前後、短径33cmの楕円形を呈し、深さは35cmである。P1とP2の間隔は芯々で3.15mである。炉やカマド等は残存せず、焼土も検出されなかった。住居跡の主軸の方位はP1・P2を結ぶ線を基準にするとN-52°-Eである。

遺物は弥生土器の甕の小片と姫島産黒曜石のフレイクが出土しているが、遺構の時期を特定できるものではない。

2号竪穴住居跡 (第5図・第8図)

2号竪穴住居跡はA区の南西端部に位置し、遺構検出面の標高は約20.5mである。

遺構の南側と西側は調査区外まで続いており、検出した範囲は遺構全体の2/3程度かと考えられる。東部の一部が2号溝状遺構に切れ、床面の中央やや北側で8号土坑を切っている。検出された遺構は全体的に方形の平面形をなし、東辺には一段高いテラス状の遺構を伴う。床面では浅いピットが数基検出されたが、支柱穴は確認できなかった。テラス状の遺構は東辺に沿って幅0.9m・長さ2.15m分が検出され、段差は床面に比べて8cmほど高くなっている。住居跡全体の東西幅は検出した部分で3.7m、テラス状の遺構を除く床面の東西幅は2.7mである。床面の深さはもっとも残りの良い部分で北東部の遺構検出面を基準として40cmをはかる。床面の西半を中心に灰黄色ブロック土を多量に含む暗灰色弱砂質土層が検出されたが、これは貼床かと考えられる。なお、床面で炉跡は検出されなかったが、北側の埋土中には焼土が幅80cm前後にわたって堆積していた。この部分には検出できなかった竪穴住居跡等の



第5図 A区竪穴住居跡実測図 (縮尺=1/60)

他の遺構が切り合っていた可能性がある。住居跡の主軸の方位は北辺に出入り口があったと想定するとN-11°-Wである。

遺物は遺構内の埋土中から弥生土器の甕・壺、土師器の甕・甗、須恵器の甕・高杯などが出土した(第8図1～15)。1～9は弥生土器で、1～5が甕、6～9が壺である。1は口縁部が水平な鋤先状をなし、壺の可能性もある。2・3は口縁部が大きく開き、端部を上方につまみ上げる。4・5は底部で、底面が平底で器壁がやや厚く、4にはタテハケがよく残る。6は体部で二枚貝による施文がある。7・8は底部で、ともに平底で、7にはタテハケが施されている。9は体部で三角突帯を2条めぐらす。10～13は土師器で、10・11が甕、12・13が甗である。10は体部の張りが弱い長胴タイプで、口縁部が如意状に外反する。11は口縁部が水平に近く、大きく外反する。12・13は取手部分で、12の取手は比較的細くて長い。14・15は須恵器で、ともに高杯の坏部かと考えられる。14は体部から口縁部に向かって外反気味に延び、15は内湾気味に立ち上がる。

② 土坑

土坑は調査区全体に分散し、計8基が確認された。規模は1m前後のものが大部分で、平面形は隅丸方形や楕円形のものが多い。

1号土坑(第6図・第8図)

1号土坑は調査区の北東端部に位置し、北東側の一部が調査区外に続いている。遺構検出面の標高は約20.2mである。

検出した遺構は全体の1/2～1/3程度で、平面形は基本的には隅丸方形かと考えられる。遺構の規模は調査した部分で長さ1.2m・幅0.9mである。壁面は垂直よりもやや開き気味に立ち上がる。床面は中央部に向かってやや皿状に窪み、深さは最深部で遺構検出面から22cmである。遺構の用途は不明である。

遺物は弥生土器の甕と壺が少量出土している(第8図16・17)。16・17はともに弥生土器の甕の口縁部から体部上位の破片である。16は口縁部が如意状に外反し、直下に三角突帯をめぐらす。17は直立する体部から口縁部が短く水平に開く。

2号土坑(第6図)

2号土坑は1号土坑の南西側に隣接し、南東側が調査区外まで延びている。遺構検出面の標高は約20.2mである。

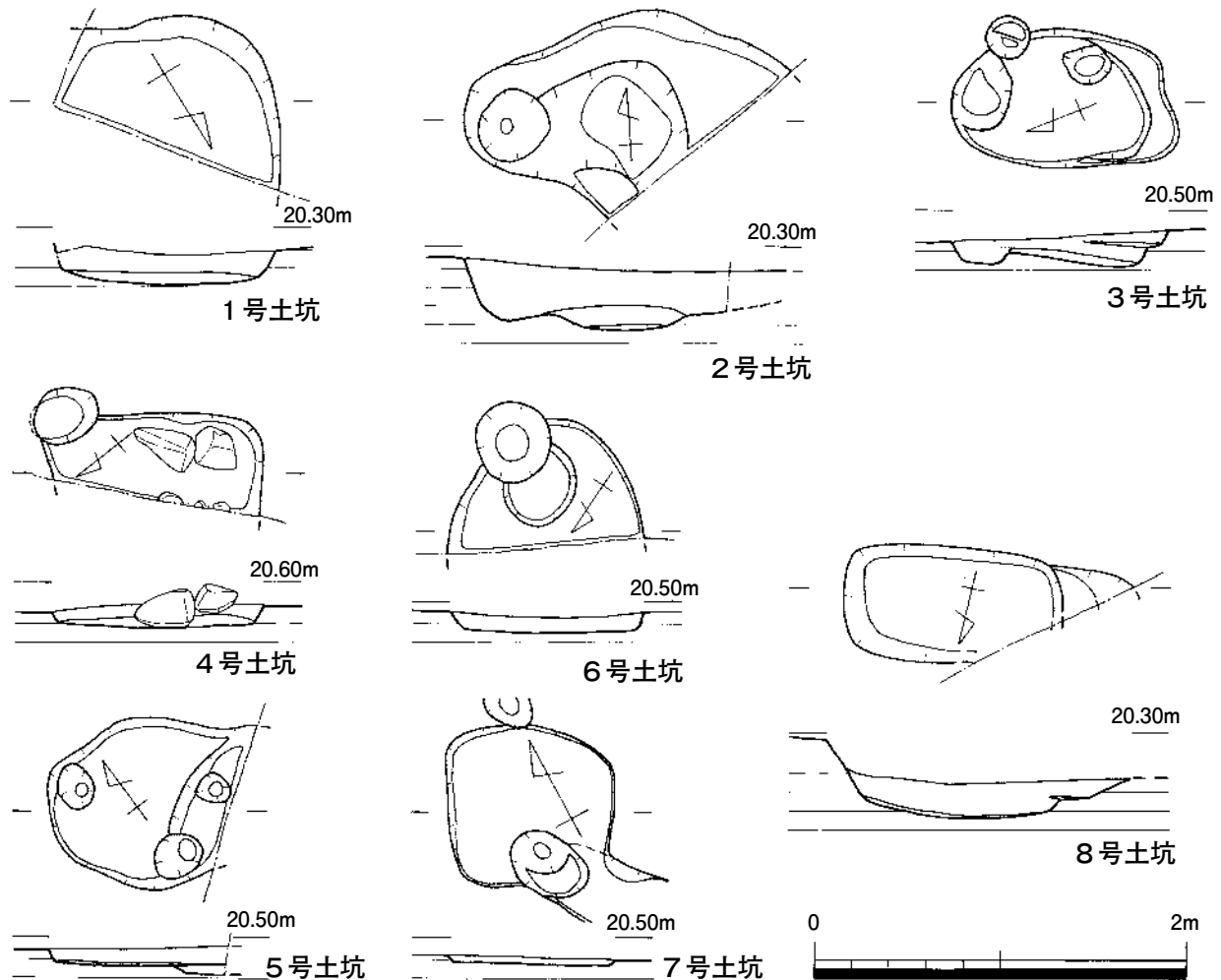
全体の平面形は不整形ではあるが長楕円形ないしは溝状を呈すると推定され、遺構の規模は調査した部分で長さ1.8m・幅1.15mである。壁面の立ち上がりはゆるやかで、南西部に狭いテラス状の平坦面を有する。床面は皿状に窪み、中央部が一段深くなっている。深さは最深部で38cmである。遺構の用途は不明である。

遺物は弥生土器の器種不明の小片が微量出土しているだけである。

3号土坑(第6図・第8図)

3号土坑は調査区の北東部に位置し、1号竪穴住居跡の周溝を切っている。遺構検出面の標高は約20.4mである。

遺構の平面形は楕円形を呈し、規模は長径1.22m・短径0.75mである。南側に幅10cm～15cm、深さ7cm前後の狭いテラスが付随する。東辺は小ピットに切られており、北側にもピット状のくぼみがある。床面は平坦ではあるが、全体的に南側に向かってやや深くなっている。深さは最深部で19



第6図 A区土坑実測図 (縮尺=1/40)

cmである。遺構の用途は不明である。

遺物は弥生土器の甕と壺が少量出土している (第8図18)。18は甕の口縁部の小片で、端部に向かって水平に近く大きく開く。

4号土坑 (第6図・第8図)

4号土坑は3号土坑の西側に位置し、一部が調査区外まで続いている。遺構検出面の標高は約20.5mである。

検出した遺構は全体の1/2前後で、平面形は方形ないしは台形と考えられる。東隅は楕円形のピットに切られている。規模は長さが1.2mで、幅は0.5m分を調査した。床面はほぼ平坦で、深さは11cmと浅い。遺構内からは径30cm前後のやや大型の礫が2個投棄されたような状態で出土した。遺構の性格は廃棄土坑の可能性はある。

遺物は弥生土器の甕が少量出土している (第8図19)。19は口縁部の小片で、短く如意状に開き器壁が厚い。

5号土坑（第6図）

5号土坑は調査区中央部付近に位置し、1号竪穴住居跡の周溝を切り、南東側が調査区外まで続いている。遺構検出面の標高は約20.4mである。

検出した遺構は全体の3/4程度で、平面形は楕円形と考えられる。遺構内は3基の小ピットに切られている。遺構の規模は長径が1.1m以上で、短径は0.92mである。床面は全体的に平坦ではあるが、南東側が一段低くなっている。床面の深さは最深部で16cmとやや浅い。遺構の用途は不明である。

遺物は弥生土器の甕かと考えられる小片が微量出土しているだけである。

6号土坑（第6図・第8図）

6号土坑は5号土坑の北西に隣接し、北西側が調査区外まで続いている。遺構検出面の標高は約20.4mである。

検出した遺構は全体の半分程度と考えられ、平面形は楕円形である。遺構の南東部が円形ピットに切られる。規模は検出した長径が0.66m以上、短径が1.05mである。床面には径42cmのやや大きな楕円形ピットが切り込んでいるが、全体としては平坦である。床面の深さは11cmと浅い。遺構の用途は不明である。

遺物は弥生土器の甕と壺が少量出土している（第8図20）。20は壺の体部上位の破片で、三角突帯をめぐらす。

7号土坑（第6図）

7号土坑は調査区中央部よりやや南西側に位置し、1号溝状遺構に切られている。遺構検出面の標高は約20.4mである。

遺構の平面形は基本的に隅丸正方形で、南西辺は楕円形ピットに切られている。遺構の規模は長さ0.90m・幅0.88mである。床面は平坦面をなし、深さは5cmとごく浅い。主軸の方位はN-26°-Eである。遺構の用途は不明である。

遺物は出土していない。

8号土坑（第6図・第8図）

8号土坑は調査区南西部に位置し、2号竪穴住居跡の床面で遺構が検出された。遺構検出面の標高は約20.1mである。

遺構の一部は調査区外に続いているが、平面形は東西方向に長い長方形をなすと考えられる。規模は長さが1.56m以上、幅は0.63mである。西側がテラス状に一段高くなっているが、床面は中央部がゆるやかに窪み気味である。深さは検出面からの最深部で26cmである。主軸の方位はN-77°-Eである。遺構の性格は土壙墓の可能性があり、その場合テラス状の段は作り付けの枕と想定される。

遺物は弥生土器の甕や壺が中量出土している（第8図21～26）。21～25は弥生土器で、21が壺、22～25は甕である。21は内外面の調整がヘラミガキである。22は外反しながら大きく開く口縁部である。23には三角突帯がめぐらされている。24・25は体部下位から底部で、ともに外面にはタテハケを施す。26は土師器の壺かと考えられる小片である。

③ 溝状遺構

溝状遺構は調査区のやや南西側で2条が確認された。

1号溝状遺構（第7図）

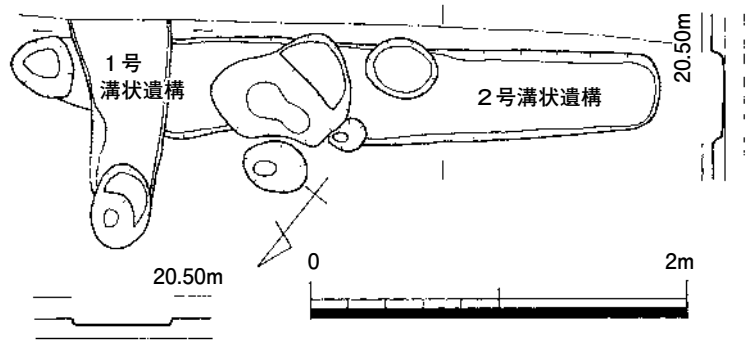
1号溝状遺構は7号土坑と2号溝状遺構を切り、南東側が調査区外まで延びている。遺構検出面の標高は約20.4mである。

遺構は北西-南東方向に直線的に延び、北西端部がピットに切られている。遺構の規模は調査範囲内で長さが0.95m、幅が0.54mである。底面は平坦で、深さは4cmとごく浅い。主軸の方位はN-36°-Wである。

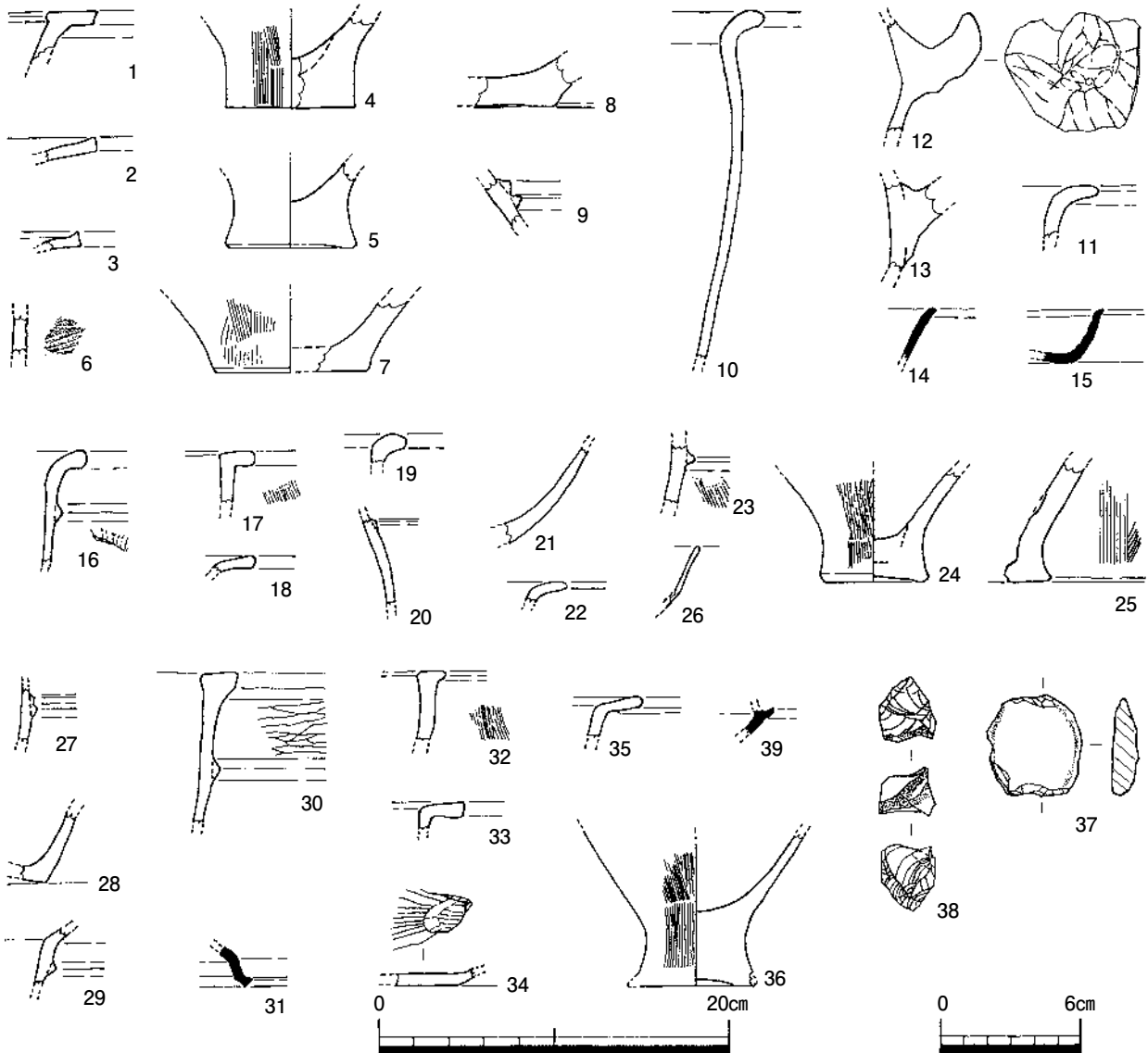
遺物は弥生土器の甕が微量出土している。

2号溝状遺構 (第7図・第8図)

2号溝状遺構は北東部が1号溝状遺構に、北東端部や中央部付近もピット等に切られていて、南



第7図 A区溝状遺構実測図 (縮尺=1/40)



第8図 A区出土遺物実測図 (縮尺=37・38は1/3、他は1/4)

西部は2号竪穴住居跡を切っている。遺構検出面の標高は約20.4mである。

遺構は1号溝状遺構と直交するように北東－南西方向に直線的に延びている。検出した遺構の規模は長さ3.44mで、幅は最も広い部分で0.53mである。底面は全体的に平坦で、深さは最深部で12cmである。主軸の方位はN-55°-Eである。

遺物は弥生土器の甕・壺、須恵器の甕かと考えられる破片などが少量出土している（第8図27）。27は弥生土器の壺の体部でM字状の突帯をめぐらす。

④ その他の遺構

A区では上述した遺構以外にも約50基のピット等が調査されており、1号溝状遺構の周辺では円弧を描いて配置するピット群などもあることから、把握し切れていない住居跡等が分布する可能性がある。ここでは個別遺構の説明は省略し、ピット等からの出土遺物のみ報告する（第8図28～39）。28～36はピットから出土した弥生土器や土師器・須恵器である。28・29は3号ピットから出土し、28は壺の底部で、上げ底気味である。29は甕の口縁部から体部上位で、口縁部直下に三角突帯をめぐらす。30は5号ピットから出土した甕の口縁部から体部上位で、口縁端部を肥厚させて水平面をつくり、やや下位に三角突帯をめぐらす。31は10号ピットから出土した須恵器の蓋で、体部下位で屈曲したのち口縁部が短く外反する。32は15号ピットから出土した甕の口縁部で、上端部に水平面をつくる。33は21号ピットから出土した甕の口縁部で、水平に大きく開く。34は28号ピットから出土した土師器の皿かと考えられる破片で、内外面ともにヘラミガキを施す。35・36は29号ピットから出土した弥生土器である。35は甕の口縁部で、くの字状に屈折して水平に近く開く。36は体部下位から底部で、外面にタテハケが残る。37は17号ピットから出土した石錘で、扁平な円礫の上下両端に抉りを施す。38は21号ピットから出土した姫島産黒曜石の石核で、一部に自然面が残る。39は表面採集の須恵器の坏身の小片である。

2 B区

B区はA区の南東側に並行する調査区で、芯々でA区とは9.9m隔てている。調査区の長さは32.4mである。A区と同様に各種遺構は比較的密集して検出された。検出した遺構のうち番号を付した主な遺構は竪穴住居跡2軒・土坑7基・溝状遺構5条である（第9図）。遺構検出面の標高は調査区の両端部では20.2m前後と低く、中央部付近では20.5m程度と高くなっている。なお、調査区北東部は近年の掘削により長さ5.0mにわたって遺構は破壊され、コンクリート構造物が設置されている。

① 竪穴住居跡

竪穴住居跡は調査区中央部よりやや北東側で平面形が円形のもの2軒が重複して検出された。

1号竪穴住居跡（第10図・第13図）

1号竪穴住居跡は2号竪穴住居跡と切り合うが、先後関係は不明である。また、南東側は調査区外まで続いている。遺構検出面の標高は約20.3mである。

検出された当遺構を構成するものはやや楕円形に配置された支柱穴5本だけで、周壁は削平されていた。遺構の規模は支柱穴P2－P5間の長径が芯々で2.55mであり、床面の大きさは直径4m～5mと推定される。各柱穴の間隔はP1－P2間が1.86m、P2－P3間が1.09m、P3－P4間が1.05m、P4－P5間が1.21mで、P5－P1の間には調査区外に柱穴がもう1本存在すると推定される。これら柱穴の平面形は楕円形のものが多いが、P5はやや隅丸方形に近い形態である。柱

穴の大きさは、P 3・P 4が他のピットと重複するため不明であるが、全体的に30cm～40cm程度である。深さは21cm～50cmである。明確な柱痕跡は検出できなかった。また、炉跡や焼土も確認できていない。

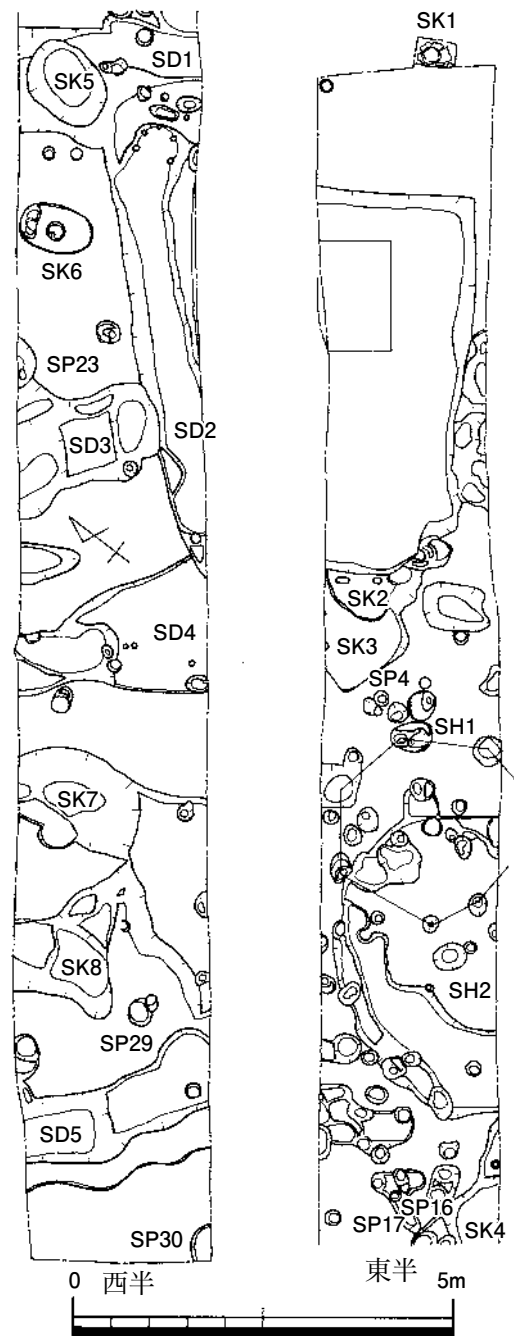
遺物は柱穴P 3・P 5から弥生土器の甕や壺が少量出土している（第13図40・41）。40・41はともに甕の小片である。40の口縁部直下には沈線を1条めぐらす。41の口縁部は外上方に直線的に開く。

2号竪穴住居跡（第10図・第13図・第14図）

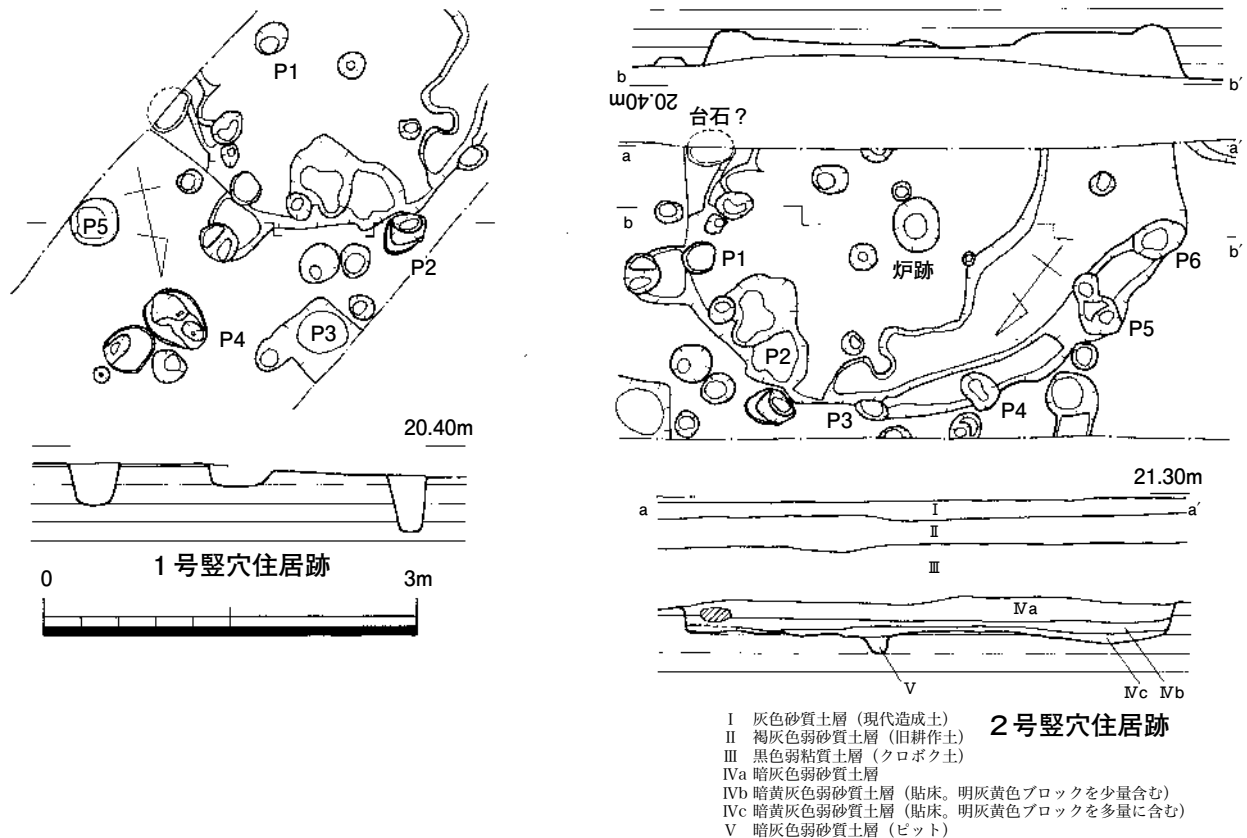
2号竪穴住居跡は1号竪穴住居跡と切り合い、南東側が調査区外まで続いている。遺構検出面の標高は約20.4mである。

検出された当遺構を構成する部位は周溝・柱穴・炉跡などである。遺構は全体の1/2程度が調査されたが、平面形は南北方向にやや長い楕円形を呈し、長径が4.05mである。周溝は西側の一部で長さ2.55mにわたって残存し、幅は30cm前後、深さは遺構検出面から15cm前後である。柱穴は周壁の内側に接するようにして6本が確認された。各柱穴の間隔はP 1－P 2間が0.97m、P 2－P 3間が0.89m、P 3－P 4間が0.85m、P 4－P 5間が1.17m、P 5－P 6間が0.75mである。これらの柱穴は平面形が楕円形のものが多く、大きさは35cm前後である。深さは5cm～10cm前後と全体的に浅い。床面は西側が不整形にくぼみ気味であるが、全体的に貼床かと考えられる上下2層の暗黄灰色弱砂質土に明灰黄色ブロック土を含む土層堆積が確認された。床面の深さは中央部付近で遺構検出面より25cm程度深くなっている。炉跡は床面の中央部付近に配置され、平面形は長径44cm・短径38cmの楕円形を呈する。断面形は皿状を呈し、深さは6cmで、埋土には暗灰色土や焼土のブロックが含まれていた。これら以外にも、周壁の東側に接して作業用の台石かと考えられる円礫が検出された。この礫は平面形がやや楕円形で、大きさは長径38cm・厚さ8cmである。

遺物は埋土中から弥生土器の甕・壺などが多量に出土したほか、磨石・砥石・投弾・石鏃などの石器も出土している（第13図42～62、第14図63～67）。42～48・56・62は甕である。42～46は口縁部の破片で、42・44・45は屈折して開き、45の直下には沈線を2条めぐらす。44・46の端部はなでてややくぼませる特徴がある。47・48は底部で、円筒形に近い器形で器壁が厚く、上げ底気味である。56には三角突帯がめぐらされている。62は口縁部が外上方に屈折し、外面にタテハケを施す。49～55・57～61は壺である。49～51は鋤先状の口縁部をもち、52は口縁部上面を肥厚さ



第9図 佐知久保畑遺跡2次調査B区全体図（縮尺=1/100）



第10図 B区竖穴住居跡実測図 (縮尺=1/60)

せる。54は朝顔形に外反しながら長くのびる口縁部である。57～59は体部で、57・58は最大径部に三角突帯をめぐらし、59は体部上位に断面がM字に近い突帯をめぐらす。60・61はともに底部で、外面にはヘラミガキを施す。63～67は石器である。63はやや大型の磨石で、平面形が楕円形で周縁部に敲打痕が残る。64は小型の砥石で、上下両面を砥面として使用している。65は投弾と考えられ、球形に近い形状をなす。66・67は打製石鏃とともに黒曜石製である。

② 土坑

土坑として番号を付した遺構は8基で、B区の調査区全体に分散している。

1号土坑 (第11図・第13図)

1号土坑は調査区北東端部の壁面で検出された遺構で、調査区外まで延びていると考えられる。遺構検出面の標高は約20.9mである。

遺構はクロボク土中に掘り込まれており、全体的な掘り方は検出できなかった。遺構の構成要素としては弥生土器のやや大型の甕と、その上に径24cmのほぼ円形で厚さ6cmの礫が置かれていた。甕は横倒しにした状態の下半分しか出土していないため、円礫が完形の甕の内部に入れられていたものか、廃棄された甕の上に偶然に礫も廃棄されたものかは不明である。前者の場合、遺構の性格は小児用甕棺の可能性があり、後者の場合には遺構全体が廃棄土坑であったと考えられる。

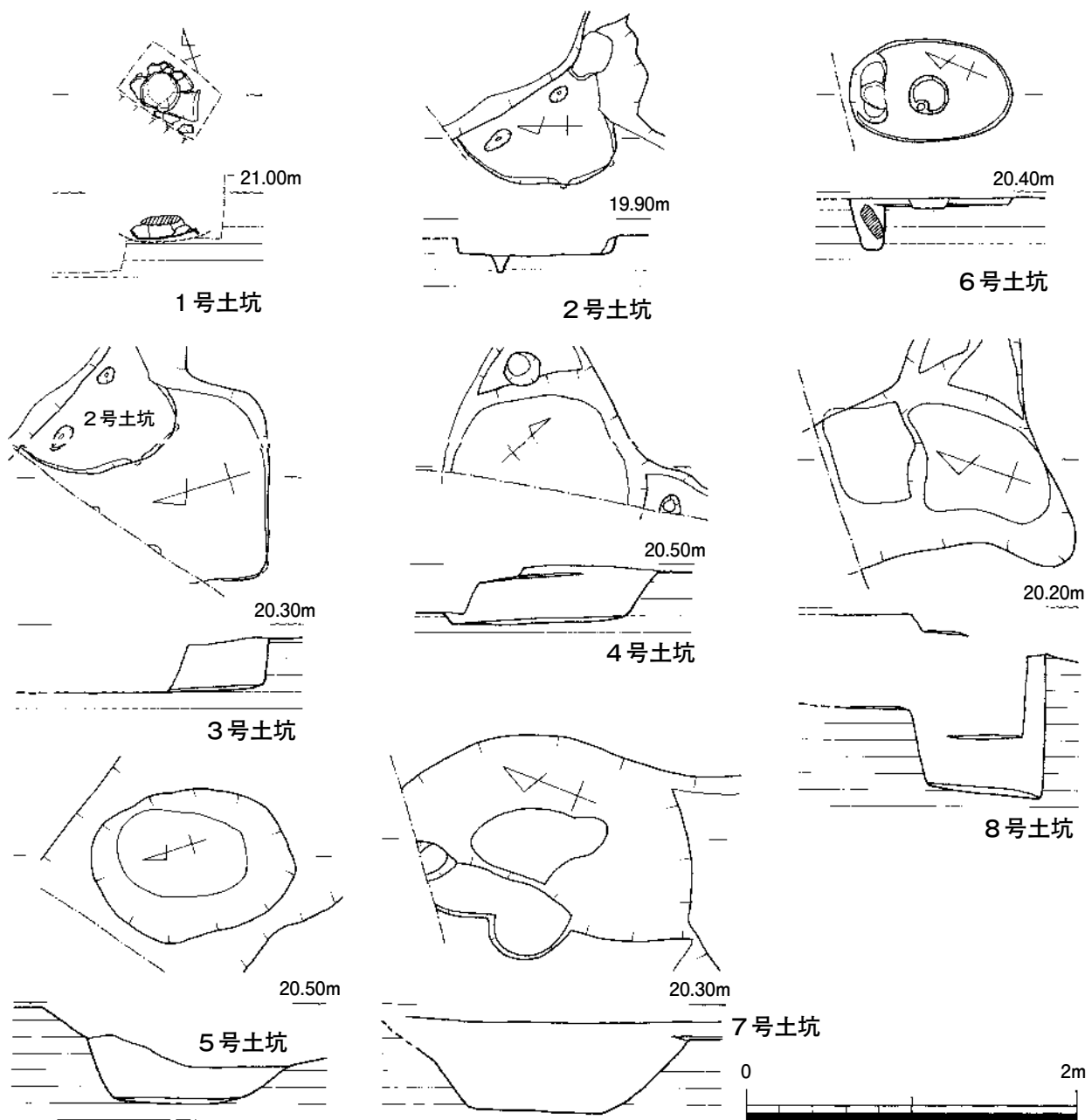
出土した土器はこの弥生土器の甕1点のみである (第13図68)。この土器はやや大型で、器高に対して口縁部の径が大きく、体部最大径が上位にある器形を呈する。口縁部の内径は34cmをはかる。口縁部はくの字状に強く外反しながら開き、直下に断面三角形の突帯をめぐらす。底面はわずかに

上げ底気味か。器面の調整は外面では上位から中位が横方向、下位では縦方向にヘラミガキを施し、内面は上位から中位に横方向のヘラミガキを施す。

2号土坑 (第11図)

2号土坑は調査区北東部に位置し、3号土坑と切り合い、北東半が近年の掘削坑で削平されている。遺構検出面の標高は約20.2mである。

遺構の平面形は楕円形に近いものと推定され、残存率は1/2程度であろう。南西側の3号土坑との切り合い関係は不明である。遺構の規模は北東-南西方向の残存長が0.62m、幅が1.25mである。壁面は残りの良い南東部では上位で垂直に近く立ち上がる。床面はほぼ平坦で、長径15cm前後の小ピットが2基残存する。このピットは杭状のものを立てた痕跡かもしれない。床面の深さは南東部の検出面から40cmをはかる。遺構の用途は断定できないが、床面に杭を立てていた場合は落とし穴の可能性が考えられる。



第11図 B区土坑実測図 (縮尺=1/40)

遺物は弥生土器の甕等が少量出土している。

3号土坑 (第11図・第13図)

3号土坑は2号土坑と切り合う。遺構検出面の標高は約20.2mである。

遺構は北側が調査区外まで続いているが、平面形は基本的に隅丸方形と考えられる。規模は南北方向の検出長が1.50m、幅は1.18mである。壁面の立ち上がりは全体的に垂直に近い。床面は平坦で、深さは28cmである。主軸の方位はN-16°-Eである。遺構の用途は貯蔵穴の可能性はあるが、断定はできない。

遺物は弥生土器の甕・壺、姫島産黒曜石のフレイクなどが中量出土している (第13図69～74)。69～73は甕で、70の口縁部は屈折して直線的にやや長くのびる。71～74は底部で、器壁が非常に厚い。74は朝顔形に開く壺の口縁部で、外面にタテハケが残る。

4号土坑 (第11図・第13図)

4号土坑は調査区中央部付近に位置し、1号溝状遺構と切り合っている。遺構検出面の標高は約20.5mである。

遺構は南東側が調査区外まで続いているが、平面形は楕円形かと考えられる。南西辺は1号溝状遺構と切り合っているが、先後関係は不明である。遺構の規模は北西-南東方向の検出長が0.75m、幅は1.24mである。壁面の立ち上がりは比較的急角度である。床面は平坦で、深さは27cmである。遺構の用途は不明である。

遺物は弥生土器の甕・壺などが中量出土している (第13図75・76)。75は甕の口縁部の小片で、外縁部をわずかにくぼませる。76は壺の体部上位の小片で、二枚貝による施文がある。

5号土坑 (第11図)

5号土坑は4号土坑の西側に隣接し、1号溝状遺構を切っている。遺構検出面の標高は約20.5mである。

遺構の平面形は楕円形で、規模は長径1.00m・短径0.90mである。壁面の傾斜は北側から東側はやや急角度である。床面は平坦面に近く、深さは47cmとやや深い。主軸の方位はN-18°-Eである。遺構の用途は不明である。

遺物は出土していない。

6号土坑 (第11図)

6号土坑は5号土坑の南西に隣接する。遺構検出面の標高は約20.4mである。

遺構の平面形は楕円形で、北端部が柱穴状のピットと切り合い、中央部も円形ピットに切られている。遺構の規模は長径0.98m・短径0.63mである。床面は平坦で、深さは4cmとごく浅い。主軸の方位はN-24°-Wである。遺構の用途は不明である。

遺物は弥生土器片が微量出土しているだけである。

7号土坑 (第11図)

7号土坑は調査区南西部に位置する。遺構検出面の標高は約20.2mである。

遺構は北西端部が調査区外に続き、上面はピット等で切られている。遺構の平面形は南北方向に長い楕円形で、規模は南北方向の検出長1.67m、幅1.14mである。壁面は40°前後の角度で立ち上がる。床面は平坦であるが、検出面に比べて面積は小さい。深さは63cmと深い。遺構の用途は不明である。

遺物は出土していない。

8号土坑（第11図・第13図）

8号土坑は7号土坑の南西に隣接する。遺構検出面の標高は約20.2mである。

遺構の北西側は調査区外まで延びている。平面形は検出部分ではやや不整形な楕円形を呈するが、溝状に近い形態の可能性もある。遺構の規模は検出長1.49m、幅0.99mである。北側にテラス状の平坦面を有し、壁面は南東辺がほぼ垂直である。床面は平坦であるが、北側に比べて南側が深くなっており、最深部は105cmと非常に深い。遺構内から多量の土器が出土したことから、遺構の用途は廃棄土坑かと考えられる。

遺物は縄文土器、弥生土器の甕・壺・蓋、土師器の甕・高坏、須恵器の坏蓋・坏身・壺・甕など各時代の様々な土器が多量に出土している（第13図77～95）。77～82は弥生土器である。77は直立する口縁部の直下に刻目突帯をめぐらす下城式の系譜の甕である。79は外反しながら大きく開く壺の口縁部である。80は平底で、外面にタテハケを施す壺の底部である。81は壺の体部上位の小片で、ヘラ描きの羽状文を施す。82は蓋の口縁部の小片である。83～85・94・95は土師器である。83の口縁部は強く屈曲し、端部に垂直な面をつくる。84は小型の丸底の甕で、口縁部が小さく外反し、体部は半球形に近い。器面の調整が荒く、内面はほぼ全面にヘラケズリを施す。85は高杯の脚部の小片で、円孔を穿つ。94は甕で、口縁部が如意状に開き、長胴で、体部の最大径が中位にある。体部の器面調整は内外面ともハケ目であるが、外面が全面タテハケであるのに対し、内面は上端部と下位はヨコハケである。95は甕の口縁部から体部上位の破片で、口縁部がゆるやかに外反しながら立ち上がり、取手部はやや扁平である。器面調整は基本的に外面がタテハケ、内面がヨコハケである。86～93は須恵器である。86・87は坏蓋である。88は坏身で口縁部の立ち上がりはやや低い。89・90は高杯の脚部で、ともに短脚である。91は短頸壺である。93は体部最大径部に削り出しの低い突帯をめぐらす。

③ 溝状遺構

溝状遺構は調査区中央部から南西部にかけて5条が検出された。

1号溝状遺構（第12図）

1号溝状遺構は調査区中央部に位置し、2号溝状遺構と5号土坑に切られている。遺構検出面の標高は約20.4mである。

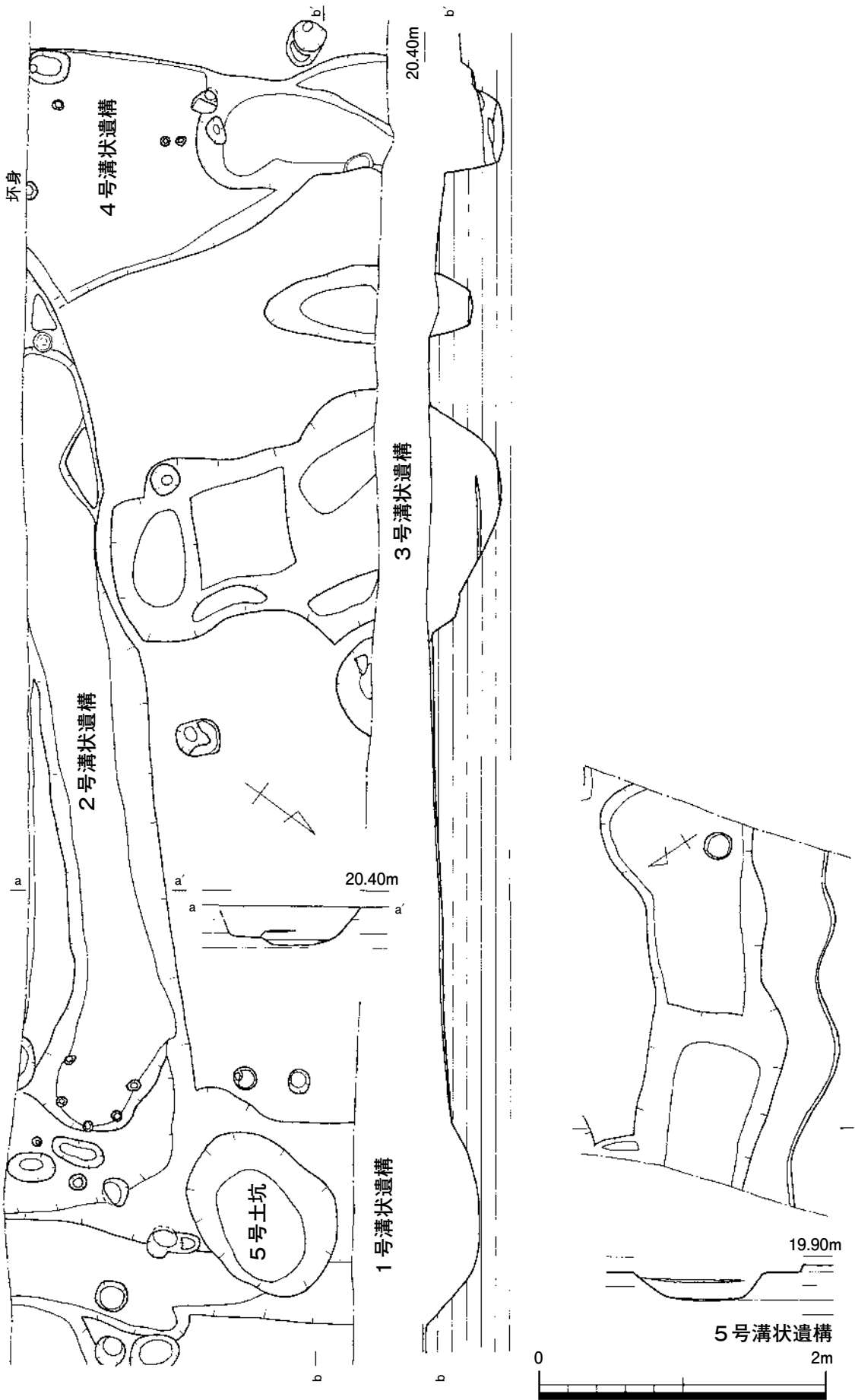
遺構は北西－南東方向に主軸をとり、両側は調査区外まで延びている。検出した範囲の南東半には円形ないし楕円形の大小のピットが7基程度切り合っている。遺構の規模は検出長2.44m・最大幅1.58mである。底面は北東部では平坦であるが、南東部は凹凸がある。深さは最深部で34cmである。主軸の方位はN-32°-Wである。

遺物は弥生土器の甕や壺が少量出土している。

2号溝状遺構（第12図・第14図）

2号溝状遺構は1号溝状遺構の南西側に位置し、1号溝状遺構を切り、3号溝状遺構に切られている。遺構検出面の標高は約20.3m～20.4mである。

遺構は直線的に北東－南西方向に主軸をとり、南西側は調査区外に延び、北東端部では南東に屈曲し調査区外まで延びている。検出した遺構の規模は長さ6.4m・最大幅1.1mである。断面形は基本的に逆台形を呈するが、北東部には南東側にテラス状の平坦面を有する。また、北東の屈曲部には径7cm前後の小ピット6基が半円形に並んでおり、杭の痕跡の可能性もある。遺構の底面はほぼ平坦であるが、標高は北東部に比べて南西部が7cmほど高くなっている。底面の深さは25cm前後である。



第12図 B区溝状遺構実測図 (縮尺=1/40)

主軸の方位はN-45°-Eである。遺構の用途は何らかの施設を囲む区画溝と考えられる。

遺物は弥生土器の甕・壺・器台、須恵器の坏身・甕などと姫島黒曜石フレイクなどが中量出土している（第14図96～105）。96～104は弥生土器で、96～102が甕である。96・97の口縁部は端部を上方につまみ上げる。99は口縁部が水平に近く開く。100～102は底部で、101・102は底面の器壁がやや薄く、外面の下端部を外方にふくらませる。103は壺の口縁部から体部上位の小片で、口縁部がくの字状に強く屈折する。104は器台の脚部かと考えられ、内縁が尖り気味に接地する。105は須恵器の坏身で完形である。全体的にやや低平な器形で、口縁部の立ち上がりはやや低い。

3号溝状遺構（第12図・第14図）

3号溝状遺構は2号溝状遺構を切っている。遺構検出面の標高は約20.4mである。遺構は南東端部が土坑状の遺構と切り合うが、北西-南東方向に直線的に延び、北西側は調査区外まで続いている。検出した遺構の規模は全長1.87m・幅1.25mである。北東側の側壁には小さいテラス状の平坦面があり、北西部は底面が一段低くなっており、全体としては断面形が逆台形に近い形状である。底面は最深部で深さ52cmをはかる。主軸の方位はN-51°-Wである。

遺物は弥生土器の甕、瓦器の塊などが少量出土している（第14図106）。106は瓦器塊の口縁部から体部中位で、内面に横方向のヘラミガキを施す。

4号溝状遺構（第12図）

4号溝状遺構は3号溝状遺構の南西側に隣接し、2号溝状遺構に切られる。遺構検出面の標高は約20.3mである。

遺構は北西-南東方向に主軸をとり、遺構内では大小のピットが7基検出された。遺構の規模は検出長が2.58mで、幅は南東端部が1.78mと広く、北西端部は0.82mと狭くなっている。底面は北西半が一段低くなっているが、これは他の土坑状の遺構と切り合っているためかもしれない。深さは最深部で45cmである。主軸の方位は3号溝状遺構とほぼ平行でN-52°-Wである。

遺物は弥生土器の甕や土師器片が少量出土している。

5号溝状遺構（第12図）

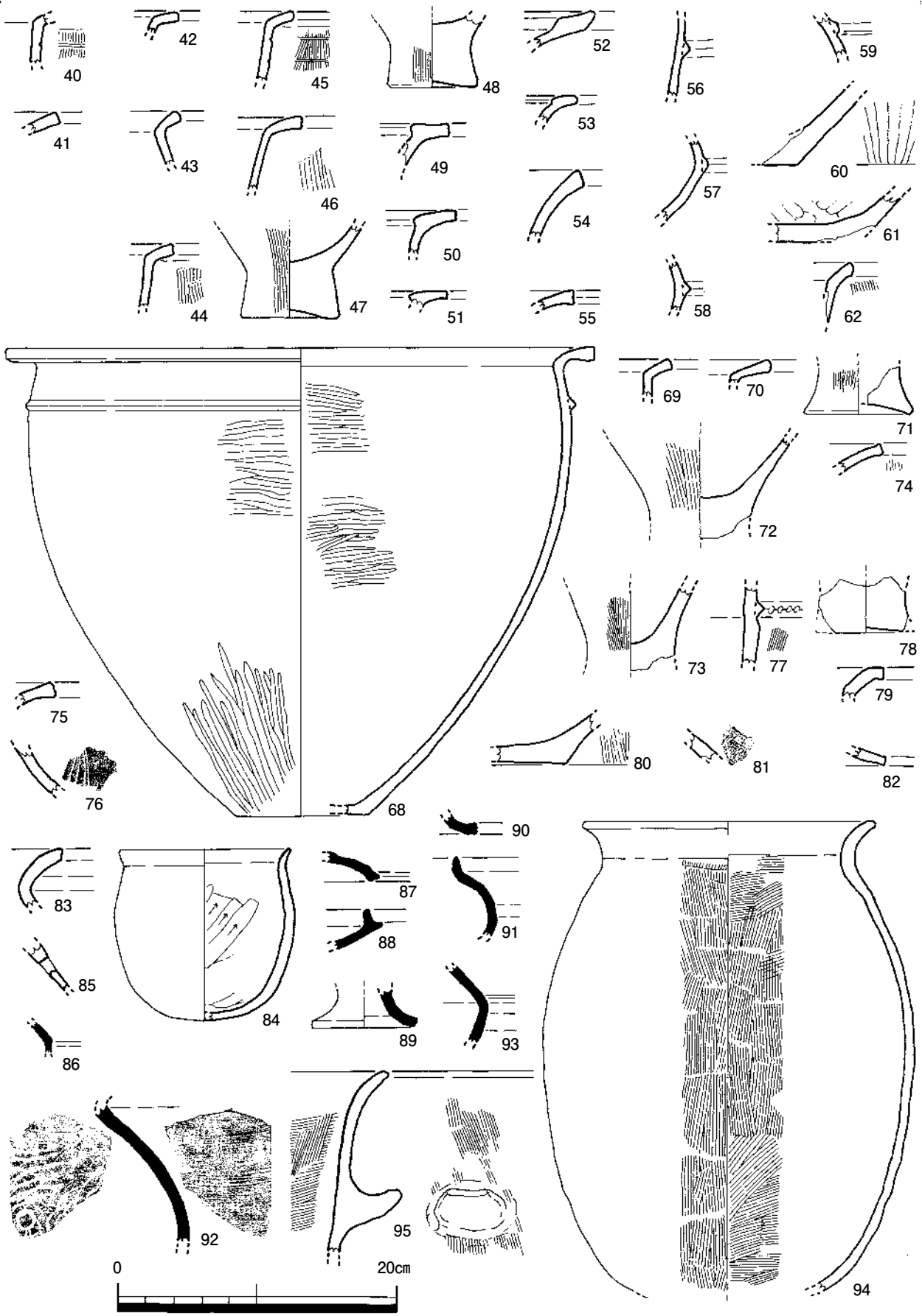
5号溝状遺構は調査区の南西端部に位置する。遺構検出面の標高は約19.8mと低い。

遺構は北西-南東方向に主軸をとり、両端部は調査区外まで延びている。遺構の規模は検出長が2.50m・幅1.32mである。壁面は両側ともやや緩やかに立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。底面は北西半が南東半に比べて10cmほど低くなっていて、最深部の深さは25cmである。主軸の方位はN-57°-Wである。

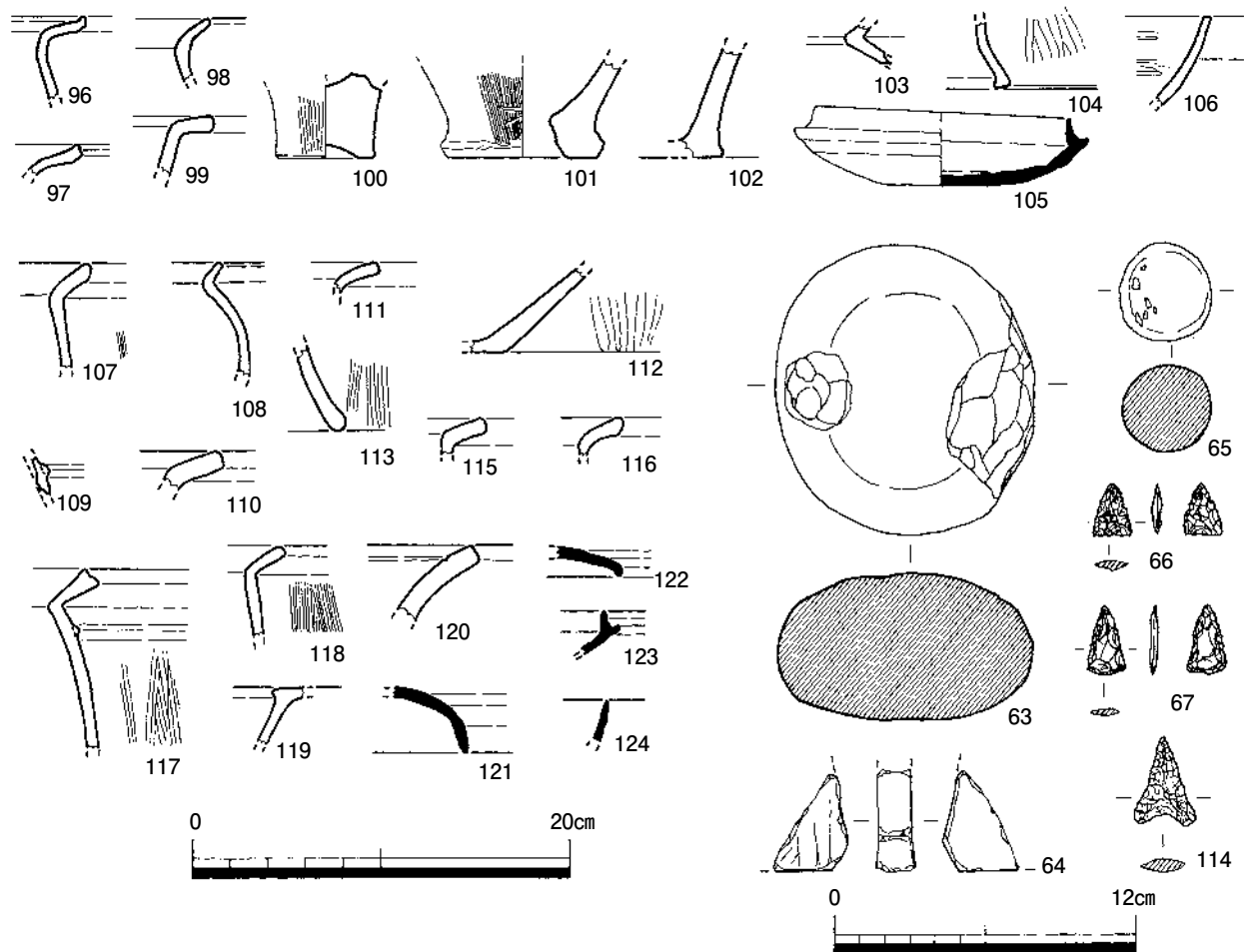
遺物は出土していない。

④ その他の遺構

その他の遺構としては不整形の土坑状の遺構や円形ないし楕円形のピットなどが約60基調査された。遺物はピットなどから弥生土器や須恵器が出土している（第14図107～124）。107は4号ピットから出土した弥生土器の甕で、口縁部がくの字状に外反する。108・109は16号ピットから出土した弥生土器で、108は短頸壺である。109は壺の体部上位の小片で、三角突帯をめぐらす。110は17号ピットから出土した弥生土器の甕の口縁部である。111～113は23号ピットから出土した弥生土器で、111が甕の口縁部、112が壺の底部、113が器台の体部下位から底部の破片である。114は23号ピットから出土した打製石鏃で、姫島産黒曜石製である。115は29号ピットから出土した弥生土器



第13図 B区出土遺物実測図1 (縮尺=1/4)



第14図 B区出土遺物実測図2 (縮尺=63～67・114は1/3、他は1/4)

の甕で口縁部がくの字状に強く屈折する。116は30号ピットから出土した弥生土器の甕で、口縁部が外上方に屈曲する。117から124は表面採集資料で、117～120が弥生土器、121～124が須恵器である。117は甕の口縁部から体部上位で、口縁部がくの字状に屈折したのち端部に向かってしだいに厚くなり、外縁部をなでてくぼませる。口縁部の直下には断面三角形の突帯をめぐらす。118も口縁部がくの字状に屈折するが器壁の厚さは一定である。119は鋤先状口縁の壺である。120は口縁部が朝顔形に開く大型の壺で、口縁部上端付近の内面に沈線をめぐらす。121・122は坏蓋の体部下位から口縁部で、122は低平な器形である。123は坏身で口縁部の立ち上がりは低い。124は壺の口縁部かと考えられる小片である。

3 C区

C区はB区の南東側に並行する調査区で、芯々でB区とは9.6m隔てている。調査区の長さは31.5mである。A区・B区に比べて遺構の密集度はやや低く、土坑や溝状遺構が少ない。検出した遺構のうち番号を付した主な遺構は竪穴住居跡1軒・掘立柱建物跡4棟・土坑1基・溝状遺構2条である(第15図)。遺構検出面の標高は北東部から中央部では20.1mほどで、南西部ではこれより20cmほど低くなっている。

① 竪穴住居跡

竪穴住居跡は調査区中央部よりやや北東側で1軒のみ検出された。

1号竪穴住居跡 (第16図)

1号竪穴住居跡の遺構検出面の標高は約20.1mである。

遺構は半円形に配置された4本の支柱穴からなり、周溝は削平されていた。北西側は調査区外となっているが、全体としては円形の平面形をなすと考えられる。遺構の規模は柱穴P1-P4間が芯々で3.12mであり、床面は直径5m前後に復元されるものと考えられる。各柱穴の間隔はP1-P2間が1.0m、P2-P3間が1.53m、P3-P4間が1.34mである。柱穴の平面形は円形ないし楕円形で、大きさはP2が直径50cmと大きい、他は35cm前後である。深さはP1・P2・P3が35cm前後で、P4は27cmである。

遺物は出土していない。

② 掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は調査区北東部で2棟が重複するほか、中央部よりやや南西側で2棟が確認された。

1号掘立柱建物跡 (第17図)

1号掘立柱建物跡は調査区北東部に位置し、2号掘立柱建物跡と重なるが先後関係は不明である。遺構検出面の標高は約20.1mである。

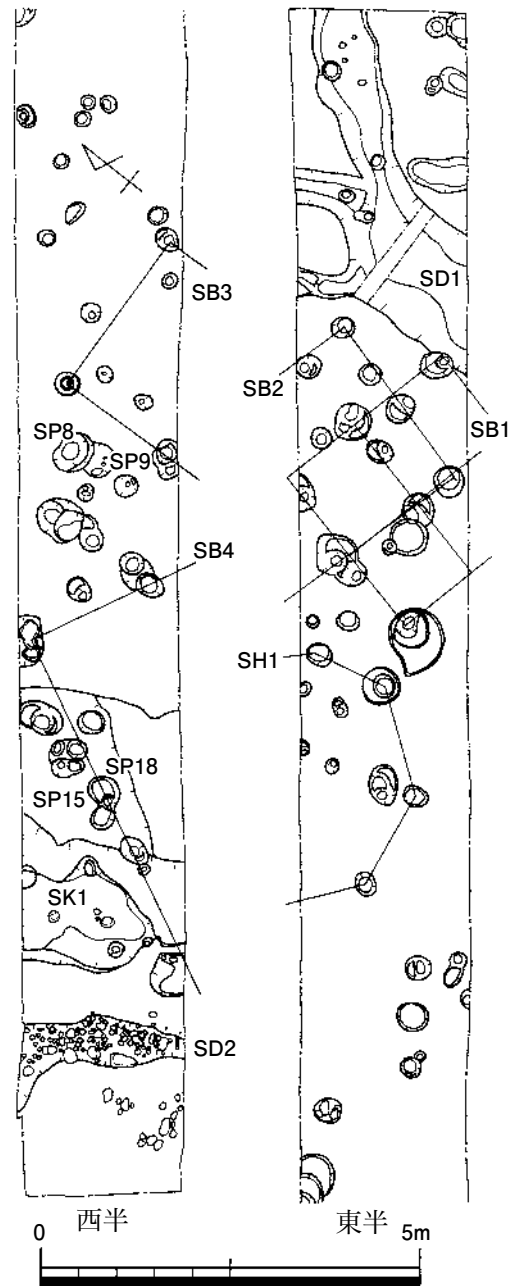
遺構は全体としては方2間の総柱建物跡と考えられるが、北西側と南東側は調査区外となっている。建物跡の規模は東西約2.8m・南北約2.5mである。柱穴は4本の側柱と中央の東柱1本が検出された。各柱穴の平面形は円形ないし隅丸方形で、大きさは40cm～50cm、深さは24cm～46cmである。柱痕跡はP1～P4で検出され、底面で直径15cm前後である。主軸の方位はN-11°-Eである。

遺物は出土していない。

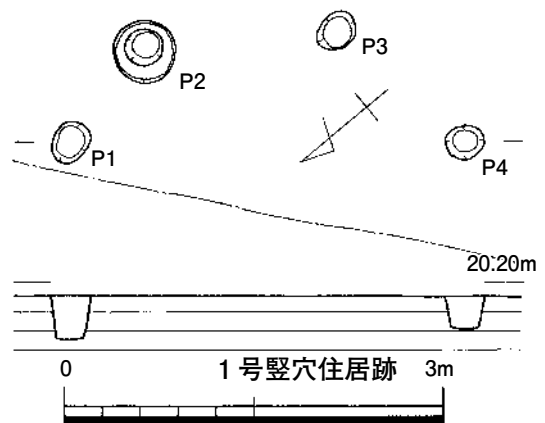
2号掘立柱建物跡 (第17図)

2号掘立柱建物跡は1号掘立柱建物跡の北側に重なり合って検出された。遺構検出面の標高は約20.1mである。

検出された柱穴は東西方向に1間、南北方向に2



第15図 佐知久保畑遺跡2次調査C区全体図 (縮尺=1/100)



第16図 C区竪穴住居跡実測図 (縮尺=1/60)

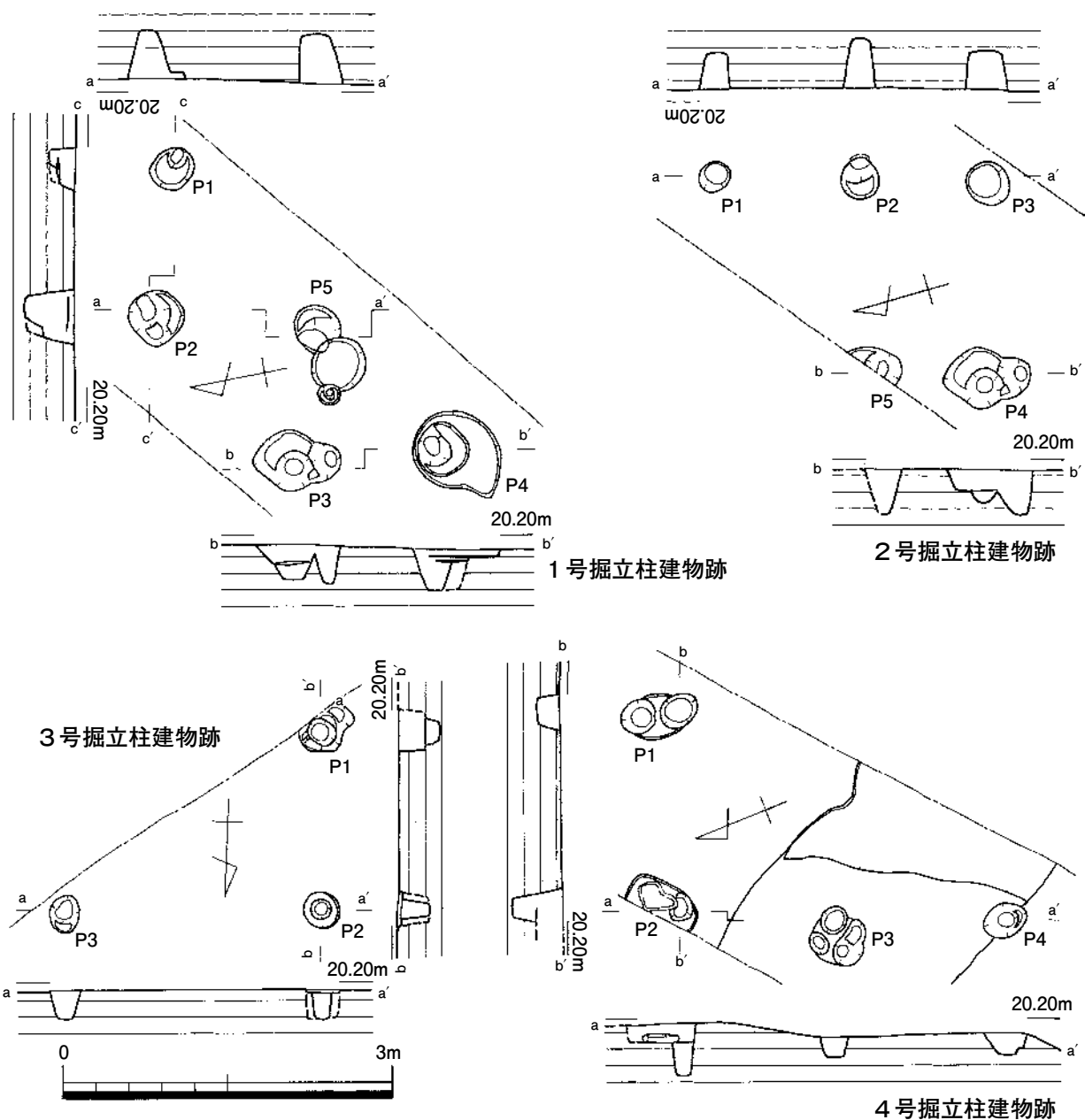
間分で、西側ないし北側は調査区外まで延びている可能性があり、全体の構造・規模は不明である。検出した5本の柱穴はP1～P3が南北方向に一直線に並び、間隔が2.49mで、その西側に1.80mの間隔をあけてP4・P5が南北に並んでいる。各柱穴の平面形は基本的に円形で、大きさはP1がやや小さいが他は直径40cm程度、深さは31cm～46cmである。明確な柱痕跡は確認できなかった。主軸の方位はN-16°-Eである。

遺物は出土していない。

3号掘立柱建物跡 (第17図・第20図)

3号掘立柱建物跡は調査区やや南西側に位置する。遺構検出面の標高は約20.1mである。

検出された柱穴は東西方向に並ぶ2本と、それに直交する1本の計3本だけであり、南側は調査区外まで延びている。各柱穴の間隔はP1-P2間が1.64m、P2-P3間が2.34mである。柱穴の平



第17図 C区掘立柱建物跡実測図 (縮尺=1/60)

面形は円形ないし楕円形で、大きさは直径35cm前後、深さは23cm～38cmである。明確な柱痕跡がP1・P2で検出され、直径は底面で15cm前後である。主軸の方位はN-87°-Eである。なお、この遺構は方形竪穴住居跡の支柱穴の可能性もある。

遺物はP2・P3から弥生土器が出土している(第20図125)。125は短頸壺の口縁部から体部上位で、口縁部が外上方に短く開き、口縁部と体部の境に円孔を穿つ。

4号掘立柱建物跡(第17図)

4号掘立柱建物跡は調査区の南西部に位置する。遺構検出面の標高は約20.1mである。

検出された柱穴は南北方向に並ぶ3本と、それに直交する1本の計4本だけであり、南側は調査区外まで延びている。各柱穴の間隔はP1-P2間が1.80m、P2-P3間が1.41m、P3-P4間が1.55mである。柱穴の平面形は楕円形のものが多く、大きさは長径35cm前後である。深さは17cm～46cmであるが、P3・P4の検出面は15cmほど低くなっている。明確な柱痕跡は検出できなかったが、P2に接して扁平な円礫が確認され、礎板の可能性はある。主軸の方位はN-69°-Wである。

遺物は弥生土器の甕が微量出土しているだけである。

③ 土坑

土坑は調査区南西部で1基のみ確認された。

1号土坑(第18図)

1号土坑の遺構検出面の標高は約20.0mである。

遺構はやや不整形で、北西-南東方向にやや長い溝状を呈し、北西側は調査区外まで続いている。規模は検出長1.92m・幅1.30mである。壁面は長軸の南西辺が傾斜角度が急で、北東辺は比較的緩やかである。床面は中央部が皿状にややくぼみ、円礫が数点散在していた。深さは最深部で70cmと深い。遺構内の埋土は基本的に暗灰色～黒色で若干粘質であるが、最下層は暗黄灰色で基盤層に由来する明灰色ブロックを含む。主軸の方位はN-34°-Wである。遺構の用途は不明である。

遺物は出土していない。

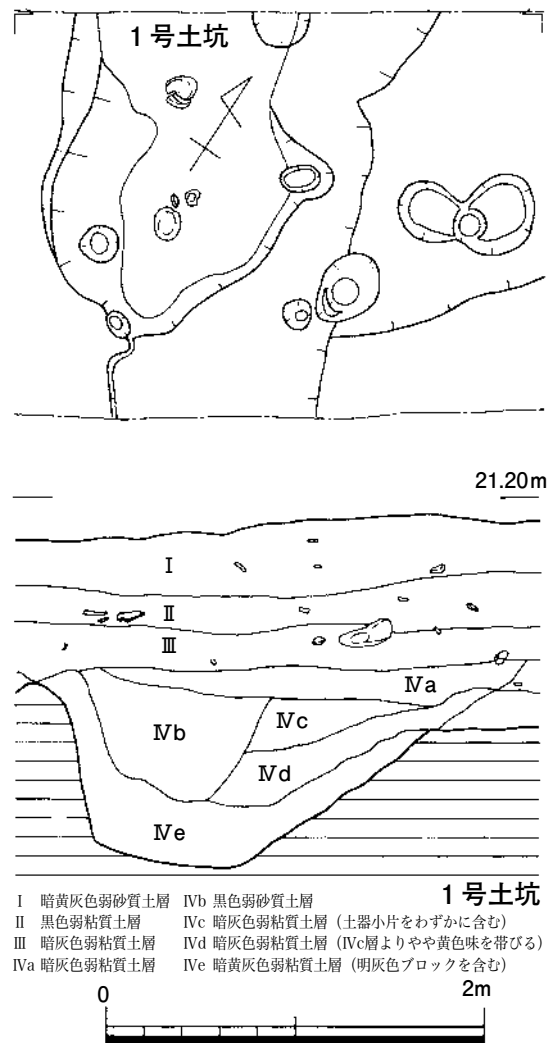
④ 溝状遺構

溝状遺構は調査区の北東部と南西部に各1条確認された。

1号溝状遺構(第19図・第20図)

1号溝状遺構は調査区北東部に位置し、1号掘立柱建物跡の柱穴に一部切られている。遺構検出面の標高は約20.1mである。

遺構は主軸をほぼ南北方向にとりながらやや屈曲する本流部分と、北西方向から本流の屈曲部に流入



第18図 C区土坑実測図
(縮尺=1/40)

する2条の支流からなる。本流・支流とも調査区外まで延びている。検出した遺構の規模は本流が長さ5.23m・最大幅1.56m・深さ0.48mをはかる。支流は東側のものが検出長1.00m・幅0.52m・深さ0.23mで、西側のものは検出長0.74m・幅0.39m・深さ0.28mである。本流は北半では幅が狭く、断面がU字形に近いが、屈曲部より南半は幅が広がっている。埋土は上層が暗灰色、中層が暗茶灰色、最下層では暗黄灰色で、土質は下層では粘質を帯びる。本流の底面の深さは北端に比べて南端が30cm低くなっていて、この遺構は北側から南側に流れる自然流路と考えられる。

遺物は弥生土器の甕・壺・高坏などが中量出土している（第20図126～131）。126～129は甕で、126は体部の張り弱い器形である。127・128は口縁部が三角突帯状を呈する城ノ越系である。129は体部下位から底部の破片で、底面が上げ底で器壁がやや薄い。130は壺で口縁部が朝顔形に大きく開く。131は高杯の脚部かと考えられる。

2号溝状遺構（第19図）

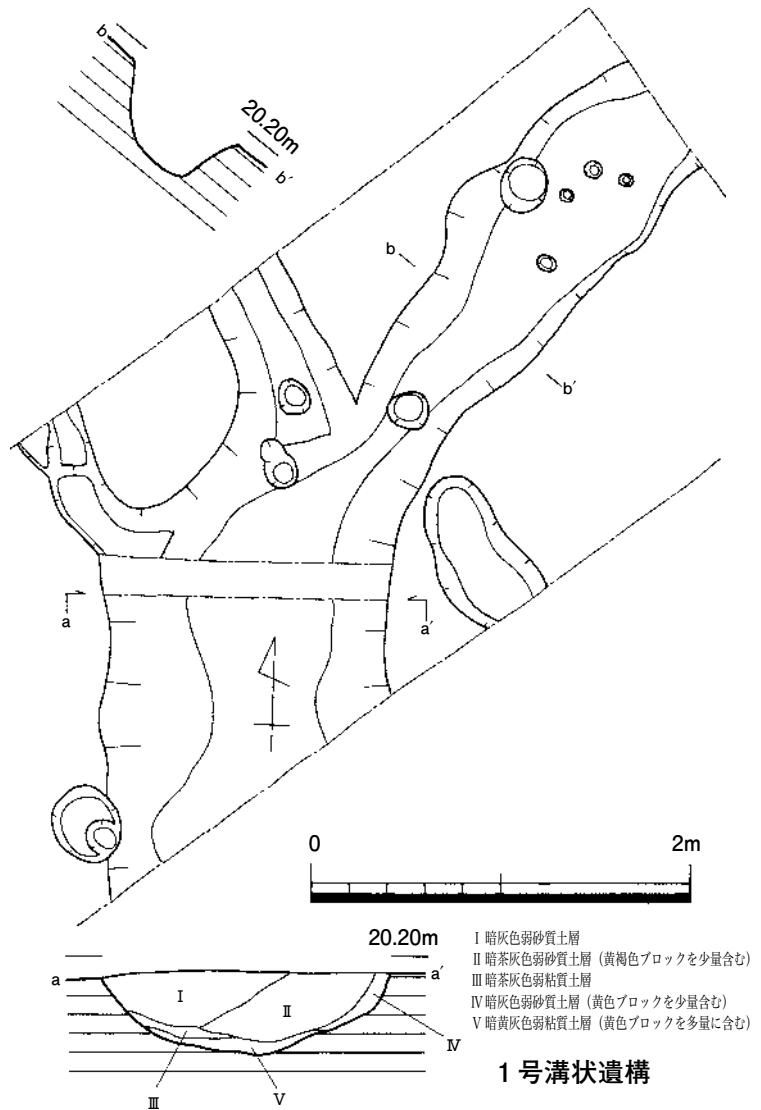
2号溝状遺構は調査区の南西部に位置し、遺構検出面の標高は約20.0mである。

遺構は北西－南東方向に直線的に延びるが、北西端部では南西方向に屈曲するようである。遺構の北西側と南東側はともに調査区外まで延びている。遺構の規模は検出長2.18m・最大幅0.62mで、南東側は幅がしだいに狭くなっている。遺構内の壁面や底面には長さ40cm以下の円礫が密集して検出された。主軸の方位はN-35°-Wである。遺構の用途は南側に展開する何らかの施設を囲む区画溝と考えられる。

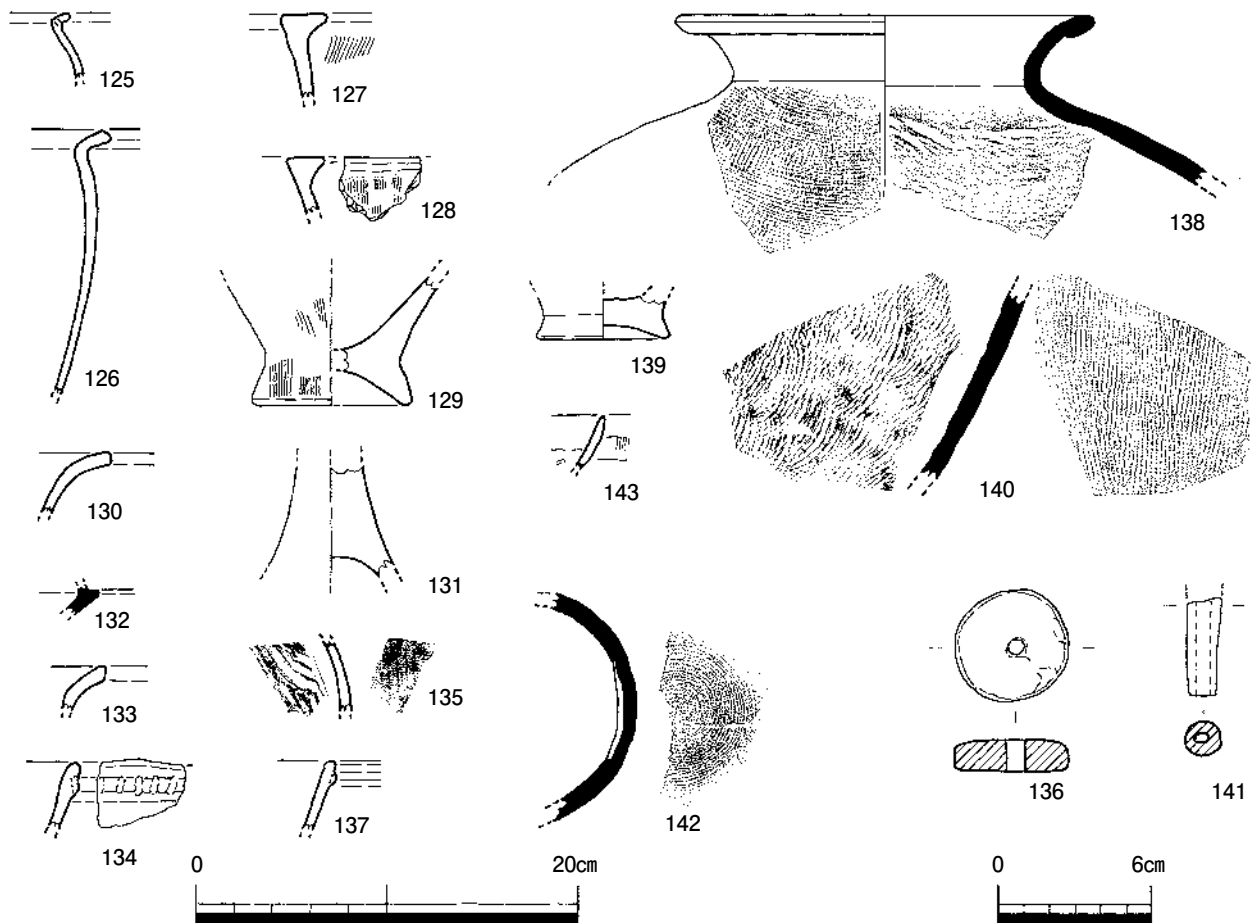
遺物は出土していない。

⑤ その他の遺構

その他の遺構としては調査区北東部で短い溝状遺構が検出されたほか、円形ないし楕円形のピットが約60基調査された。遺物はピット等のほか1号土坑付近の調査区北西壁面の堆積土層から縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・青磁など多彩な土器類と石製



第19図 C区溝状遺構実測図（縮尺=1/40）



第20図 C区出土遺物実測図 (縮尺=136・141は1/3、他は1/4)

品・土製品が出土している (第20図132～143)。132は8号ピットから出土した須恵器の坏身の口縁部小片である。133は9号ピットから出土した弥生土器の甕かと思われる口縁部の小片である。134・135は15号ピットから出土した土器である。134は縄文土器の鉢の口縁部で、外面の器壁を厚くして、長方形の刺突文を1cm前後の間隔で施す。135は内外面の成形技法は須恵器の甕に類似するが、焼成は土師質である。136も15号ピットから出土した石製紡錘車の完形品で、円板形の形態の中央に径0.6cmほどの円孔を穿つ。137は18号ピットから出土した弥生土器の鉢かと思われる小片で、直立する口縁部の直下に三角突帯をめぐらす。138～143は調査区壁面の土層 (第18図参照) から出土した遺物で、138はII層から出土した須恵器の甕で、口縁部が体部から強く屈曲して外反し、端部の外面を玉縁状に肥厚させる。139はIII層から出土した弥生土器の甕かと思われる底部の破片で、底面が上げ底である。140はII層から出土した須恵器の体部の破片である。141はIII層から出土した棒状の土錘である。142はI層から出土した須恵器の提瓶で、体部中位は成形時に円板充填で蓋をし、外面に同心円のカキ目を施す。143はII層から出土した青磁の碗で、外面の一部に櫛歯文があり、同安窯系かと思われる。

4 D区

D区はC区の南東側に並行する調査区で、芯々でC区とは11.0m隔てている。調査区の長さは17.6mである。遺構の密集度はC区と同様にやや低い。検出した遺構のうち番号を付した主な遺構

は掘立柱建物跡1棟・土坑1基のみである（第21図）。遺構検出面の標高は北東部で約20.4m、南西部ではこれより10cmほど低くなっている。

① 掘立柱建物跡

竪穴住居跡は調査区中央部付近で1棟のみ確認された。

1号掘立柱建物跡（第22図）

1号掘立柱建物跡の遺構検出面の標高は約20.4mである。

遺構は北隅の柱穴を中心に南東側に1間、南西側に2間分、計4本の柱穴が検出されたが、南側は調査区外まで続いている。検出した建物跡の規模は柱穴P1-P2の梁間が1.68m、P2-P4の桁行が4.2mである。柱穴は円形ないし楕円形の平面形で、大きさは30cm～45cm、深さは35cm前後である。柱痕跡はP3で検出され、底面での直径が16cmである。主軸の方位はN-28°-Eである。

遺物はP1・P2から弥生土器の甕の小片が微量出土しているだけである。

② 土坑

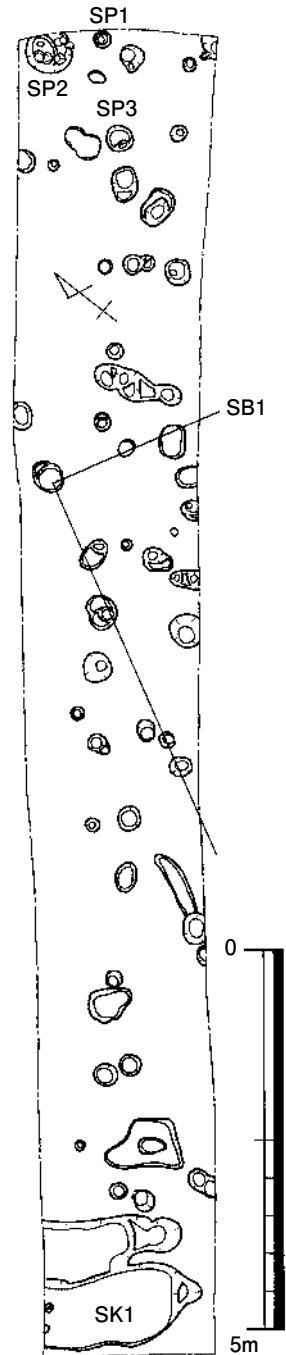
土坑は調査区の南西端部で1基のみ確認された。

1号土坑（第23図・第24図）

1号土坑の遺構検出面の標高は約20.3mである。

遺構は北西-南東方向に長い土坑が2基並行して接続したような形態をなし、北西側は調査区外に続いている。遺構全体の規模は検出長が2.10m・幅1.80mである。北東側の土坑は南東端部に幅0.47mの段が付く。この段は遺構検出面からの深さが12cmで、さらに15cm下がったレベルに床面がある。床面は平坦で幅は0.70mである。南西側の土坑は北東側より16cmほど深く、遺構検出面からは44cmをはかる。南西側の土坑の床面は中央部に向かって皿状にわずかにくぼんでいる。壁面は南側から南西側にかけては垂直ないしは奥に抉り込んだ状態である。埋土は大部分が暗灰色弱砂質土の均一な土質で、短期間に埋没したものと考えられる。主軸の方位はN-43°-Wである。遺構の用途は不明である。

遺物は弥生土器の甕・壺・蓋、土師器の高杯、須恵器の坏身・坏蓋・高坏などの土器類と、姫島産黒曜石のフレイクなどが多量に出土している（第24図144～154）。144～151は弥生土器である。144～146は甕の口縁部で、147は底部である。口縁部の3点はともに水平に近くやや長く開く器形である。147は底部の器壁が非常に厚い。148～150は壺で、148が朝顔形に開く口縁部である。149は体部に2条の三角突帯をめぐらす。150は底部で、外面に縦方向のヘラミガキを施す。151は小型の蓋かと考えられ、円板状の器形で、外周に浅い凹線のくぼみをめぐらす。152・153は須恵器で、152が坏身の口縁部から体部上位の破片である。153は高杯の杯部下半で、脚部との境に縦方向の透かしの切込みが残る。154は土師器の高杯の脚で、胎土は砂粒をほとんど含まず精良である。



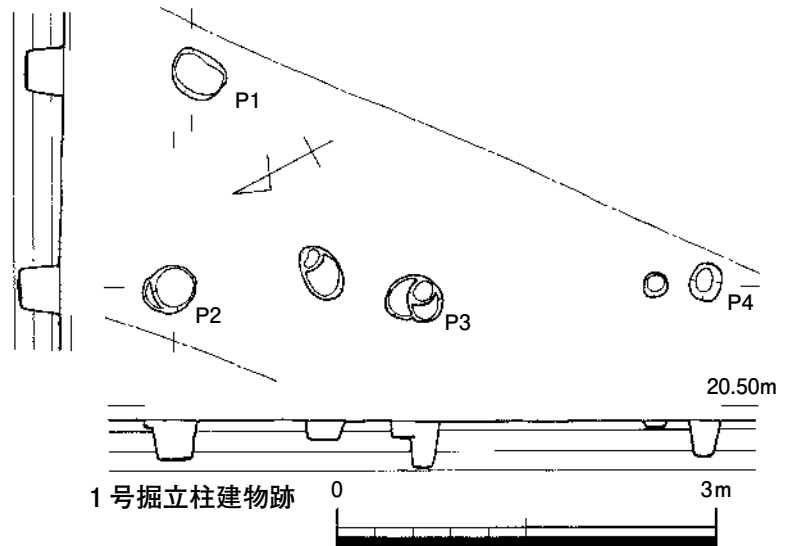
第21図 佐知久保畑遺跡
2次調査D区全体図
(縮尺=1/100)

③ その他の遺構

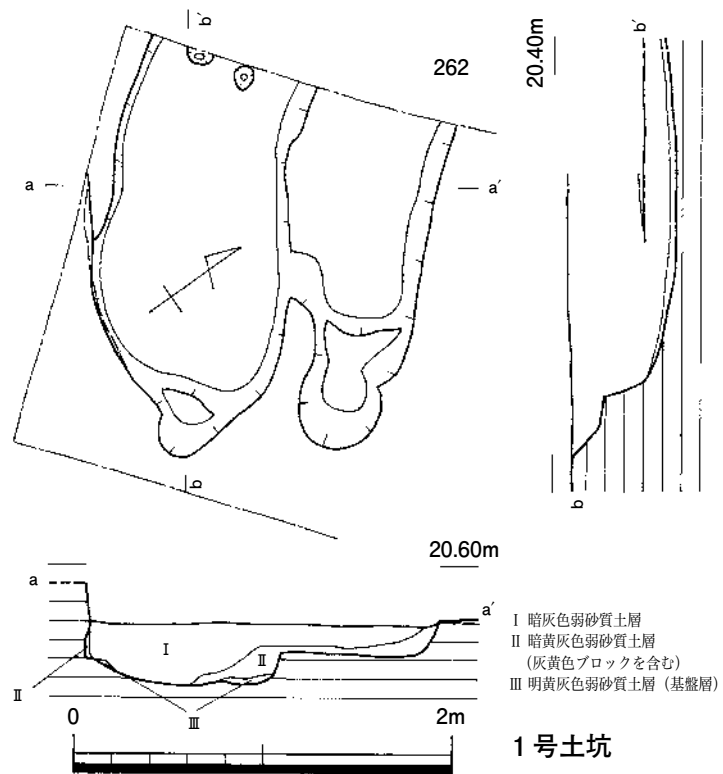
その他の遺構としては調査区南西部でやや不整形な浅い土坑状の遺構が検出されたほか、短い溝状遺構やピットが約50基調査された。遺物はピット等から弥生土器等が出土している（第24図155～159）。155は1号ピットから出土した甕の口縁部小片である。156～158は2号ピットから出土した甕で、156・157は口縁部が直立する。158は底部の器壁が非常に厚い。159は3号ピットから出土した下城式系の甕で、口縁部直下に刻目突帯をめぐる。

5 E区

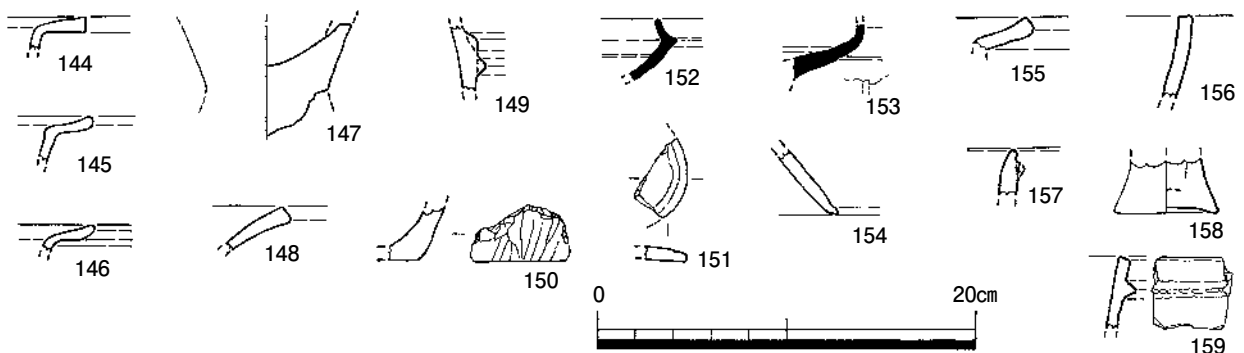
E区はD区の南東側に並行する調査区で、芯々でD区とは11.0m隔っている。調査区の長さは32.5mである。遺構の密集度は調査区中央部付近では低いが、他の部分はA区・B区と同様にピット等が多数検出された。検出した遺構のうち番号を付した主な遺構は竪穴住居跡5軒・掘立柱建物跡1棟・土坑1基である（第25図）。遺構検出面の標高は北東部では約20.4mと低いが、中央部から南西部では20.7m前後と高くなっている。



第22図 D区掘立柱建物跡実測図（縮尺=1/60）



第23図 D区土坑実測図（縮尺=1/40）



第24図 D区出土遺物実測図（縮尺=1/4）

① 竪穴住居跡

竪穴住居跡は調査区中央部よりやや北東側で切り合って2軒、南東側で3軒が確認された。

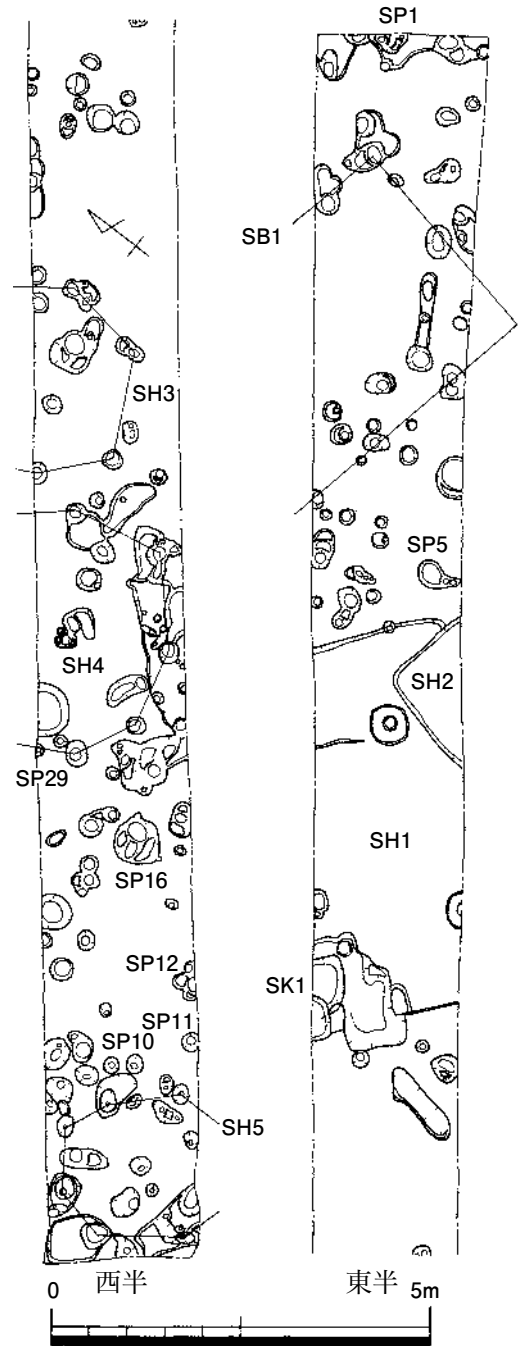
1号竪穴住居跡 (第26図・第29図)

1号竪穴住居跡は調査区のやや北東側に位置し、1号土坑を切り、2号竪穴住居跡に切られている。遺構検出面の標高は約20.5mである。

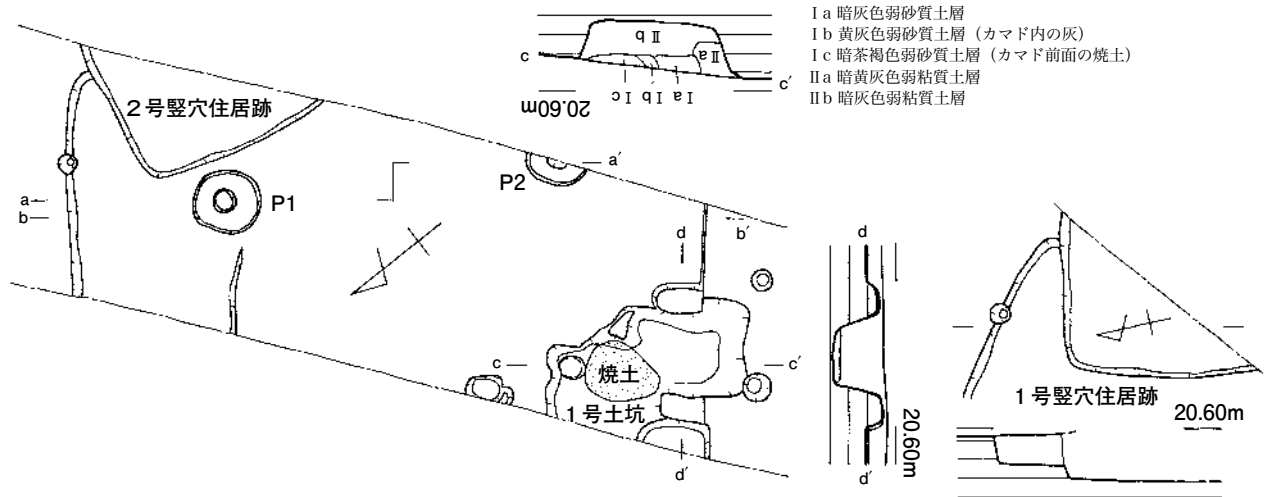
遺構は北西側と南東側が調査区外となっており、調査した範囲は全体の1/3程度であるが、平面形は方形と考えられる。遺構の規模は北東と南西の壁面間の長さで5.04mをはかり、遺構内で支柱穴とカマドが検出された。周壁は北東辺と南西辺の一部が確認され、保存状況の良い部分で高さ14cmが残っていた。支柱穴は東側と南側の2本が検出されたが、全体としてはほぼ正方形に4本配置されているものと考えられる。柱穴P1-P2の間隔は2.67mである。東側のP1はやや隅丸方形の平面形に近く、掘方の大きさは径53cm、深さは42cmである。検出された柱痕跡は直径15cmである。カマドは南西周壁のほぼ中央部に付設されており、両側の壁体の一部が確認され、内部から前面にかけて灰や焼土が検出された。カマド本体から周壁外に長方形の土坑状の掘り込みがあるが、この遺構は住居跡に伴うものかどうか不明である。住居跡の床面は北東側がややくぼみ気味であるが、全体的に暗灰色ブロックを含む明灰黄色弱砂質土に覆われており、貼床がされていた可能性がある。主軸の方位はN-39°-Wである。

遺物はカマド内外や住居跡の埋土中から弥生土器の甕・壺、土師器の甕・甑、須恵器の坏身・坏蓋・甕などが中量出土している(第29図160~181)。160~172は埋土中から出土した土器で、160~168が弥生土器、169~171が須恵器、172が縄文土器である。

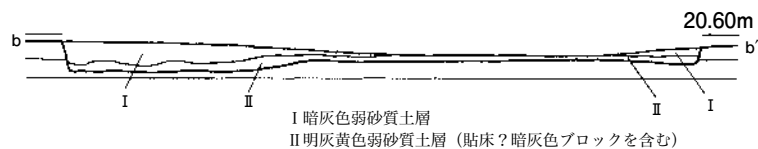
160・161は甕の口縁部小片である。162・163は甕の底部で、163は底面が上げ底で、器壁が非常に厚い。164・165は壺の口縁部で164は鋤先状に近い形態である。166は壺の体部で、最大径部に断面台形の突帯をめぐらす。167は壺の底部で上げ底である。168は器台で口縁部内面を内側につまみだす。169は坏蓋で口縁端部内側に小さい段をつける。170は坏身の口縁部小片である。171は壺の体部上半の破片で、最大径部よりやや上位に沈線をめぐらす。172は縄文土器の鉢かと考えられ、口縁部が低い山形を呈し、外面はへら状工具で波状の文様を削り出す。173~175はカマド内から出土した弥生土器である。173は甕の口縁部で、端部を上方につまみ上げる。174は壺の口縁部で、端部に向かって大きく開く。175は小片のため断定できないが、鉢または蓋の可能性もある。176~181



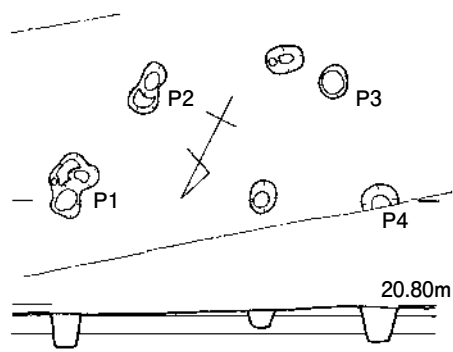
第25図 佐知久保畑遺跡2次調査E区全体図 (縮尺=1/100)



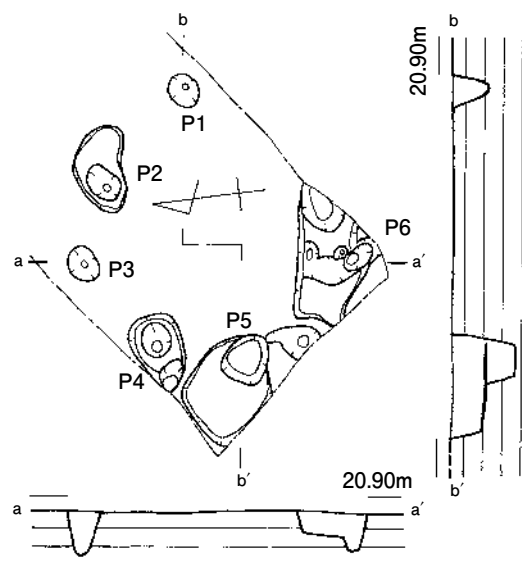
2号竖穴住居跡



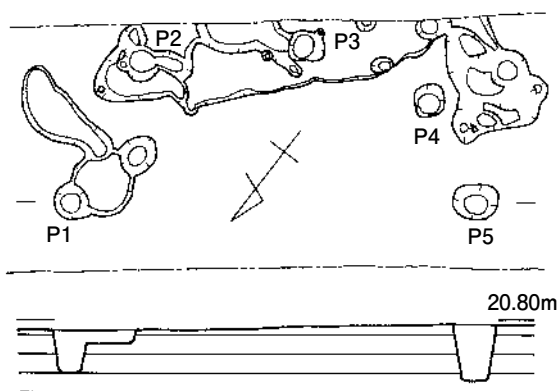
1号竖穴住居跡



3号竖穴住居跡



5号竖穴住居跡



4号竖穴住居跡



第26図 E区竖穴住居跡実測図 (縮尺=1/60)

はカマド付近から出土した土器で、176～178が弥生土器、179・180が土師器、181が須恵器である。176は甕の口縁部から体部上位の破片で、口縁部直下に三角突帯をめぐらす。177・178は甕の底部で、177は器壁が薄く、178は底面が平底である。179は甕の取手部で、取手の先端が円錐状に尖る。180は口縁部が直立する鉢状の器種か。181は甕の口縁部で、端部が外傾する。

2号竪穴住居跡（第26図・第29図）

2号竪穴住居跡は1号竪穴住居跡の東側隅を切る位置にあり、遺構検出面の標高は約20.5mである。

遺構は住居跡の北西隅の一部だけが検出され、大部分は調査区外となっている。平面形は基本的に方形と考えられ、検出した周壁の規模は南北長1.51m・東西長1.26mである。周壁は垂直に近く立ち上がり、床面は平坦で深さは最も残りの良い部分で37cmをはかる。主軸の方位はN-10°-Wである。

遺物は弥生土器の甕・壺などが少量出土している（第29図182～184）。182・183は甕の口縁部で、183は端部をなでてくぼませる。184は壺の体部上位の破片で、三角突帯を2条めぐらす。

3号竪穴住居跡（第26図）

3号竪穴住居跡は調査区中央部よりやや南西側に位置し、遺構検出面の標高は約20.8mである。

検出された遺構は円形竪穴住居跡を構成する半円形に並ぶ支柱穴4本で、北西側は調査区外まで続いている。周壁や炉跡は残存しなかった。遺構の規模は支柱穴P1-P4間が2.5mであることから、床面は直径4m～5m程度と推定される。柱穴はすべてほぼ円形で、直径30cm前後、深さは24cm～29cmである。各柱穴の間隔はP1-P2間が1.00m、P2-P3間が1.50m、P3-P4間が1.05mである。

遺物は出土していない。

4号竪穴住居跡（第26図）

4号竪穴住居跡は3号竪穴住居跡の南西に隣接し、遺構検出面の標高は約20.8mである。

検出された遺構は3号竪穴住居跡と同様に円形竪穴住居跡を構成する半円形に並ぶ支柱穴5本で、北西側は調査区外まで続いている。周壁や炉跡は残存しなかった。遺構の規模は支柱穴P1-P5間が3.2mであることから、床面は直径5m～6m程度と推定される。柱穴の平面形は円形ないし楕円形で、大きさは25cm～35cm、深さは23cm～47cmである。各柱穴の間隔はP1-P2間が1.24m、P2-P3間が1.29m、P3-P4間が1.11m、P4-P5間が0.89mである。

遺物はP5から弥生土器の甕の小片が微量出土しているだけである。

5号竪穴住居跡（第26図）

5号竪穴住居跡は調査区の南西端部に位置し、遺構検出面の標高は約20.8mである。

検出された遺構は円形竪穴住居跡を構成するやや楕円形に配置された6基の支柱穴で、南東側の調査区外に他にも1基または2基の柱穴が存在すると考えられる。周壁や炉跡は残存しなかった。遺構の規模は長径に相当するP1-P5間が2.2mであることから、床面は長径4m程度と推定される。支柱穴の平面形は楕円形のものが多く、大きさは30cm～40cm、深さはP1が17cmと浅いが、他は30cm～50cmである。各柱穴の間隔はP1-P2間が1.00m、P2-P3間が0.64m、P3-P4間が0.87m、P4-P5間が0.72m、P5-P6間が1.14mである。

遺物はP4から弥生土器の甕、土師器の坏、須恵器片などが出土しているが、土師器・須恵器は切り合っているピットからの混入品かと考えられる。

② 掘立柱建物跡

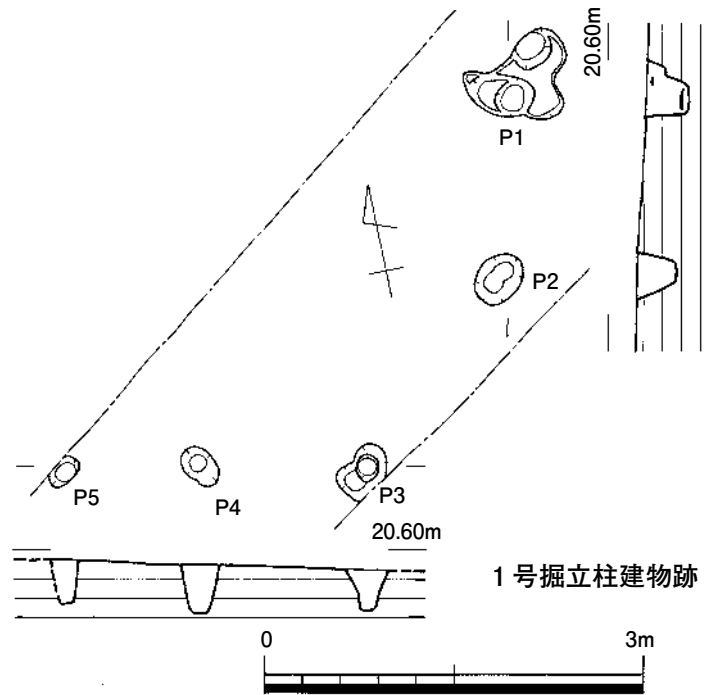
掘立柱建物跡は調査区北東部で1棟のみ確認された。

1号掘立柱建物跡 (第27図・第29図)

1号掘立柱建物跡の遺構検出面の標高は約20.5mである。

建物跡は東西方向に主軸をとる側柱建物跡で、検出した柱穴は東側の梁を支える2本と南側の桁行の3本である。南東隅と西側は調査区外となっている。建物跡の規模は梁間が約2.9m、桁行が3.5m以上である。柱穴の平面形は円形ないし楕円形で、大きさは長径30cm～40cm程度、深さは28cm～39cmである。主軸の方位はN-79°-Wである。

遺物はP5から弥生土器の甕の小片が微量出土しているだけである。



第27図 E区掘立柱建物跡実測図 (縮尺=1/60)

③ 土坑

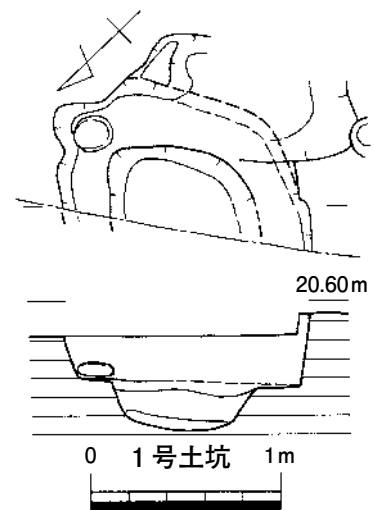
土坑は調査区の中央部付近で1基のみ調査された。

1号土坑 (第28図・第29図)

1号土坑は1号竪穴住居跡に切られ、遺構検出面の標高は約20.5mである。

遺構は北西側が調査区外となっているが、全体としては北西-南東方向に長い隅丸長方形を呈すると推定される。遺構の規模は検出長0.74m・幅1.25mである。遺構は二段掘りになっており、検出面から約40cmの深さに幅20cm～25cmの平坦面がめぐらされている。平坦面の南東隅には径20cmの円形で扁平な礫が置かれている。中央部の掘り込みの幅は上面で0.70m、床面では0.56mである。主軸の方位はN-52°-Eである。遺構の性格は埋葬施設の可能性が考えられる。

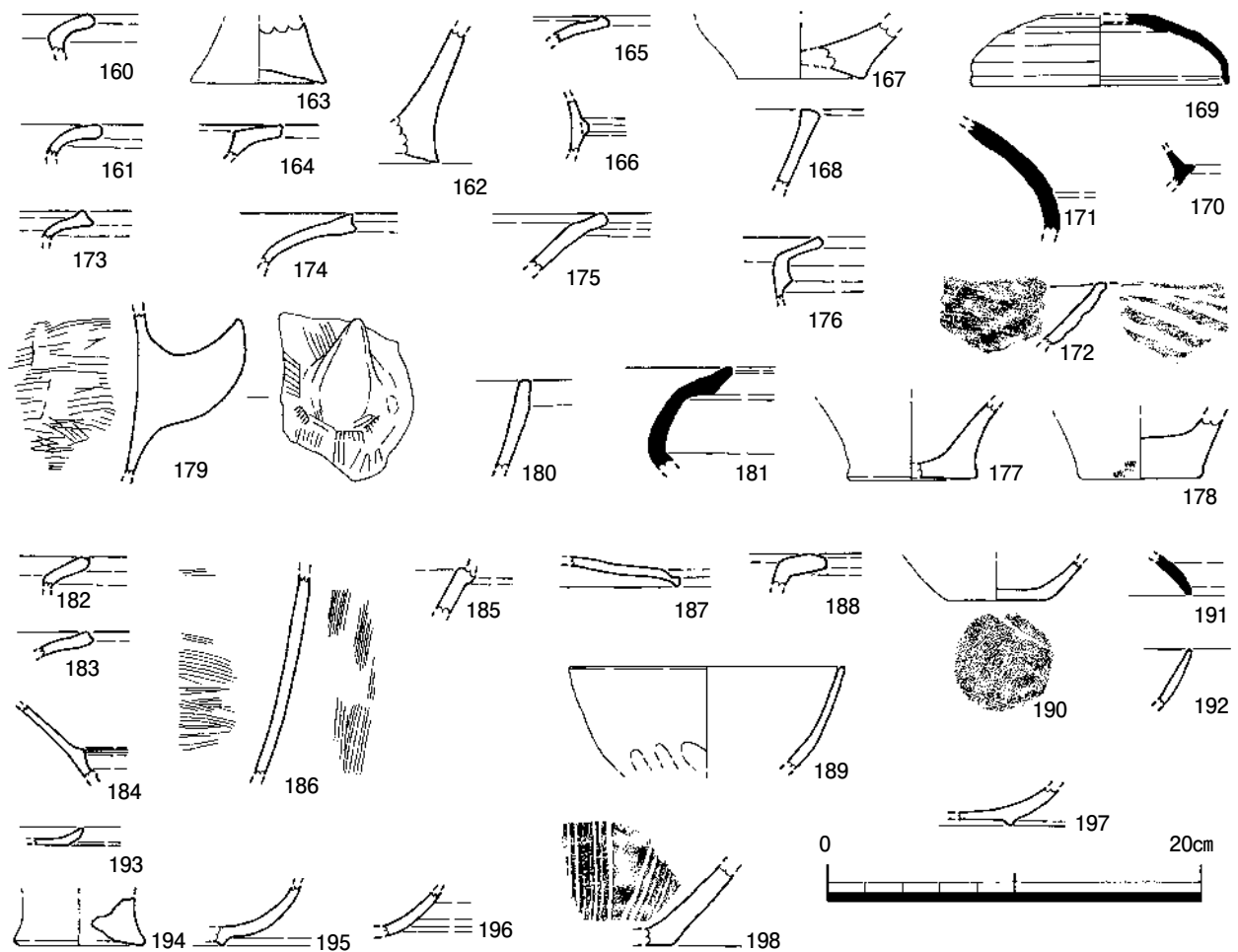
遺物は埋土中から弥生土器の甕と土師器の甕が少量出土しているが、土師器は1号竪穴住居跡からの混入品かと考えられる(第29図185・186)。185は弥生土器かと考えられるが、器種は不明である。186は甕の体部で、外面にタテハケ、内面にヨコハケの調整痕が残る。



第28図 E区土坑実測図 (縮尺=1/40)

④ その他の遺構

その他の遺構としては短い溝状遺構やピットが約120基調査された。遺物はこれらの遺構から弥生土器・土師器・須恵器・瓦器・陶器・青磁など様々の土器類が出土している(第29図187～198)。187は1号ピットから出土した弥生土器の蓋かと考えられ、低平な器形で口縁部が嘴状を呈する。188・189は5号ピットから出土した土器で、188が弥生土器の甕の口縁部である。189は瓦器塼の口

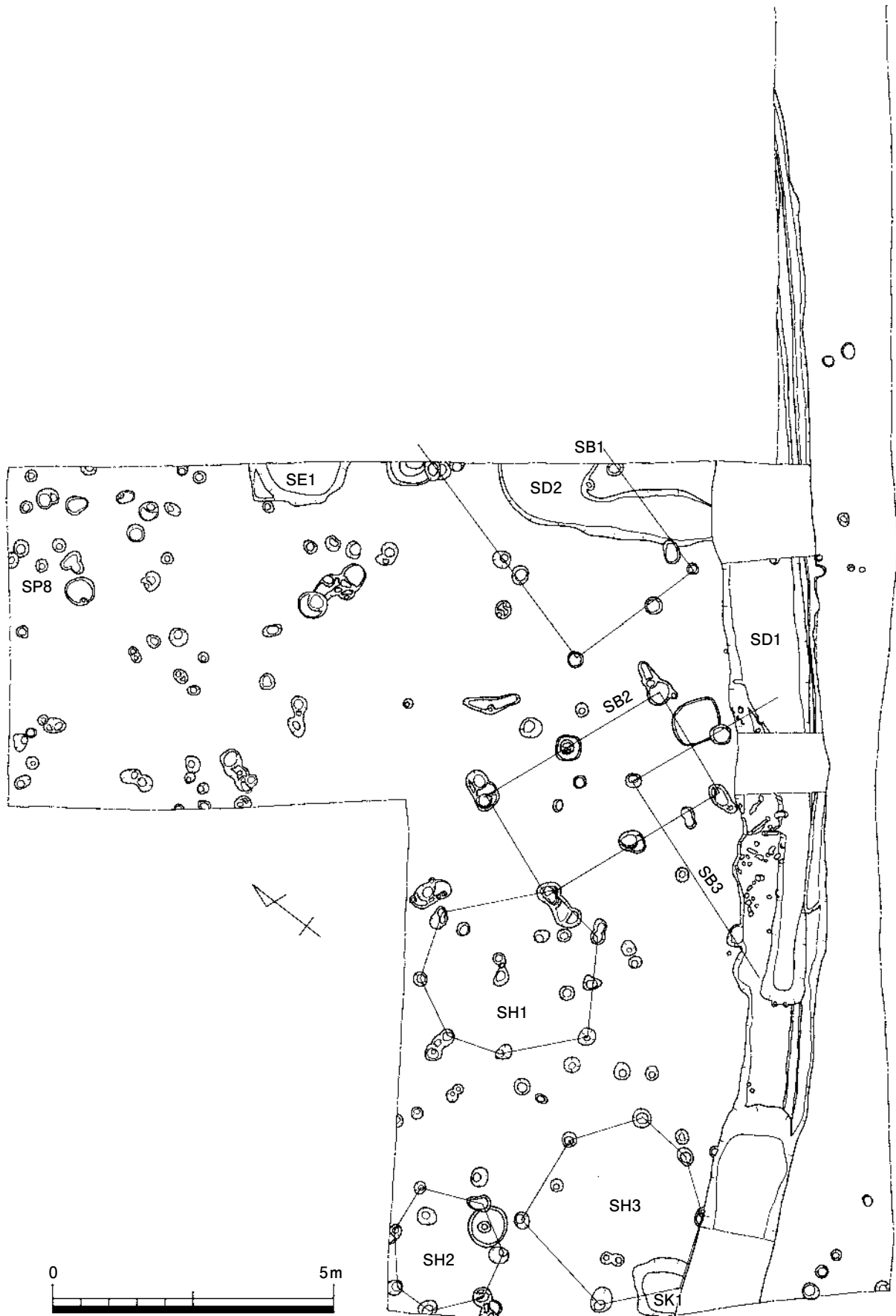


第29図 E区出土遺物実測図 (縮尺=1/4)

縁部から体部中位で、外面のやや下位に指頭圧痕が残る。190～192は10号ピットから出土した土器である。190は土師器の坏で底部は糸切りである。191は須恵器の坏蓋の口縁部小片である。192は瓦器碗の口縁部小片である。193は11号ピットから出土した土師器の皿である。194は12号ピットから出土した弥生土器の甕の底部で、底面が上げ底気味である。195は16号ピットから出土した瓦器碗の体部中位から高台部で、高台はやや低く、断面三角形を呈する。196は29号ピットから出土した青磁碗で、竜泉窯系である。内面に草花様の文様がある。197はクロボク層中から出土した土師器の碗で、断面三角形の低い高台がつく。198は表面採集の陶器の播鉢で、内面の櫛目は間隔をおいて施されている。

6 F区

F区はE区の南東側に位置する調査区で、逆L字形を中心として調査区本体の東隅から、北東にE区に並行するトレンチ状の調査区が付属する形状を呈する。逆L字形の部分は北西-南東方向が長さ15.9m・幅6.0mで、この部分の南東側から直角に南西方向に向かって長さ9.3m・幅9.0mの区画が続く。北東のトレンチ状の調査区は長さ13.2m・幅2.0mである。調査区全体としては北東-南西方向が28.5m、北西-南東が15.9mである。遺構の密集度は逆L字形の部分ではやや密であるが、北東のトレンチ状の部分は疎である。検出した遺構のうち番号を付した主な遺構は竪穴住居跡3軒・掘立柱建物跡3棟・井戸1基・土坑1基・溝状遺構2条と多様である(第30図)。遺構検出面の標高



第30図 佐知久保畑遺跡2次調査F区全体図 (縮尺=1/100)

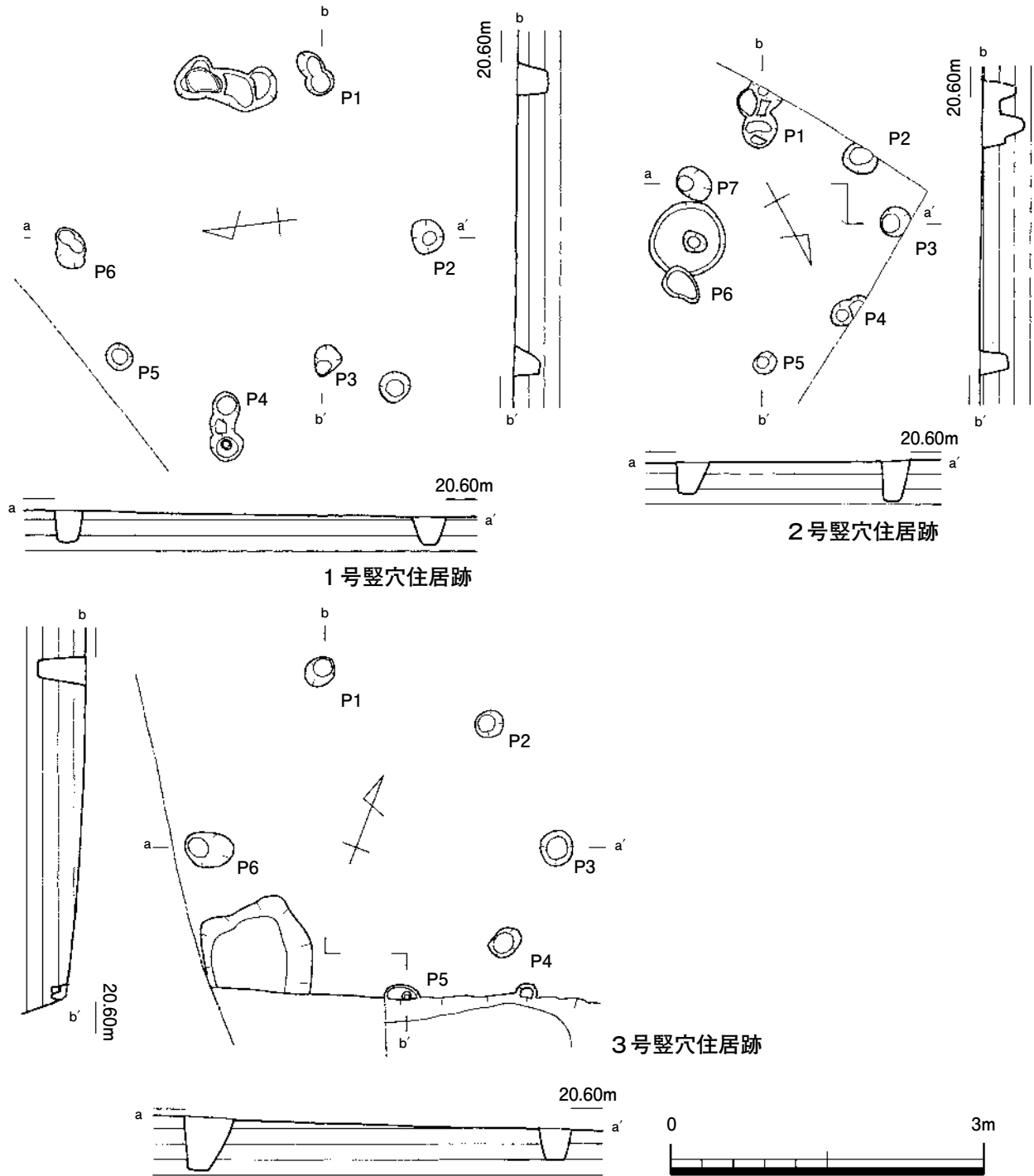
は逆L字形の部分は20.6m前後であるが、北東トレンチ部から続く調査区南東側は19.7mと一段低くなっている。

① 竪穴住居跡

竪穴住居跡は調査区南西部で集中して3軒が確認された。

1号竪穴住居跡 (第31図)

1号竪穴住居跡は調査区の中央部よりやや南西側に位置する。遺構検出面の標高は約20.5mである。



第31図 F区竪穴住居跡実測図 (縮尺=1/60)

検出された遺構は円形竪穴住居跡を構成する円形に配置された主柱穴6本で、周壁や炉跡は残存しなかった。遺構の規模は対角線に位置する柱穴P2-P6間が3.5mであることから、床面は直径5m～6m程度と推定される。柱穴はすべてほぼ円形で、直径30cm前後、深さは22cm～30cmと深浅の差が少ない。各柱穴の間隔はP1-P2間が1.89m、P2-P3間が1.59m、P3-P4間が1.00m、P4-P5間が1.12m、P5-P6間が1.20mで、P6-P1間は2.85mと広い。

遺物は出土していない。

2号竪穴住居跡（第31図）

2号竪穴住居跡は調査区の南西隅に位置し、遺構検出面の標高は約20.5mである。

検出された遺構は円形竪穴住居跡を構成する円形に配置された主柱穴7本で、周壁や炉跡は残存しなかった。遺構の規模は対角線に位置する柱穴P1-P5間が2.25mであることから、床面は直径4m程度の小型であると推定される。柱穴は平面形が円形ないし楕円形で、長径25cm～40cm、深さはP6が7cmと浅いが、他は26cm～41cmである。各柱穴の間隔はP1-P2間が1.02m、P2-P3間が0.72m、P3-P4間が0.99m、P4-P5間が0.88m、P5-P6間が1.11mで、P6-P7間が0.96m、P7-P1間が0.90mである。

遺物は出土していない。

3号竪穴住居跡（第31図）

3号竪穴住居跡は2号竪穴住居跡の南東側に隣接し、主柱穴の一部が1号溝状遺構に切られている。遺構検出面の標高は約20.5mである。

検出された遺構は円形竪穴住居跡を構成するやや楕円形に配置された主柱穴6本で、周壁や炉跡は残存しなかった。遺構の規模は対角線に位置する柱穴P3-P6間が3.4mであることから、床面は直径5m～6m程度と推定される。柱穴は平面形が円形ないし楕円形で、深さはP5が12cmと浅いが、他は24cm～52cmである。柱痕跡はP5で検出されたが直径8cmと細い。各柱穴の間隔はP1-P2間が1.65m、P2-P3間が1.38m、P3-P4間が1.05m、P4-P5間が1.07m、P5-P6間が2.45mで、P6-P1間が2.10mである。

遺物はP3とP6で弥生土器の甕の小片が微量出土しただけである。

② 掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は調査区中央部から北東部に集中して3棟が確認された。

1号掘立柱建物跡（第32図）

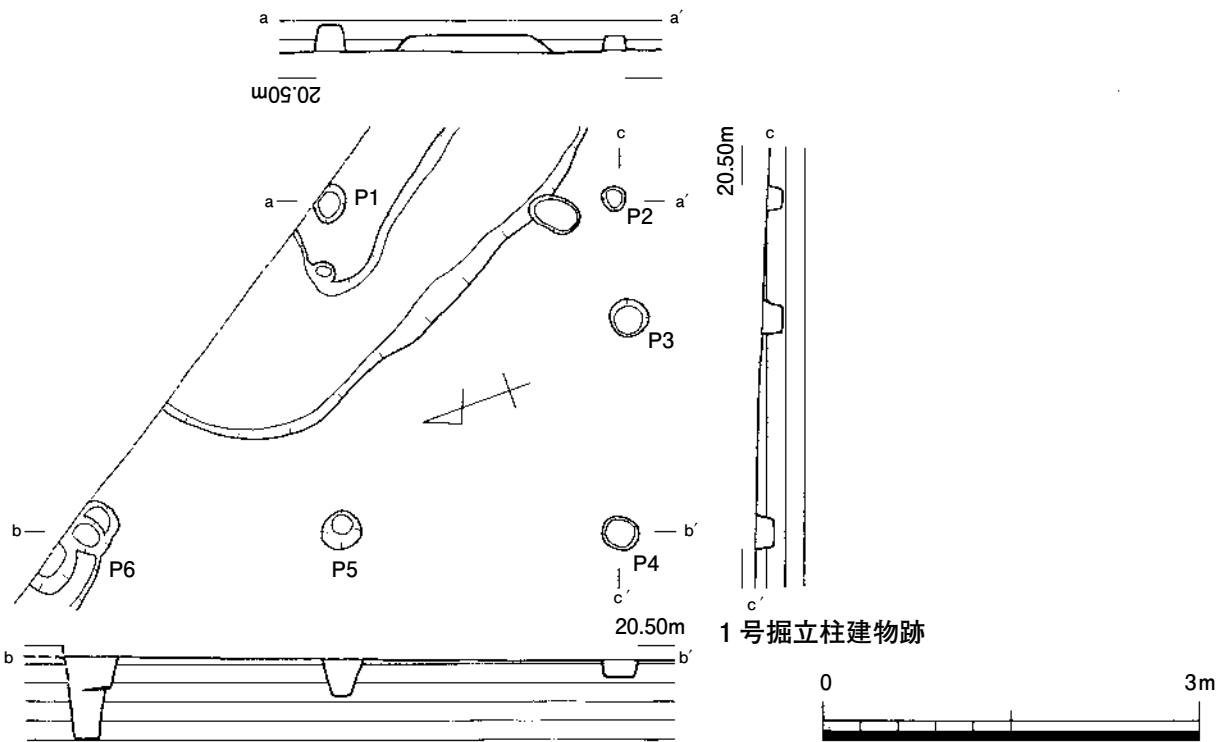
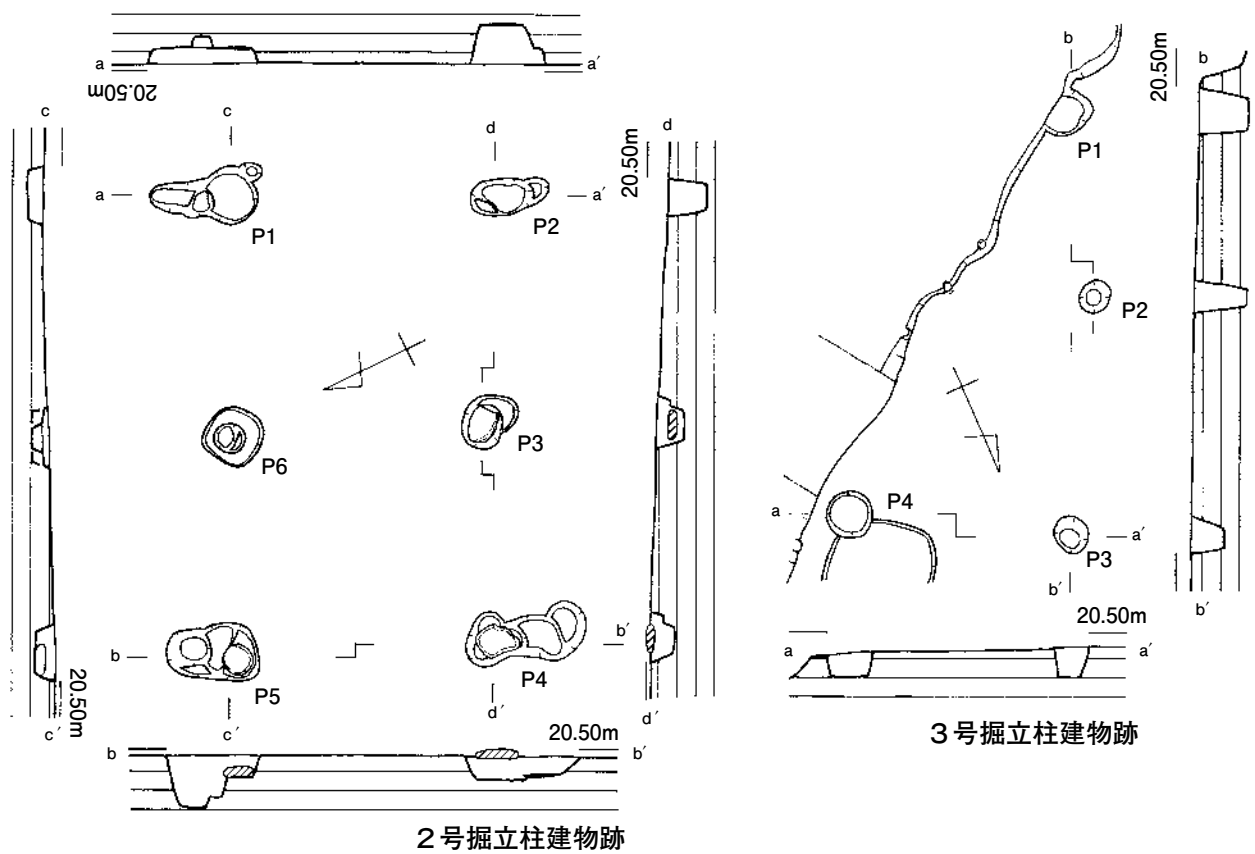
1号掘立柱建物跡は調査区のやや北東部に位置し、遺構検出面の標高は約20.4mである。

建物跡は南北方向に主軸をとる側柱建物跡で、南側の梁と東西の桁行の一部をなす6本の柱穴が検出されたが、北側は調査区外まで続いている。検出した建物の規模は梁間は2.67mであるが、棟柱が東側に寄っている。桁行は西側が2間分で4.23m、東側は1間分で2.28mである。柱穴の平面形はすべてほぼ円形で、大きさは南東隅のP2が直径20cmと小さいが、他は30cm前後である。深さは10cm～31cmである。柱痕跡は確認できなかった。主軸の方位はN-20°-Eである。

遺物はP1から弥生土器の甕の小片が微量出土しているだけである。

2号掘立柱建物跡（第32図）

2号掘立柱建物跡は1号掘立柱建物跡の南側で調査区のほぼ中央に位置する。遺構検出面の標高は約20.4mである。



第32图 F区掘立柱建物跡实测图 (縮尺=1/60)

建物跡は東西方向に主軸をとる1間×2間の構造で、6本すべての柱穴が残存していた。建物の規模は梁間が2.10m程度、桁行は3.60m程度と小さい。柱穴の平面形は円形に近いものもあるが、隅丸方形のものが多い。柱穴の大きさは35cm～45cmで、深さは11cm～32cmである。P3・P4・P5の柱穴内には長径25cm～30cmの扁平な円礫を使用した礎板が残っていた。また、P6では底面で径16cmの柱痕跡が確認された。主軸の方位はN-64°-Wである。

遺物はP3を除くすべての柱穴から弥生土器の甕や壺が少量出土しているが、建物の時期を特定できる土器はない。

3号掘立柱建物跡 (第32図)

3号掘立柱建物跡は2号掘立柱建物跡と重なりながら南東側に位置する。遺構検出面の標高は約20.4mである。

建物跡は南北方向に主軸をとる側柱建物跡かと考えられるが、南東側は1号溝状遺構により削平されている。検出した柱穴は梁間1間分、桁行2間分の計4本である。建物の規模は梁間1.77m以上、桁行3.36m以上ある。柱穴の平面形は基本的に円形で、大きさは径27cm～36cm、深さは16cm～43cmである。柱痕跡は確認できなかった。主軸の方位はN-24°-Eである。

遺物は出土していない。

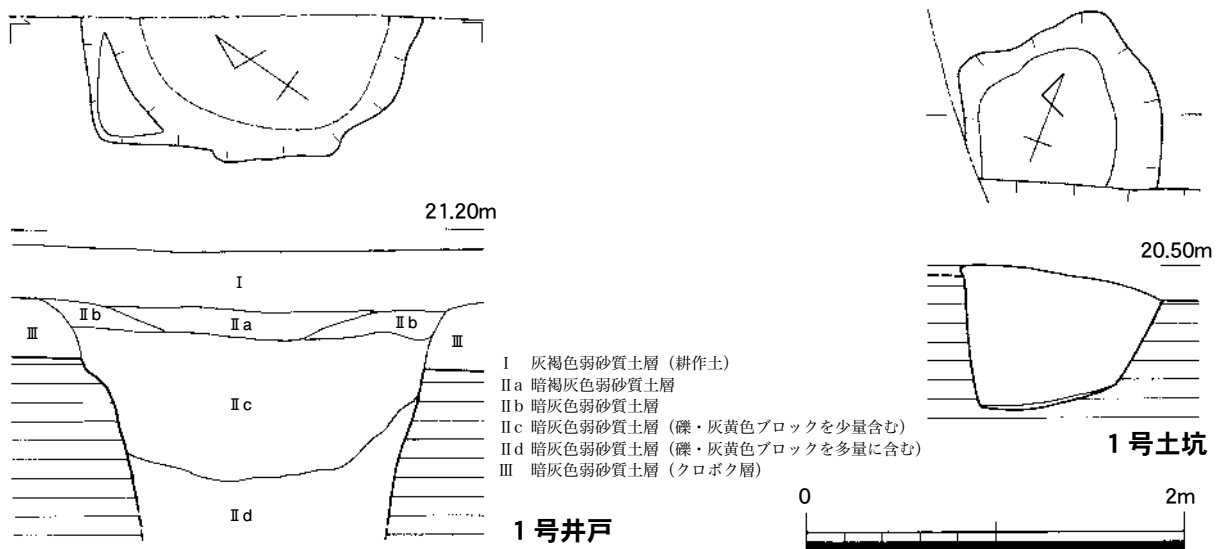
③ 井戸

井戸は調査区北東部で1基のみ確認された。

1号井戸 (第33図・第36図)

1号井戸の遺構検出面の標高は約20.5mである。

遺構は調査区北東部が調査区外まで続いており、調査した範囲は全体の1/2程度である。遺構の平面形は隅丸方形で、大きさは遺構検出面では1.81mである。ただし、遺構は検出面より約30cm上位の耕作土直下のクロボク層上面から掘り込まれており、この部位では大きさが2.16mである。壁面は75°程度の角度で立ち上がる。深さは検出面から80cmまで掘削したが、底面には達していない。遺構内の埋土は中層から下層では暗灰色弱砂質土で礫や灰黄色のブロック土を含む。



第33図 F区井戸・土坑実測図 (縮尺=1/40)

遺物は弥生土器の甕・壺と瓦器の埴などが中量出土している（第36図199～202）。199～202はすべて弥生土器である。199・200は甕の口縁部で、119の端部は高くつまみ上げる。201は壺の口縁部で外上方に長く開き、内面にはヘラミガキを施す。202は壺の底部で、ほぼ平底である。

④ 土坑

土坑は調査区の南部で1基のみ確認された。

1号土坑（第33図）

1号土坑は1号溝状遺構に切られており、遺構検出面の標高は約20.5mである。

遺構の平面形はやや不整形ではあるが隅丸長方形に近い形態で、残存状況は2/3程度と考えられる。遺構の大きさは検出長が0.93m、幅が1.05mである。壁面は西辺が垂直に近く立ち上がるが、東辺は60°程度の角度である。床面は皿状にわずかにくぼみ、相対的に西側が低くなっている。深さは最深部で76cmをはかる。

遺物は出土していない。

⑤ 溝状遺構

溝状遺構は調査区南東辺沿いと調査区やや北東部で計2条が確認された。

1号溝状遺構（第34図・第36図）

1号溝状遺構は調査区南東辺に沿って北東から南西方向に走り、3号竪穴住居跡・3号掘立柱建物跡・1号土坑・2号溝状遺構などを切る。遺構検出面の標高は南西部では20.3m前後であるが、北東部では19.8m程度と低い。

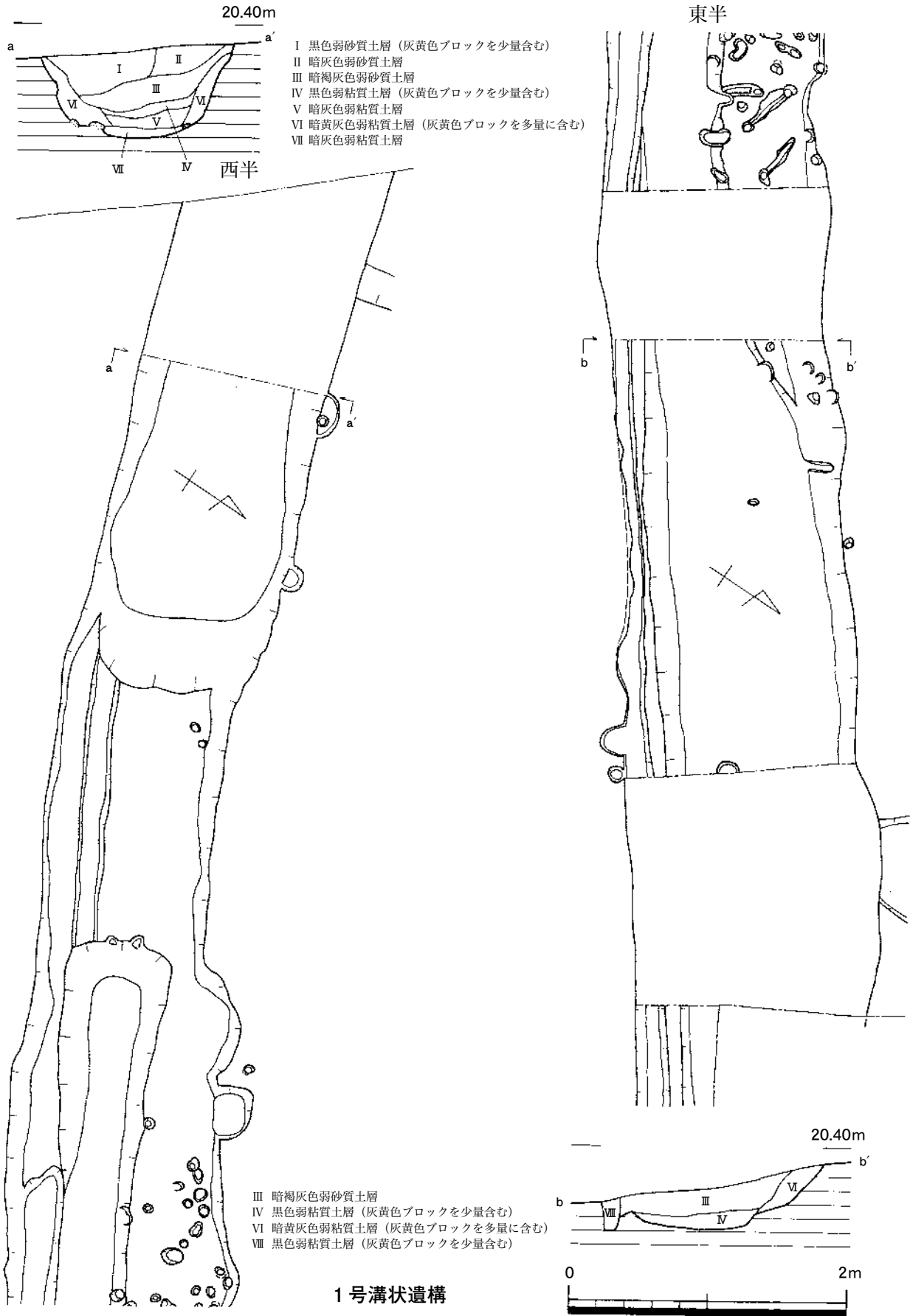
遺構は南東側にわずかにふくらむが全体としては直線的であり、北東・南西の両側は調査区外まで延びている。遺構内は溝浚えや掘り直し等によるものか、南東辺に沿って細い溝状遺構が並行し、他にも部分的に深くなっている箇所がある。遺構の規模は検出長21.9m・最大幅1.72mと大型である。南東辺に沿って走る細い溝状遺構の部分は幅25cm前後・深さ20cm前後である。また南東部は検出長3.95mにわたって35cm程度一段低く掘り込まれている。深さはこの南東部分で遺構検出面から60cm前後、他の部分では30cm前後である。遺構の底面は平坦に近く、断面形はほぼ逆台形である。遺構中央部付近で検出された小さいピットや溝状のくぼみは水生動物の棲息空間と考えられる。溝状遺構の埋土は上層が暗灰色の弱砂質土で、中層から下層では暗灰色ないし暗黄灰色の弱粘質土に基盤層に由来する灰黄色ブロック土を含む。主軸の方位はN-53°-Eである。遺構の性格はその規模や構造からみて人工的な水路と考えられる。

遺物は弥生土器の甕、土師器、須恵器の坏身・蓋・甕、磁器の碗、染付などの土器類と、砥石などが中量出土している（第36図203～205）。203は弥生土器の甕の底部で、器壁が非常に厚い。204は須恵器の蓋で低平な器形で、口縁端部が嘴状を呈する。205はやや小型で板状の砥石で、上下両面と側面を砥面として使用している。

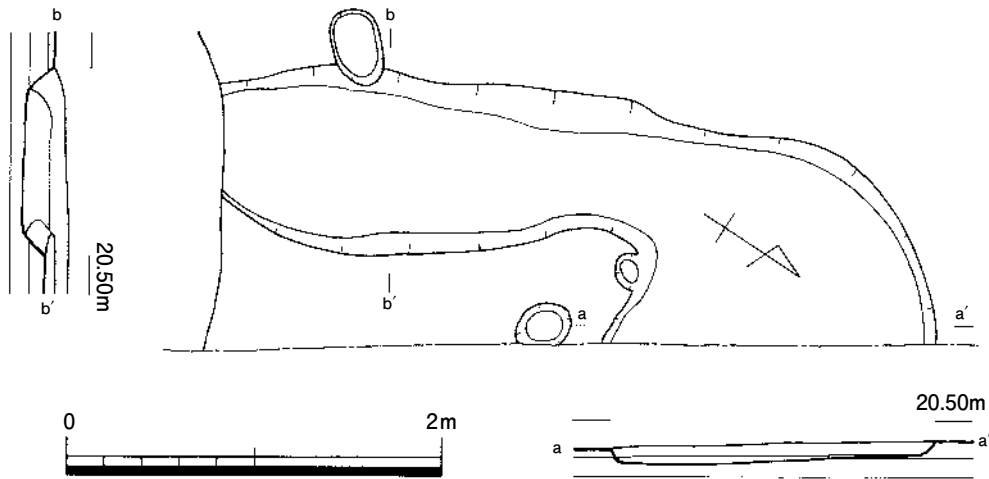
2号溝状遺構（第35図）

2号溝状遺構は調査区のやや北東部に位置し、遺構検出面の標高は約20.4mである。

遺構は南東部が1号溝状遺構に切れ、北東部は調査区外まで続いている。遺構の平面形は南東から北東方向に直線的に延びたのち、北西部で北東方向に屈曲している。遺構の規模は検出長4.04mで、幅は南東部では1.00mであるが、北東部では1.66mと広い。深さは最深部でも9cmとやや浅



第34図 F区溝状遺構実測図1 (縮尺=1/40)



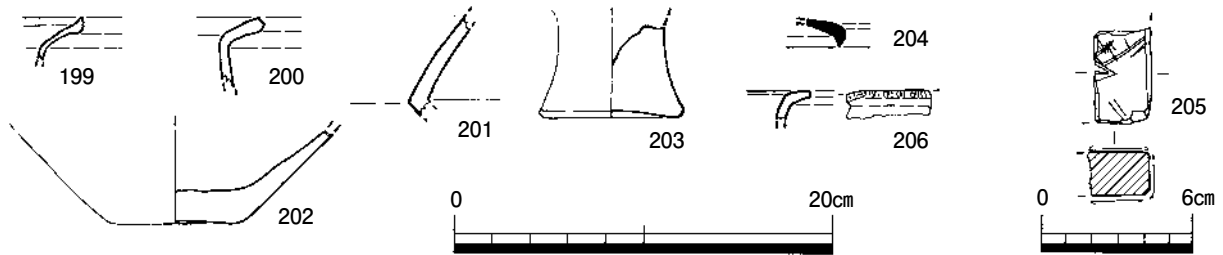
第35図 F区溝状遺構実測図2 (縮尺=1/40)

い。底面は全体的に平坦である。主軸の方位は南東-北東部分でN-29°-Wである。遺構の性格は不明であるが、風倒木痕の可能性はある。

遺物は出土していない。

⑥ その他の遺構

その他の遺構では2号掘立柱建物跡の東側で平面形が隅丸方形で長さ85cmの土坑状の浅いくぼみが検出されたほか、円形ないし楕円形のピットが約100基調査された。8号ピットからは弥生土器の甕が出土している(第36図206)。206は口縁部に刻目が施されている。

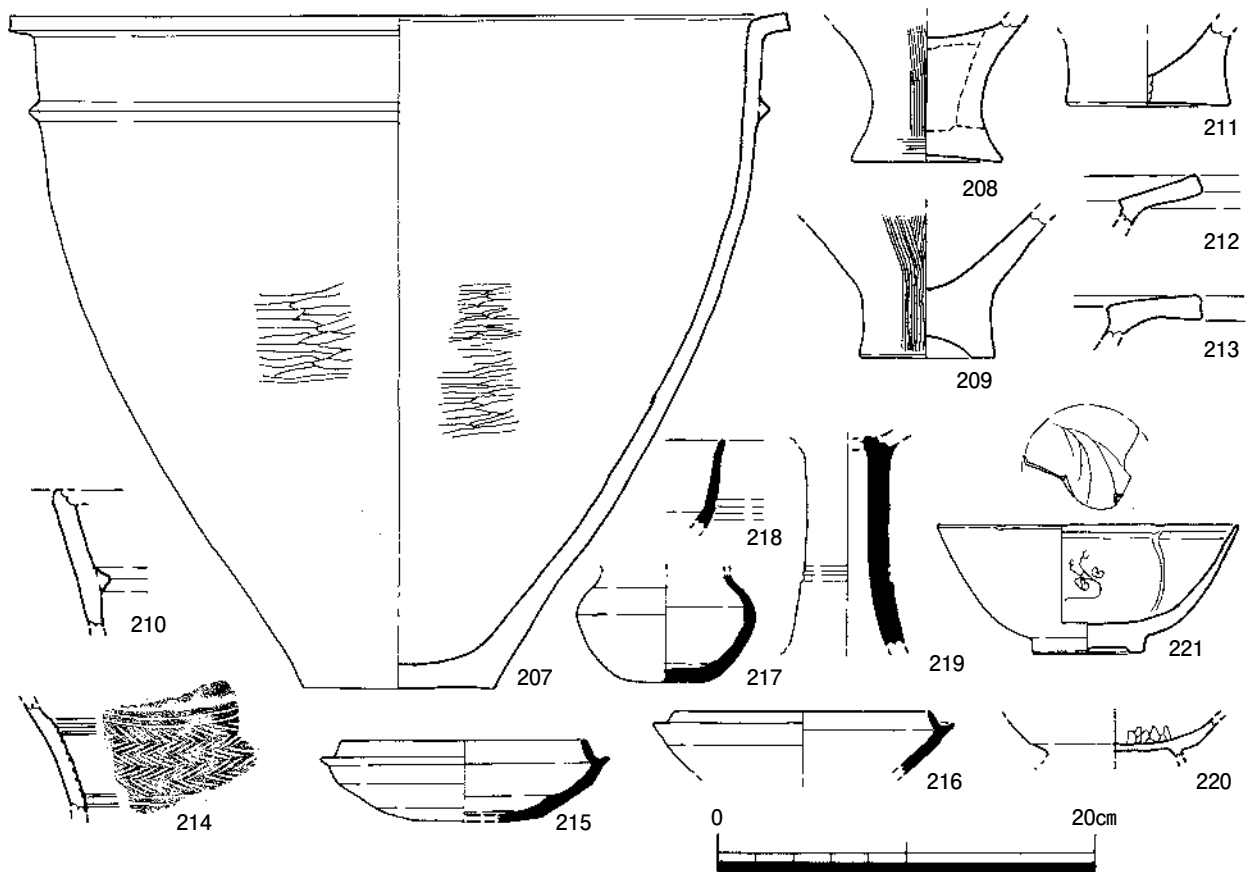


第36図 F区出土遺物実測図 (縮尺=205は1/3、他は1/4)

7 その他

ここでは各調査区の剥土中や表面採集により出土した遺物について記述する(第37図207~221)。207~209はクロボク層中から出土した弥生土器の甕である。207は口径に対して器高がやや低い形態で、体部の張りが無い器形である。口縁部は体部から強く屈折して短く水平に開き、体部上位に断面三角形の突帯をめぐらす。底部は平底である。内外面ともに横方向のヘラミガキを施す。208・209は甕の底部で、208は器壁が非常に厚く、209は底面の中央部を抉るような上げ底である。210~221は表面採集資料で210~214は弥生土器である。210は体部の張りが中位に向かって強くなる器形で、上位に三角突帯をめぐらす。211は甕の底部で、器壁がやや薄く、平底である。212・213は壺の口縁部で、鋤先状に近い形態である。214は壺の体部上位の破片で、文様帯の上位は削り

出しの低い段差を付ける。文様帯は羽状文で、その上位と下位を2条ずつの沈線で区画する。文様はすべてヘラ描きである。215～219は須恵器である。215・216は坏身で、215は体部のやや上位までヘラケズリを施す。217は小型の壺で、体部上位に張りがあり、底部は平底気味である。218は高杯の口縁部～体部中位の破片で、中位に幅広い凹線を2条めぐらす。219は長脚高杯の脚部で、中位に218と同様の2条の凹線をめぐらす。220は黒色土器A類の碗で、内面にヘラミガキが残る。221は青磁の碗で、口縁部は輪花状に6カ所に浅く刻みを入れている。体部内面と見込に草花文かと思われるヘラ彫りの文様がある。高台の畳付とその内側は露胎である。竜泉窯系である。



第37図 クロボク層出土及び表面採集遺物 (縮尺=1/4)

第1表 出土土器観察表

出土遺構	遺物番号	器種 (残存状況)	法量 (cm)		色調・胎土・焼成			成形・調整・釉薬		備考
			①器高 ②口径 ③底径 ④その他		色調 外:外面 内:内面	胎土	焼成	外:外面 内:内面		
A-SH2	8-1	弥生土器・甕? 口縁部	①(3.0)		外:灰黄褐色 内:にぶい黄褐色	1mm以下の石英・長石・ 角閃石・雲母中量	良好	外:ナデ 内:ナデ		
A-SH2	8-2	弥生土器・甕 口縁部	①(1.3)		外:褐色 内:にぶい黄褐色	1mm以下の石英・長石・ 雲母少量	良好	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ		
A-SH2	8-3	弥生土器・甕 口縁部	①(1.0)		外:にぶい黄褐色 内:橙色	1mm以下の石英・角閃 石・雲母少量	良好	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ		
A-SH2	8-4	弥生土器・甕 底部	①(5.1) ③(7.4)		外:橙色 内:灰褐色	1mm以下の石英・長石・ 雲母中量	良好	外:タテハケ 内:ナデ		
A-SH2	8-5	弥生土器・甕 底部	①(4.9) ③(6.6)		外:明赤褐色 内:明褐色	1mm以下の石英・長石・ 角閃石・雲母中量	良好	外:ナデ 内:ナデ		
A-SH2	8-6	弥生土器・壺 体部	①(2.1)		外:褐色 内:明褐色	1mm以下の石英・長石・ 角閃石・雲母少量	良好	外:ナデ 内:ナデ	貝殻施文	
A-SH2	8-7	弥生土器・壺 底部	①(4.2) ③(9.0)		外:橙色 内:にぶい橙色	1mm以下の石英・長石 中量	良好	外:タテハケ・ナデ 内:ナデ		
A-SH2	8-8	弥生土器・壺 底部	①(2.7)		外:黄褐色 内:浅黄褐色	1mm以下の石英・長石 中量	良好	外:ハケ 内:ナデ		
A-SH2	8-9	弥生土器・壺 体部	①(2.7)		外:にぶい黄色 内:にぶい黄色	1mm以下の長石・雲母 少量	良好	外:ナデ 内:ナデ	三角突帯2条	
A-SH2	8-10	土師器・甕 口縁～体部中位	①(19.9)		外:明黄褐色 内:にぶい赤褐色	1mm以下の長石・角閃 石・雲母中量	良好	外:ナデ? 内:ナデ?		
A-SH2	8-11	土師器・甕 口縁部	①(3.0)		外:明黄褐色 内:明黄褐色	1mm以下の石英・長石・ 角閃石中量	良好	外:ナデ? 内:ナデ?		
A-SH2	8-12	土師器・甕 取手部	①(6.8)		外:にぶい黄褐色 内:明褐色	1mm以下の石英・長石・ 角閃石・雲母中量	良好	外:指押え・ナデ 内:不明		
A-SH2	8-13	土師器・甕 取手部	①(5.2)		外:明褐色 内:明褐色	1mm以下の石英・長石・ 角閃石中量	良好	外:ナデ 内:ナデ		
A-SH2	8-14	須恵器・高坏? 口縁～体部上位	①(3.0)		外:灰色 内:灰色	1mm以下の長石少量	良好	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ		
A-SH2	8-15	須恵器・高坏 口縁～体部	①(3.0)		外:灰色 内:灰色	1mm以下の長石・雲母 中量	良好	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ		
A-SK1	8-16	弥生土器・甕 口縁～体部上位	①(6.5)		外:にぶい黄褐色 内:にぶい橙色	2mm以下の石英・長石・ 角閃石・雲母少量	良好	外:ヨコナデ・タテハケ 内:ヨコナデ・ナデ	三角突帯	
A-SK1	8-17	弥生土器・甕 口縁～体部上位	①(3.0)		外:浅黄色 内:浅黄色	0.5mm以下の石英・長 石・角閃石少量	良好	外:ヨコナデ・タテハケ 内:ヨコナデ		
A-SK3	8-18	弥生土器・甕 口縁部	①(1.0)		外:淡黄色 内:淡黄色	0.5mm以下の長石・角 閃石・雲母少量	良好	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ		
A-SK4	8-19	弥生土器・甕 口縁部	①(1.7)		外:橙色 内:橙色	1mm以下の石英・長石・ 角閃石中量	良好	外:ヨコナデ 内:ヘラミガキ		
A-SK6	8-20	弥生土器・壺 体部上位	①(5.0)		外:褐色 内:にぶい橙色	1mm以下の石英・長石・ 角閃石・雲母中量	良好	外:ナデ 内:ナデ	三角突帯	
A-SK8	8-21	弥生土器・壺? 体部下位	①(5.4)		外:にぶい黄褐色 内:にぶい黄褐色	2mm以下の石英・長石・ 角閃石中量	良好	外:ヘラミガキ? 内:ヘラミガキ?		
A-SK8	8-22	弥生土器・甕 口縁部	①(1.2)		外:にぶい黄褐色 内:にぶい黄褐色	0.5mm以下の石英・長 石・角閃石中量	良好	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ		
A-SK8	8-23	弥生土器・甕 体部上位	①(3.3)		外:にぶい黄褐色 内:にぶい黄褐色	2mm以下の石英・長石・ 角閃石中量	良好	外:ヨコナデ・タテハケ 内:ナデ	三角突帯	
A-SK8	8-24	弥生土器・甕 体部下位～底部	①(6.1) ③(5.6)		外:にぶい橙色 内:にぶい橙色	1mm以下の石英・長石・ 角閃石中量	良好	外:タテハケ・ナデ 内:ナデ		
A-SK8	8-25	弥生土器・甕 体部下位～底部	①(6.7)		外:にぶい黄褐色 内:にぶい黄褐色	1mm以下の石英・長石・ 角閃石中量	良好	外:タテハケ 内:ナデ		
A-SK8	8-26	土師器・碗? 口縁～体部中位	①(3.5)		外:淡黄色 内:淡黄色	0.5mm以下の長石・角 閃石少量	良好	外:ナデ 内:ナデ		
A-SD2	8-27	弥生土器・壺 体部	①(3.0)		外:にぶい黄褐色 内:にぶい黄褐色	1mm以下の石英・角閃 石少量	良好	外:ナデ 内:ナデ?	M字突帯	
A-SP3	8-28	弥生土器・壺 底部	①(4.1)		外:灰黄褐色 内:灰黄褐色	0.5mm以下の石英・長 石・角閃石少量	良好	外:ナデ 内:ナデ		
A-SP3	8-29	弥生土器・甕 体部上位	①(3.4)		外:灰黄色 内:灰黄色	0.5mm以下の長石・角 閃石少量	良好	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	三角突帯	
A-SP5	8-30	弥生土器・甕 口縁～体部上位	①(8.6)		外:褐色 内:明赤褐色	0.5mm以下の長石・雲 母中量	良好	外:ヘラミガキ・ヨコナデ 内:ヘラミガキ	三角突帯	
A-SP10	8-31	須恵器・蓋? 口縁部	①(2.2)		外:灰色 内:灰色	0.5mm以下の長石少量	良好	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ		
A-SP15	8-32	弥生土器・甕 口縁部	①(4.0)		外:にぶい褐色 内:にぶい褐色	1mm以下の石英・長石・ 角閃石中量	やや不良	外:ヨコナデ・タテハケ 内:ヨコナデ		
A-SP21	8-33	弥生土器・甕 口縁部	①(1.6)		外:にぶい褐色 内:にぶい褐色	0.5mm以下の石英・長 石・角閃石少量	良好	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ		

出土遺構	遺物番号	器種 (残存状況)	法量 (cm)		色調・胎土・焼成			成形・調整・釉薬	備考
			①器高 ②口径 ③底径 ④その他	色調 外:外面 内:内面	胎土	焼成	外:外面 内:内面		
A-SP28	8-34	土師器?・皿? 底部	①(1.0)	外:明赤褐色 内:明赤褐色	0.5mm以下の石英・角 閃石・雲母少量	良好	外:ヘラミガキ 内:ヘラミガキ		
A-SP29	8-35	弥生土器・甕 口縁部	①(2.3)	外:にぶい黄橙色 内:にぶい黄橙色	0.5mm以下の石英・角 閃石少量	良好	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ		
A-SP29	8-36	弥生土器・甕 底部～体部上位	①(8.6) ③(6.7)	外:にぶい黄橙色 内:にぶい黄橙色	1mm以下の長石・角閃 石中量	良好	外:タテハケ 内:ナデ	スス付着	
A区表採	8-39	須恵器・坏身 体部上位	①(1.4)	外:黄灰色 内:黄灰色	1mm以下の長石・雲母 少量	良好	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ		
B-SH1	13-40	弥生土器・甕 体部上端	①(3.5)	外:にぶい黄褐色 内:明黄褐色	1mm以下の長石・角閃 石・雲母少量	良好	外:タテハケ 内:ヨコナデ	沈線	
B-SH1	13-41	弥生土器・甕 口縁部	①(1.5)	外:にぶい黄褐色 内:にぶい黄褐色	1mm以下の長石・角閃 石少量	良好	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ		
B-SH2	13-42	弥生土器・甕 口縁部	①(1.5)	外:淡橙色 内:にぶい橙色	0.5mm以下の石英・長 石・角閃石少量	良好	外:ナデ 内:ナデ		
B-SH2	13-43	弥生土器・甕 口縁～体部上位	①(3.8)	外:褐灰色 内:褐灰色	0.5mm以下の石英・長 石・角閃石少量	良好	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ		
B-SH2	13-44	弥生土器・甕 口縁～体部上位	①(4.4)	外:浅黄褐色 内:橙色	0.5mm以下の石英・角 閃石少量	良好	外:ヨコナデ 内:タテハケ		
B-SH2	13-45	弥生土器・甕 口縁～体部上位	①(4.9)	外:橙色 内:橙色	1mm以下の長石・角閃 石少量	良好	外:タテハケ 内:ヨコナデ	沈線2条	
B-SH2	13-46	弥生土器・甕 口縁～体部上位	①(5.1)	外:にぶい黄褐色 内:橙色	0.5mm以下の石英・長 石少量	良好	外:タテハケ 内:ヨコナデ		
B-SH2	13-47	弥生土器・甕 体部下位～底部	①(6.5) ③(7.0)	外:橙色 内:浅黄褐色	0.5mm以下の石英・長 石・角閃石中量	良好	外:タテハケ・ナデ 内:ナデ		
B-SH2	13-48	弥生土器・甕 底部	①(5.0) ③6.2	外:橙色 内:橙色	1mm以下の石英・長石 少量	良好	外:タテハケ・ナデ 内:ナデ		
B-SH2	13-49	弥生土器・壺 口縁部	①(3.2)	外:褐灰色 内:褐灰色	0.5mm以下の石英・長 石・角閃石中量	良好	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ		
B-SH2	13-50	弥生土器・壺 口縁部	①(3.1)	外:にぶい黄褐色 内:橙色	2mm以下の石英・長石・ 角閃石少量	良好	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ		
B-SH2	13-51	弥生土器・壺 口縁部	①(1.1)	外:灰黄褐色 内:灰黄褐色	2mm以下の石英・長石・ 角閃石少量	良好	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ		
B-SH2	13-52	弥生土器・壺 口縁部	①(2.5)	外:にぶい黄褐色 内:明黄褐色	2mm以下の石英・長石・ 角閃石少量	良好	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ		
B-SH2	13-53	弥生土器・壺 口縁部	①(1.8)	外:黄灰色 内:黄灰色	2mm以下の石英・長石・ 角閃石少量	良好	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ		
B-SH2	13-54	弥生土器・壺 口縁部	①(4.6)	外:にぶい黄褐色 内:褐灰色	0.5mm以下の石英・長 石・角閃石少量	良好	外:ナデ 内:ヘラミガキ		
B-SH2	13-55	弥生土器・壺 口縁部	①(1.3)	外:明黄褐色 内:明黄褐色	1mm以下の石英・長石・ 角閃石少量	良好	外:ヨコナデ? 内:ヨコナデ?		
B-SH2	13-56	弥生土器・甕 体部	①(5.6)	外:橙色 内:明褐色	2mm以下の石英・長石 少量	良好	外:ナデ 内:ナデ	三角突帯	
B-SH2	13-57	弥生土器・壺 体部	①(5.9)	外:黒褐色 内:にぶい黄褐色	1mm以下の石英・長石 少量	良好	外:ナデ 内:ナデ	三角突帯	
B-SH2	13-58	弥生土器・壺 体部	①(3.5)	外:にぶい黄褐色 内:にぶい黄褐色	0.5mm以下の石英・長 石・角閃石少量	良好	外:ナデ 内:ナデ	三角突帯	
B-SH2	13-59	弥生土器・壺 体部	①(2.7)	外:黒褐色 内:にぶい黄褐色	2mm以下の石英・長石 少量	良好	外:ナデ 内:ナデ	M字突帯	
B-SH2	13-60	弥生土器・壺 底部	①(5.4)	外:橙色 内:橙色	1mm以下の石英・長石 少量	良好	外:ヘラミガキ・ナデ 内:ナデ		
B-SH2	13-61	弥生土器・壺 底部	①(3.2)	外:灰黄褐色 内:灰黄褐色	2mm以下の石英・長石・ 角閃石少量	良好	外:ヘラミガキ・ナデ 内:指押え		
B-SH2	13-62	弥生土器・甕 口縁部	①(4.3)	外:明赤褐色 内:明赤褐色	2mm以下の石英・長石 中量	良好	外:タテハケ 内:ヨコナデ		
B-SK1	13-68	弥生土器・甕 口縁～底部	①(33.6) ②(42.4) ③(9.6)	外:橙色 内:橙色	1mm以下の石英・長石・ 雲母中量	良好	外:ヨコナデ・ヘラミガキ 内:ヨコナデ・ヘラミガキ		
B-SK3	13-69	弥生土器・甕 口縁～体部上位	①(2.7)	外:灰褐色 内:灰褐色	1mm以下の石英・長石・ 角閃石少量	良好	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ		
B-SK3	13-70	弥生土器・甕 口縁部	①(1.7)	外:にぶい黄褐色 内:にぶい黄褐色	2mm以下の石英・長石・ 角閃石少量	良好	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ		
B-SK3	13-71	弥生土器・甕 底部	①(3.4) ③(7.8)	外:にぶい橙色 内:—	1mm以下の石英・長石・ 角閃石少量	良好	外:タテハケ・ヨコナデ 内:—		
B-SK3	13-72	弥生土器・甕 体部下位～底部	①(7.3)	外:にぶい橙色 内:にぶい黄褐色	2mm以下の石英・長石・ 角閃石少量	良好	外:タテハケ 内:不明		
B-SK3	13-73	弥生土器・甕 底部	①(6.0)	外:にぶい黄褐色 内:灰黄褐色	1mm以下の石英・長石・ 角閃石少量	良好	外:タテハケ 内:不明		

出土遺構	遺物番号	器種 (残存状況)	法量 (cm)		色調・胎土・焼成			成形・調整・釉薬		備考
			①器高 ②口径 ③底径 ④その他		色調 外:外面 内:内面	胎土	焼成	外:外面 内:内面		
B-SK3	13-74	弥生土器・壺 口縁部	①(1.9)		外:にぶい黄橙色 内:にぶい黄橙色	1mm以下の石英・長石・ 角閃石・雲母少量	良好	外:タテハケ 内:ヨコナデ		
B-SK4	13-75	弥生土器・甕 口縁部	①(1.6)		外:にぶい褐色 内:にぶい褐色	0.5mm以下の長石・角 閃石少量	良好	外:ナデ 内:ナデ		
B-SK4	13-76	弥生土器・壺 体部	①(3.8)		外:にぶい褐色 内:にぶい褐色	1mm以下の石英・角閃 石中量	良好	外:ナデ 内:ナデ	二枚具施文	
B-SK8	13-77	弥生土器・甕 口縁～体部上位	①(5.5)		外:にぶい黄橙色 内:橙色	1mm以下の石英・角閃 石・雲母少量	良好	外:ヨコナデ・タテハケ 内:ヨコナデ	刻目突帯	
B-SK8	13-78	弥生土器・甕 底部	①(4.0)		外:明黄褐色 内:—	1mm以下の石英・角閃 石・雲母少量	良好	外:不明 内:—		
B-SK8	13-79	弥生土器・壺 口縁部	①(2.1)		外:にぶい黄橙色 内:にぶい黄橙色	1mm以下の角閃石・雲 母少量	良好	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ		
B-SK8	13-80	弥生土器・壺 底部	①(3.6)		外:黒褐色 内:浅黄橙色	1mm以下の石英・角閃 石・雲母少量	良好	外:タテハケ 内:不明		
B-SK8	13-81	弥生土器・壺 体部	①(1.7)		外:にぶい黄橙色 内:にぶい黄橙色	1mm以下の石英・角閃 石・雲母少量	良好	外:不明 内:不明	羽状文	
B-SK8	13-82	弥生土器・蓋 口縁部	①(1.2)		外:にぶい黄橙色 内:にぶい黄橙色	1mm以下の長石・角閃 石少量	良好	外:タテハケ 内:ナデ?		
B-SK8	13-83	土師器?・甕 口縁部	①(4.3)		外:灰黄褐色 内:橙色	1mm以下の長石・角閃 石・雲母少量	良好	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ		
B-SK8	13-84	土師器?・甕 口縁～底部	①(12.3) ②(12.4)		外:明赤褐色 内:黒褐色	1mm以下の石英・角閃 石・雲母少量	良好	外:不明 内:ヨコナデ・ヘラケズリ		
B-SK8	13-85	土師器・高坏 脚部下半	①(3.5)		外:にぶい黄橙色 内:にぶい黄橙色	1mm以下の長石・角閃 石少量	良好	外:不明 内:不明	穿孔有り	
B-SK8	13-86	須恵器・坏蓋 体部下位	①(2.2)		外:褐灰色 内:灰白色	1mm以下の長石・雲母 少量	良好	外:不明 内:ヨコナデ		
B-SK8	13-87	須恵器・坏蓋 体部下位～口縁	①(2.1)		外:灰色 内:灰白色	1mm以下の長石・角閃 石少量	良好	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ		
B-SK8	13-88	須恵器・坏身 口縁～体部上位	①(2.9)		外:にぶい褐色 内:灰オリーブ色	1mm以下の石英・長石・ 角閃石・雲母少量	良好	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ		
B-SK8	13-89	須恵器・高坏 脚部	①(2.7) ③7.6		外:褐灰色 内:灰白色	1mm以下の長石少量	良好	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ		
B-SK8	13-90	須恵器・高坏 脚部下位	①(1.3)		外:灰色 内:黄灰色	1mm以下の長石・角閃 石・雲母少量	良好	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ		
B-SK8	13-91	須恵器・短頸壺 口縁～体部中位	①(5.6)		外:灰色 内:灰色	0.5mm以下の角閃石少 量	良好	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ		
B-SK8	13-92	須恵器・甕 体部上位	①(9.8)		外:褐色 内:にぶい橙色	5mm以下の長石・角閃 石・雲母中量	良好	外:タタキ目・カキ目 内:タタキ目		
B-SK8	13-93	須恵器・壺 体部中位	①(5.6)		外:灰色 内:灰色	0.5mm以下の長石少量	良好	外:ナデ・ヘラケズリ 内:ナデ	削出し突帯	
B-SK8	13-94	土師器・甕 口縁～底部	①(3.8) ②(21.1)		外:にぶい黄橙色 内:にぶい黄橙色	2mm以下の石英・長石 少量	良好	外:ヨコナデ・タテハケ 内:ヨコナデ・ハケ目		
B-SK8	13-95	土師器・甕 口縁～体部上位	①(13.1)		外:にぶい黄橙色 内:にぶい黄橙色	2mm以下の石英・長石 少量	良好	外:タテハケ 内:ヨコナデ・ハケ目		
B-SD2	14-96	弥生土器・甕 口縁～体部上位	①(4.4)		外:にぶい黄橙色 内:にぶい黄橙色	0.5mm以下の石英・長 石・角閃石少量	良好	外:ナデ? 内:ナデ?		
B-SD2	14-97	弥生土器・甕 口縁部	①(1.6)		外:にぶい橙色 内:にぶい橙色	0.5mm以下の角閃石・ 雲母少量	良好	外:ナデ 内:ナデ		
B-SD2	14-98	土師器?・甕 口縁部	①(3.4)		外:にぶい黄橙色 内:にぶい黄橙色	2mm以下の石英・長石・ 角閃石中量	良好	外:ナデ 内:ナデ・ヘラケズリ?		
B-SD2	14-99	弥生土器・甕 口縁～体部上位	①(3.2)		外:にぶい黄橙色 内:にぶい黄橙色	2mm以下の石英・長石・ 角閃石中量	良好	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ		
B-SD2	14-100	弥生土器・甕 底部	①(4.5)		外:浅黄褐色 内:浅黄褐色	1mm以下の石英・長石・ 角閃石中量	良好	外:タテハケ・ナデ 内:ナデ		
B-SD2	14-101	弥生土器・甕 底部	①(5.3) ③(8.8)		外:にぶい橙色 内:褐灰色	0.5mm以下の石英・長 石・角閃石中量	良好	外:タテハケ・ナデ 内:ナデ		
B-SD2	14-102	弥生土器・甕 底部	①(5.8)		外:明黄褐色 内:にぶい黄褐色	1mm以下の石英・長石・ 角閃石中量	良好	外:ナデ 内:ナデ		
B-SD2	14-103	弥生土器・壺 口縁～体部上端	①(2.1)		外:灰黄褐色 内:灰黄色	0.5mm以下の角閃石少 量	良好	外:ナデ? 内:ナデ?		
B-SD2	14-104	弥生土器・器台 脚部?	①(3.6)		外:にぶい橙色 内:橙色	0.5mm以下の石英・角 閃石・雲母少量	良好	外:ヘラミガキ 内:ナデ		
B-SD2	14-105	須恵器・坏身 完形	①4.2 ②13.5 ③4.2 ④最大径15.6		外:灰黄褐色 内:灰黄褐色	2mm以下の長石・角閃 石・少量	良好	外:ヨコナデ・ヘラケズリ 内:ヨコナデ		
B-SD3	14-106	瓦器・埴 口縁～体部中位	①(4.7)		外:灰色 内:灰色	1mm以下の長石・角閃 石・雲母少量	良好	外:ナデ 内:ヘラミガキ		

出土遺構	遺物番号	器種 (残存状況)	法量 (cm)		色調・胎土・焼成			成形・調整・釉薬	備考
			①器高 ④その他	②口径 ③底径	色調 外:外面 内:内面	胎土	焼成		
B-SP4	14-107	弥生土器・甕 口縁～体部上位	①(5.5)		外:にぶい黄橙色 内:にぶい黄橙色	1mm以下の石英・長石・ 角閃石・雲母中量	良好	外:ヨコナデ・タテハケ 内:ヨコナデ	
B-SP16	14-108	弥生土器・短頸壺 口縁～体部中位	①(6.2)		外:暗灰黄色 内:灰黄色	1mm以下の長石・角閃 石・雲母中量	良好	外:ナデ 内:ナデ	
B-SP16	14-109	弥生土器・壺 体部	①(2.0)		外:橙色 内:ー	0.5mm以下の長石・角 閃石少量	良好	外:ナデ 内:ー	三角突帯
B-SP17	14-110	弥生土器・甕 口縁部	①(2.0)		外:オリーブ灰色 内:オリーブ灰色	0.5mm以下の石英・長 石・角閃石中量	良好	外:ナデ 内:ナデ	
B-SP23	14-111	弥生土器・甕 口縁部	①(1.7)		外:にぶい褐色 内:にぶい黄褐色	1mm以下の石英・長石・ 角閃石少量	良好	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	
B-SP23	14-112	弥生土器・壺 体部下位～底部	①(4.4)		外:にぶい黄褐色 内:にぶい黄褐色	1mm以下の長石・角閃 石・雲母少量	良好	外:ヘラミガキ 内:ナデ	
B-SP23	14-113	弥生土器・器台 体部下位～底部	①(4.6)		外:灰白色 内:灰白色	1mm以下の石英・角閃 石・雲母少量	良好	外:タテハケ 内:不明	
B-SP29	14-115	弥生土器・甕 口縁部	①(2.0)		外:にぶい黄褐色 内:にぶい黄褐色	1mm以下の長石・角閃 石・雲母少量	良好	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	
B-SP30	14-116	弥生土器・甕 口縁部	①(2.1)		外:橙色 内:橙色	1mm以下の石英・長石・ 角閃石・雲母少量	良好	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	
B表採	14-117	弥生土器・甕 口縁～体部上位	①(9.4)		外:にぶい黄褐色 内:にぶい黄褐色	1mm以下の石英・長石・ 角閃石・雲母少量	良好	外:ヨコナデ・タテハケ 内:ヨコナデ	三角突帯
B表採	14-118	弥生土器・甕 口縁～体部上位	①(5.0)		外:浅黄褐色 内:浅黄褐色	3mm以下の石英・長石・ 角閃石少量	良好	外:ヨコナデ・タテハケ 内:ヨコナデ	
B表採	14-119	弥生土器・壺 口縁部	①(3.0)		外:橙色 内:橙色	0.5mm以下の石英・角 閃石・雲母少量	良好	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	
B表採	14-120	弥生土器・壺 口縁部	①(4.1)		外:にぶい黄褐色 内:にぶい黄褐色	3mm以下の石英・長石・ 角閃石少量	良好	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	
B表採	14-121	須恵器・坏蓋 体部中位～口縁	①(3.5)		外:灰白色 内:灰白色	0.5mm以下の角閃石少 量	良好	外:ヘラケズリ・ヨコナデ 内:ヨコナデ	
B表採	14-122	須恵器・坏蓋 口縁部	①(1.6)		外:灰色 内:灰色		良好	外:ヘラケズリ・ヨコナデ 内:ヨコナデ	
B表採	14-123	須恵器・坏身 口縁～体部上位	①(2.3)		外:灰色 内:灰色		良好	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	
B表採	14-124	須恵器・壺? 口縁部	①(2.3)		外:灰色 内:灰色	0.5mm以下の角閃石少 量	良好	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	
C-SB3	20-125	弥生土器・短頸壺 口縁～体部上位	①(3.3)		外:にぶい黄色 内:にぶい黄色	1mm以下の長石・雲母 少量	良好	外:ナデ? 内:ナデ?	口縁部に孔有 り
C-SD1	20-126	弥生土器・甕 口縁～体部中位	①(13.9)		外:明赤褐色 内:明褐色	1mm以下の石英・長石・ 角閃石中量	良好	外:ヨコナデ・タテハケ 内:ナデ?	
C-SD1	20-127	弥生土器・甕 口縁～体部上位	①(4.3)		外:褐色 内:明黄褐色	1mm以下の石英・長石・ 角閃石中量	良好	外:タテハケ 内:ナデ	
C-SD1	20-128	弥生土器・甕 口縁部	①(3.1)		外:橙色 内:橙色	1mm以下の石英・角閃 石中量	良好	外:タテハケ 内:ナダ	
C-SD1	20-129	弥生土器・甕 体部下位～底部	①(6.7) ②(8.4)		外:橙色 内:黒褐色	1mm以下の石英・長石・ 角閃石・雲母中量	良好	外:タテハケ 内:ナデ	
C-SD1	20-130	弥生土器・壺? 口縁部	①(3.2)		外:橙色 内:明赤褐色	1mm以下の石英・長石・ 角閃石・雲母中量	良好	外:ナデ 内:ナデ	
C-SD1	20-131	弥生土器・高坏 脚部上位	①(5.8)		外:明褐色 内:明褐色	1mm以下の石英・長石・ 角閃石・雲母中量	良好	外:ナデ 内:ナデ	
C-SP8	20-132	須恵器・坏身 体部上位	①(1.6)		外:灰黄色 内:灰黄色	1mm以下の長石・雲母 中量	良好	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	
C-SP9	20-133	弥生土器・甕? 口縁部	①(2.3)		外:にぶい黄色 内:にぶい黄色	1mm以下の石英・雲母 少量	良好	外:不明 内:不明	
C-SP15	20-134	縄文土器・鉢? 口縁部	①(3.5)		外:黒褐色 内:黒褐色	1mm以下の長石・角閃 石・雲母少量	良好	外:ナデ 内:ナデ	刺突文
C-SP15	20-135	土師器・器種不明 体部?	①(3.7)		外:黄褐色 内:オリーブ黒色	1mm以下の石英・長石・ 角閃石中量	良好	外:タタキ→ハケ 内:タタキ	
C-SP18	20-137	弥生土器・鉢? 口縁～体部上位	①(3.6)		外:明褐色 内:橙色	3mm以下の石英・角閃 石・雲母中量	良好	外:ナデ 内:ナデ	三角突帯
C-S15・17 土層	20-138	須恵器・甕 口縁～体部上位	①(8.8) ②(22.0)		外:灰色 内:灰色		良好	外:ヨコナデ・タタキ 内:ヨコナデ・タタキ	
C-S15・17 土層	20-139	弥生土器・甕? 底部	①(2.2) ③7.0		外:にぶい黄褐色 内:にぶい黄褐色	2mm以下の石英・長石 少量	良好	外:ナデ 内:ナデ	
C-S15・17 土層	20-140	須恵器・甕 体部下位?	①(9.9)		外:黄灰色 内:黄灰色		良好	外:タタキ 内:タタキ	
C-S15・17 土層	20-142	須恵器・提瓶 体部	①(11.9)		外:灰色 内:灰色		良好	外:カキ目 内:ヨコナデ	

出土遺構	遺物番号	器種 (残存状況)	法量 (cm)		色調・胎土・焼成			成形・調整・釉薬	備考
			①器高 ②口径 ③底径 ④その他	色調 外:外面 内:内面	胎土	焼成	外:外面 内:内面		
C-S15-17 土層	20-143	青磁・碗 口縁部	①(2.9)	外:灰オリーブ色 内:灰オリーブ色	—	良好	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ・ヘラケズリ	同安窯系?	
D-SK1	24-144	弥生土器・甕 口縁部	①(1.8)	外:橙色 内:明赤褐色	1mm以下の石英・角閃 石中量	良好	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ		
D-SK1	24-145	弥生土器・甕 口縁部	①(2.5)	外:にぶい褐色 内:褐色	0.5mm以下の石英・長 石少量	良好	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ		
D-SK1	24-146	弥生土器・甕 口縁部	①(1.5)	外:浅黄褐色 内:浅黄褐色	0.5mm以下の石英・長 石少量	良好	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ		
D-SK1	24-147	弥生土器・甕 底部	①(6.6)	外:明赤褐色 内:灰黄褐色	0.5mm以下の石英・長 石少量	良好	外:不明 内:不明		
D-SK1	24-148	弥生土器・壺 口縁部	①(2.3)	外:にぶい黄褐色 内:にぶい黄褐色	0.5mm以下の石英・角 閃石少量	良好	外:ナデ 内:ナデ		
D-SK1	24-149	弥生土器・壺 体部	①(3.4)	外:にぶい黄褐色 内:にぶい黄褐色	1mm以下の石英・長石・ 角閃石中量	良好	外:ナデ 内:ナデ	三角突帯2条	
D-SK1	24-150	弥生土器・壺 底部	①(3.0)	外:にぶい黄褐色 内:にぶい黄褐色	0.5mm以下の石英中量	良好	外:ヘラミガキ・ナデ 内:ナデ		
D-SK1	24-151	弥生土器・蓋 体部	①(0.8) ②(6.0)	外:にぶい褐色 内:にぶい褐色	0.5mm以下の石英・角 閃石少量	良好	外:ナデ? 内:ナデ?		
D-SK1	24-152	須恵器・坏身 口縁～体部上位	①(3.2)	外:灰色 内:灰色	0.5mm以下の長石・角 閃石少量	良好	外:ヨコナデ・ヘラケズリ 内:ヨコナデ		
D-SK1	24-153	須恵器・高坏 坏部下半	①(3.1)	外:灰色 内:灰色	0.5mm以下の長石・角 閃石少量	良好	外:ヘラケズリ→ヨコナデ 内:ヨコナデ	脚部上端に方 形透孔	
D-SK1	24-154	土師器・高坏? 口縁部	①(2.3)	外:褐色 内:褐色	0.5mm以下の石英・長 石微量	良好	外:ヨコナデ 内:ヘラミガキ		
D-SP1	24-155	弥生土器・甕 口縁部	①(1.7)	外:にぶい黄色 内:にぶい黄色	1mm以下の石英・雲母 少量	良好	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ		
D-SP2	24-156	弥生土器・甕? 口縁部	①(4.3)	外:にぶい黄褐色 内:にぶい黄褐色	1mm以下の石英・長石・ 雲母中量	良好	外:ハケ目 内:ヘラミガキ		
D-SP2	24-157	弥生土器・甕 口縁部	①(2.3)	外:暗赤褐色 内:赤褐色	1mm以下の石英・長石・ 角閃石中量	良好	外:ヨコナデ 内:ヘラミガキ	三角突帯	
D-SP2	24-158	弥生土器・甕 底部	①(2.9) ③5.5	外:褐色 内:褐色	1mm以下の石英・長石・ 角閃石・雲母中量	良好	外:不明 内:—		
D-SP3	24-159	弥生土器・甕 口縁部	①(3.9)	外:明黄褐色 内:明黄褐色	0.5mm以下の石英・長 石・角閃石中量	良好	外:ナデ 内:ナデ	刻目突帯	
E-SH1	29-160	弥生土器・甕 口縁部	①(2.0)	外:にぶい黄褐色 内:にぶい黄褐色	1mm以下の長石・角閃 石・雲母少量	良好	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ		
E-SH1	29-161	弥生土器・甕 口縁部	①(1.8)	外:褐色 内:にぶい黄褐色	1mm以下の石英・長石・ 角閃石少量	良好	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ		
E-SH1	29-162	弥生土器・甕 体部下位～底部	①(7.4)	外:褐色 内:にぶい黄褐色	1mm以下の石英・長石・ 雲母中量	良好	外:ハケ 内:ナデ?		
E-SH1	29-163	弥生土器・甕 底部	①(3.2) ③7.3	外:明黄褐色 内:—	1mm以下の長石・雲母 中量	良好	外:ナデ 内:—		
E-SH1	29-164	弥生土器・壺 口縁部	①(1.7)	外:にぶい黄褐色 内:にぶい黄褐色	1mm以下の長石・角閃 石・雲母中量	良好	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ		
E-SH1	29-165	弥生土器・壺 口縁部	①(1.3)	外:にぶい黄褐色 内:にぶい黄褐色	1mm以下の長石・雲母 中量	良好	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ		
E-SH1	29-166	弥生土器・壺 体部	①(2.9)	外:にぶい黄褐色 内:にぶい黄褐色	1mm以下の長石・雲母 中量	良好	外:ヘラミガキ? 内:ヘラミガキ?	三角突帯	
E-SH1	29-167	弥生土器・壺 底部	①(3.0) ③(6.9)	外:にぶい黄褐色 内:にぶい黄褐色	1mm以下の長石・雲母 中量	良好	外:ナデ 内:ナデ		
E-SH1	29-168	弥生土器・器台 口縁～体部上位	①(4.2)	外:にぶい黄褐色 内:にぶい黄褐色	1mm以下の長石・角閃 石・雲母中量	良好	外:不明 内:不明		
E-SH1	29-169	須恵器・坏蓋 天井部～口縁部	①(3.8) ②(14.0)	外:暗灰黄色 内:黄灰色	1mm以下の長石・角閃 石少量	良好	外:ヘラケズリ・ヨコナデ 内:ヨコナデ		
E-SH1	29-170	須恵器・坏身 口縁部	①(1.9)	外:灰色 内:灰色	1mm以下の長石・角閃 石中量	良好	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ		
E-SH1	29-171	須恵器・壺? 体部上位	①(5.9)	外:灰白色 内:灰白色	1mm以下の石英・雲母 少量	良好	外:ヨコハケ 内:ヨコナデ		
E-SH1	29-172	縄文土器・鉢? 口縁部	①(3.2)	外:褐色 内:褐色	1mm以下の石英・角閃 石・雲母中量	良好	外:ナデ 内:ナデ		
E-SH1 カマド内	29-173	弥生土器・甕 口縁部	①(1.5)	外:にぶい黄褐色 内:にぶい黄褐色	1mm以下の長石・角閃 石少量	良好	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ		
E-SH1 カマド内	29-174	弥生土器・壺 口縁部	①(2.8)	外:にぶい黄褐色 内:にぶい黄褐色	1mm以下の長石・角閃 石中量	良好	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ		
E-SH1 カマド内	29-175	弥生土器・器種 不明/口縁部?	①(3.1)	外:にぶい黄褐色 内:褐色	1mm以下の長石・角閃 石・雲母少量	良好	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ		

出土遺構	遺物番号	器種 (残存状況)	法量 (cm)		色調・胎土・焼成			成形・調整・釉薬		備考
			①器高 ②口径 ③底径 ④その他		色調 外:外面 内:内面	胎土	焼成	外:外面 内:内面		
E-SH1 カマド付近	29-176	弥生土器・甕 口縁～体部上位	①(3.3)		外:浅黄色 内:浅黄色	1mm以下の長石中量	良好	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ		
E-SH1 カマド付近	29-177	弥生土器・甕 体部下位～底部	①(4.2) ③(7.0)		外:橙色 内:灰黄褐色	1mm以下の石英・長石・ 角閃石中量	良好	外:ナデ 内:ナデ		
E-SH1 カマド付近	29-178	弥生土器・甕? 底部	①(3.3) ③(6.6)		外:橙色 内:灰黄褐色	1mm以下の石英・長石・ 角閃石中量	良好	外:ハケ目 内:ナデ		
E-SH1 カマド付近	29-179	土師器・甕 取手部	①(8.5)		外:にぶい黄褐色 内:にぶい黄褐色	1mm以下の石英・長石・ 雲母少量	良好	外:ハケ→ナデ 内:ヨコハケ		
E-SH1 カマド付近	29-180	土師器・器種不明 口縁部	①(4.7)		外:にぶい橙色 内:にぶい橙色	1mm以下の石英・長石・ 角閃石・雲母中量	良好	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ		
E-SH1 カマド付近	29-181	須恵器・甕? 口縁～頸部	①(5.5)		外:オリーブ黒色 内:オリーブ黒色	1mm以下の長石・角閃 石中量	良好	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ		
E-SH2	29-182	弥生土器・甕 口縁部	①(1.8)		外:浅黄褐色 内:浅黄褐色	2mm以下の石英・長石・ 角閃石少量	良好	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ		
E-SH2	29-183	弥生土器・甕 口縁部	①(1.4)		外:橙色 内:橙色	2mm以下の石英・長石・ 角閃石・雲母少量	良好	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ		
E-SH2	29-184	弥生土器・壺 体部上位	①(3.9)		外:浅黄褐色 内:浅黄褐色	2mm以下の石英・長石・ 角閃石少量	良好	外:ナデ 内:ナデ	三角突帯2条	
E-SK1	29-185	弥生土器?・器種 不明/口縁部?	①(2.6)		外:橙色 内:橙色	2mm以下の石英・長石・ 角閃石・雲母少量	良好	外:ナデ 内:ナデ		
E-SK1	29-186	土師器・甕 体部	①(11.0)		外:浅黄褐色 内:浅黄褐色	2mm以下の石英・長石・ 雲母少量	良好	外:タテハケ 内:ヨコハケ→ナデ		
E-SP1	29-187	弥生土器・蓋? 口縁～体部下位	①(1.6)		外:橙色 内:橙色	0.5mm以下の石英・角 閃石中量	良好	外:ナデ? 内:ナデ?		
E-SP5	29-188	弥生土器・甕 口縁部	①(1.7)		外:灰褐色 内:にぶい橙色	1mm以下の石英・角閃 石少量	良好	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ		
E-SP5	29-189	瓦器・碗 口縁～体部中位	①(5.5) ②(14.8)		外:灰黄色 内:褐灰色	0.5mm以下の石英・角 閃石少量	良好	外:ナデ・指押え 内:ナデ		
E-SP10	29-190	土師器・坏 口縁～体部下位	①(2.0) ③5.4		外:浅黄褐色 内:浅黄褐色	0.5mm以下の石英・角 閃石少量	良好	外:ナデ・糸切り 内:ナデ		
E-SP10	29-191	須恵器・坏蓋 口縁部	①(2.2)		外:灰色 内:にぶい橙色		良好	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ		
E-SP10	29-192	瓦器・碗 口縁～体部上位	①(3.0)		外:浅黄褐色 内:浅黄褐色	0.5mm以下の角閃石少 量	良好	外:ナデ 内:ナデ		
E-SP11	29-193	土師器・皿 口縁～底部	①(1.0)		外:にぶい黄褐色 内:にぶい黄褐色		良好	外:ナデ・糸切り 内:ナデ		
E-SP12	29-194	弥生土器・甕 底部	①(2.5)		外:明赤褐色 内:—	0.5mm以下の石英・長 石・角閃石中量	良好	外:タテハケ→ナデ 内:—		
E-SP16	29-195	瓦器・碗 体部中位～底部	①(3.1)		外:灰色 内:灰色		良好	外:ナデ 内:ヘラミガキ?		
E-SP29	29-196	青磁・碗 体部下位	①(2.4)		外:灰オリーブ色 内:灰オリーブ色	—	良好	外:ヘラケズリ 内:ヨコナデ?	竜泉窯系	
Eクロボク 層中	29-197	土師器・碗 体部下位～底部	①(2.0)		外:橙色 内:橙色	1mm以下の石英・長石・ 角閃石・雲母少量	良好	外:ナデ 内:ナデ		
E表採	29-198	陶器・挿鉢 体部下位～底部	①(4.3)		外:褐色 内:褐色	1mm以下の長石・角閃 石・雲母中量	良好	外:ナデ 内:ナデ		
F-SE1	36-199	弥生土器・甕 口縁部	①(2.3)		外:にぶい黄褐色 内:にぶい黄褐色	1mm以下の石英・長石・ 角閃石・雲母少量	良好	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ		
F-SE1	36-200	弥生土器・甕 口縁～体部上位	①(3.7)		外:にぶい黄褐色 内:にぶい黄褐色	1mm以下の石英・長石・ 角閃石・雲母少量	良好	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ		
F-SE1	36-201	弥生土器・壺 口縁部	①(5.1)		外:橙色 内:橙色	0.5mm以下の石英・雲 母少量	良好	外:ナデ? 内:ヘラミガキ		
F-SE1	36-202	弥生土器・壺 体部下位～底部	①(5.0) ③(6.7)		外:にぶい橙色 内:にぶい橙色	2mm以下の石英・長石・ 角閃石・雲母少量	良好	外:ヘラミガキ? 内:ヘラミガキ?		
F-SD1	36-203	弥生土器・甕 底部	①(4.9) ③(7.6)		外:橙色 内:—	2mm以下の石英・長石・ 角閃石・雲母少量	良好	外:タテハケ→ナデ 内:—		
F-SD1	36-204	須恵器・蓋 口縁部	①(1.5)		外:灰色 内:灰色	2mm以下の石英・長石・ 角閃石・雲母少量	良好	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ		
F-SP8	36-206	弥生土器・甕 口縁部	①(1.5)		外:にぶい橙色 内:橙色	0.5mm以下の石英・角 閃石中量	良好	外:ナデ 内:ナデ	刻目	
クロボク中	37-207	弥生土器・甕 口縁～底部	①35.8 ②(41.5) ③10.0		外:黄褐色 内:黒色	1mm以下の石英・長石・ 雲母中量	良好	外:ヘラミガキ 内:ヘラミガキ		
クロボク中	37-208	弥生土器・甕 底部	①(7.5) ③(8.0)		外:にぶい黄褐色 内:にぶい黄褐色	0.5mm以下の石英・長 石少量	良好	外:タテハケ・ヨコハケ・ナデ 内:ナデ		
クロボク中	37-209	弥生土器・甕 体部下位～底部	①(7.7) ③7.2		外:明茶褐色 内:明茶褐色	0.5mm以下の石英・長 石・角閃石少量	良好	外:タテハケ・ナデ 内:ナデ		

出土遺構	遺物 番号	器 種 (残存状況)	法量 (cm)	色調・胎土・焼成			成形・調整・釉薬		備 考
			①器高 ②口径 ③底径 ④その他	色 調 外:外面 内:内面	胎 土	焼 成	外:外面 内:内面		
表採	37-210	弥生土器・甕 体部上端	①(7.2)	外:明黄褐色 内:明黄褐色	2mm以下の石英・角閃 石中量	良好	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ		
表採	37-211	弥生土器・甕 底部	①(4.4) ③(8.8)	外:明赤褐色 内:明茶褐色	0.5mm以下の石英・長 石中量	良好	外:ナデ 内:ナデ		
表採	37-212	弥生土器・壺 口縁部	①(2.7)	外:浅黄褐色 内:灰黄褐色	0.5mm以下の石英・長 石少量	良好	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ		
表採	37-213	弥生土器・壺 口縁部	①(2.4)	外:にぶい黄褐色 内:にぶい黄褐色	0.5mm以下の石英・長 石・角閃石中量	良好	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ		
表採	37-214	弥生土器・壺 体部上位	①(5.7)	外:にぶい黄褐色 内:にぶい黄褐色	0.5mm以下の石英・長 石・雲母少量	良好	外:ナデ 内:ヘラミガキ?	羽状文	
表採	37-215	須恵器・坏身 口縁~底部	①4.2 ②(13.0) ④最大径(15.4)	外:灰色 内:灰色	0.5mm以下の長石少量	良好	外:ヨコナデ・ヘラケズリ 内:ヨコナデ		
表採	37-216	須恵器・坏身 口縁~体部上位	①(3.3) ②(13.6) ④最大径(16.0)	外:灰色 内:灰褐色	0.5mm以下の角閃石少 量	良好	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ		
表採	37-217	須恵器・壺 体部~底部	①(5.7) ③(3.8) ④最大径(9.4)	外:灰色 内:灰色	0.5mm以下の長石少量	良好	外:ヨコナデ・ヘラケズリ 内:ヨコナデ		
表採	37-218	須恵器・高坏 口縁部	①(4.6)	外:灰色 内:灰色	0.5mm以下の長石少量	良好	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	沈線2条	
表採	37-219	須恵器・高坏 脚部上半	①(10.9)	外:灰色 内:灰色	0.5mm以下の長石少量	良好	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	沈線2条	
表採	37-220	黒色土器・埴 体部下位~底部	①(2.0) ②(7.2)	外:橙色 内:にぶい褐色	0.5mm以下の石英中量	良好	外:ヨコナデ 内:ミガキ		
表採	37-221	青磁・碗 口縁~底部	①6.8 ②(16.0) ③(6.0)	外:灰オリーブ色 内:灰オリーブ色	—	良好	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ?	草花文 竜泉窯系	

第2表 出土土製品・石製品観察表

出土遺構	挿図 番号	器 種 (残存状況)	法量 (cm)	材 質	色 調	特徴・製作痕・使用痕	備 考
			①長さ ②幅 ③厚さ ④その他				
A-SP17	8-37	石錘?	①4.3 ②4.0 ③1.1	不明		重量20.8g。上下両端に抉り	
A-SP21	8-38	石核	①2.8 ②2.2 ③2.0	姫島産黒曜石		重量11g。自然面有り	
B-SH2	14-63	磨石	①11.4 ②10.3 ③5.8	安山岩	暗灰色	重量842g。周縁部に敲打痕	
B-SH2	14-64	砥石	①(3.8) ②(3.0) ③1.6	凝灰岩?	灰白色	重量18g。上下両面を砥面に使用	
B-SH2	14-65	投弾/完形	①3.9 ②3.6 ③3.5	花崗岩?	褐灰色	重量58g	
B-SH2	14-66	石鏃/完形	①2.0 ②1.4 ③0.4	姫島産黒曜石		重量1.0g	
B-SH2	14-67	石鏃/完形	①2.8 ②1.5 ③0.3	黒曜石		重量1.0g	
B-SP23	14-114	石鏃/完形	①3.5 ②2.4 ③0.6	姫島産黒曜石	灰色	重量2.5g	
C-SP15	20-136	石製紡錘車/完 形	①直径4.4 ③1.3	緑泥片岩?	オリーブ灰色	重量48g	
C-S15・17 土層	20-141	土錘	①(3.8) ②1.3	1mm以下の角閃石・雲母 少量	灰白色	重量(6.0g)	
F-SD1	36-205	砥石	①(3.7) ②(2.2) ③1.9	凝灰岩?		重量(26g)	

第4章 調査のまとめ

佐知久保畑遺跡は平成4年度と平成10年度に大型商業施設建設に伴い13,000㎡に及ぶ発掘調査が実施された。その結果、縄文時代から古墳時代にかけての各種遺構が調査されたが、調査報告書ではすべての遺構を網羅しきれていないのが現状である。ただし、同書の遺構分布図をもとに集落の主要施設である竪穴住居跡状の遺構を概算すると、円形の遺構が15基程度、方形の遺構が30基程度確認できる。周壁が削平された竪穴住居跡も相当数あると考えられるので、住居跡の総数は50軒を超えるものと推定される。これらの住居跡は縄文時代では後期、弥生時代では中期、古墳時代では後期が中心となる時期である。また掘立柱建物跡と考えられる柱穴の規則的な配置が遺構分布図で複数確認できるし、長大な直線的な溝状遺構も存在するが、時代はともに不明である。いずれにしても、今回の調査地は前回の調査地の西側数十メートルに隣接することから、確認した遺構は各時代において集落の一部を構成していたものと考えられる。

今回の調査では主な遺構として竪穴住居跡13軒（うち円形9軒・方形4軒）・掘立柱建物跡9棟・井戸1基・土坑19基・溝状遺構11条などを確認したが、以下では当遺跡における各時代の概要についてまとめる。

縄文時代

前回の調査では縄文時代の遺構としては方形竪穴住居跡や土坑が検出され、遺物は後期から晩期のものが出土しているが、中心となるのは後期後半代のようなものである。今回の調査でも134・172など同様の時期かと考えられる縄文土器が出土しているが、量的には非常に少ない。また、明確な遺構も確認されなかったことから、今回の調査地区はこの時期の集落の縁辺部にあたるのではないかと推測される。

弥生時代

前回の調査では前期から後期にかけての長期間にわたる遺物が出土しており、円形竪穴住居跡の大部分はこの時期の遺構と考えられる。ただし、出土土器の時期は中期が多数を占めるようである。今回の調査でも検出した円形竪穴住居跡は弥生時代のものであろうが、出土遺物が少ないため時期が判明したのは中期中葉の須玖Ⅰ式並行期の土器を出土したB区2号竪穴住居跡だけである。なお、B区1号竪穴住居跡の柱穴内から出土した少量の土器はこれよりやや遡る可能性がある。住居跡以外ではA区1号土坑、B区1号土坑・4号土坑などから中期前葉から中葉の土器が出土し、B区3号土坑から出土した壺の口縁部(74)は後葉かと考えられる。当地域周辺では弥生時代中期の食料保管施設としては貯蔵穴が主流である。径1m前後の円形または方形の平面形で、前回調査の36号土坑・70号土坑などがこの種の遺構と考えられる。今回の調査では貯蔵穴と確定できる遺構は検出されなかったが、B区3号土坑などはその可能性がある遺構であろう。E区1号土坑は、出土した土師器が1号竪穴住居跡からの混入品であるとすれば弥生時代の遺構であり、その構造から土坑墓や木棺墓等の埋葬施設の可能性がある。また、B区1号土坑も小児用甕棺墓の可能性を排除できない。なお、調査で出土した弥生土器にはヘラや二枚貝で羽状文などを施文した壺があり、これらは前期後葉の板付Ⅱb式にさかのぼる。

古墳時代

前回の調査で確認された方形竪穴住居跡は縄文時代の遺構を除くと、大部分が古墳時代後期の6

世紀後半の時期に属しており、一部が7世紀前半まで残るものであった。今回の調査でも確認された方形竪穴住居跡は古墳時代の遺構と考えられ、A区2号竪穴住居跡・E区1号竪穴住居跡から出土した須恵器はともに小田編年のⅢB期を主体とするものである。住居跡以外ではA区8号土坑・2号溝状遺構、B区8号土坑・2号溝状遺構・4号溝状遺構などは古墳時代の遺構である。これらの遺構の多くは6世紀後半代に属すると考えられるが、B区8号土坑から出土した須恵器の坏蓋(87)・高坏(89)・壺(93)などは7世紀中葉(V期～ⅥA期)にまでくだるものである。このうちB区2号溝状遺構はある特定の空間を方形に区画する溝と考えられるが、南東側のC区ではその続きが検出されなかったことから全体の規模は一辺が約7m以下の区画であろう。この時期の倉庫は方2間で総柱の掘立柱建物跡が一般的であり、今回の調査ではC区1号掘立柱建物跡・2号掘立柱建物跡などが類似する構造を有するが、遺物の出土がないため時期を断定できない。

中世以降

中世の遺構としては掘立柱建物跡があるが、柱穴内から当該時期の遺物が出土したものがなく、各建物跡の詳細な時期は不明である。また、調査区の設定がトレンチ状であることから、大型の建物跡は確認されなかった。F区2号掘立柱建物跡も1間×2間の小型の建物跡であるが、6本の柱穴のうち3本に扁平な円礫を礎板として使用していた。掘立柱建物跡以外ではB区3号溝状遺構、F区1号井戸があり、ともに瓦器塚が出土している。また、表面採集遺物の中で竜泉窯系青磁碗(221)は12世紀後半の時期であろう。これらのことから、中世の遺構群はおおむね12世紀から13世紀頃に属すると推測される。なお、D区1号土坑は弥生時代から古墳時代の遺物しか出土していないが、遺構の構造は古墳時代以前のものには類例がなく、中世以降の可能性もある。今回調査した遺構の中でもっとも新しいのがF区1号溝状遺構である。埋土中から陶器の甕や染付が出土しており、近世以降の時期まで存続していたと考えられる。この遺構は幅が1.5m程度で一定で、直線的に延びることから、人工的な水路であろう。

以上、今回の調査で検出された遺構を時期ごとにまとめたが、遺構検出面の上層にはクロボク層が厚く堆積しており、各時代の遺構は本来このクロボク層中から掘り込まれていたものである。このため、剥土作業をとおして破壊してしまい確認できなかった遺構も多数あったのではないかと危惧される。また、集落の全容を解明するには前回の調査成果を再検討することも必要であり、今後の課題である。

〔参考文献〕

- ・三光村教育委員会 『三光村の遺跡－佐知久保畑遺跡－』 三光村文化財調査報告書第5集 2004

圖 版



(1) 佐知久保畑遺跡2次調査地全景（西から）



(2) A区遺構検出状況（北東から）



(3) A区完掘状況（南西から）

図版2



(1) A区1号竪穴住居跡（南東から）



(2) A区1号竪穴住居跡（北西から）



(3) A区2号竪穴住居跡（南東から）



(4) A区2号竪穴住居跡土層断面（南から）



(1) A区1号・2号土坑 (北西から)



(2) A区3号土坑 (西から)



(3) A区4号土坑 (南東から)



(4) A区7号土坑 (南西から)



(5) A区8号土坑 (東から)

図版4



(1) A区1号・2号溝状遺構 (北西から)



(2) A区竪穴住居跡出土遺物1



(3) A区竪穴住居跡出土遺物2



(4) A区土坑出土遺物1



(5) A区土坑出土遺物2



(6) A区溝状遺構・ピット出土遺物



(7) A区ピット等出土遺物



(1) B区遺構検出状況（北東から）



(2) B区完掘状況（南西から）



(3) B区1号竪穴住居跡（北西から）



(4) B区2号竪穴住居跡（南東から）

図版6



(1) B区2号竪穴住居跡 (西から)



(2) B区1号土坑 (西から)



(3) B区1号土坑土器出土状況 (西から)



(4) B区2号・3号土坑 (北西から)



(5) B区5号土坑 (北西から)



(1) B区5号・6号土坑、1号～3号溝状遺構付近（北西から）



(2) B区6号土坑（北西から）



(3) B区7号・8号土坑（南東から）



(4) B区2号溝状遺構（北西から）



(5) B区2号溝状遺構（北東から）



(6) B区2号溝状遺構土器出土状況

図版8



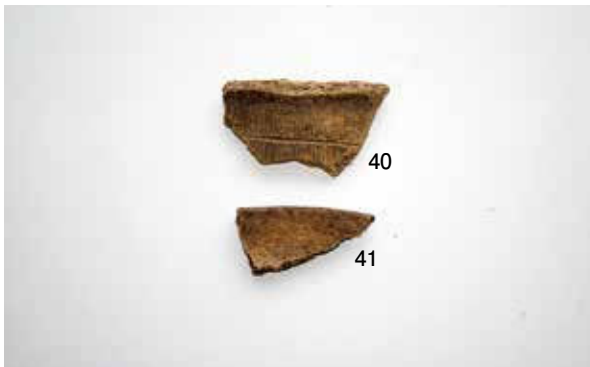
(1) B区7号・8号土坑、4号・5号溝状遺構付近 (南東から)



(2) B区3号溝状遺構 (北西から)



(3) B区4号溝状遺構 (北西から)



(4) B区竪穴住居跡出土遺物1



(5) B区竪穴住居跡出土遺物2



(6) B区竪穴住居跡出土遺物3



(7) B区竪穴住居跡出土遺物4



(1) B区土坑出土遺物 1



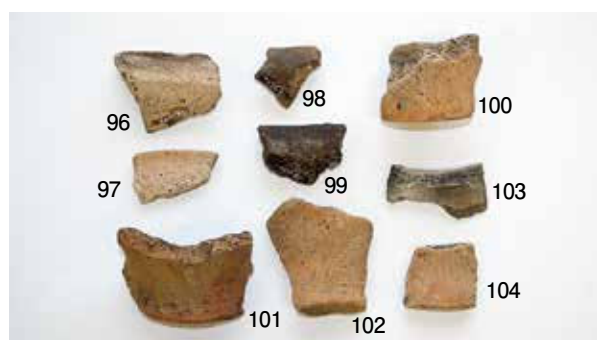
(2) B区土坑出土遺物 2



(3) B区土坑出土遺物 3



(4) B区土坑出土遺物 4



(5) B区溝状遺構出土遺物 1



(6) B区溝状遺構出土遺物 2



(7) B区溝状遺構・ピット出土遺物



(8) B区表面採集遺物

図版10



(1) C区遺構検出状況（北東から）



(2) C区完掘状況（北東から）



(3) C区1号竪穴住居跡（東から）



(4) C区1号・2号掘立柱建物跡（北東から）



(5) C区1号・2号掘立柱建物跡（北から）



(1) C区1号土坑 (南東から)



(2) C区1号土坑土層断面 (南東から)



(3) C区1号溝状遺構 (北西から)



(4) C区1号溝状遺構 (北東から)



(5) C区南西端部 (南西から)



(6) C区2号溝状遺構 (南東から)



(7) C区出土遺物 1



(8) C区出土遺物 2

図版12



(1) D区遺構検出状況 (南西から)



(2) D区完掘状況 (北東から)



(3) D区1号掘立柱建物跡 (北から)



(4) D区1号土坑 (南東から)



(5) D区土坑出土遺物



(6) D区ピット出土遺物



(1) E区遺構検出状況（北東から）



(2) E区完掘状況（南西から）



(3) E区1号竪穴住居跡（北西から）



(4) E区1号竪穴住居跡（北東から）

図版14



(1) E区1号竪穴住居跡カマド土層



(2) E区1号竪穴住居跡カマド(北東から)



(3) E区1号竪穴住居跡完掘状況(北東から)



(4) E区2号竪穴住居跡(西から)



(1) E区3号・4号竪穴住居跡付近 (南東から)



(2) E区3号竪穴住居跡 (南から)



(3) E区4号竪穴住居跡 (北西から)



(4) E区5号竪穴住居跡 (南東から)

図版16



(1) E区1号掘立柱建物跡付近 (南東から)



(2) E区1号掘立柱建物跡 (北東から)



(3) E区1号土坑 (東から)



(4) E区出土遺物1



(5) E区出土遺物2



(6) E区出土遺物3



(7) E区出土遺物4



(1) F区遺構検出状況（北東から）



(2) F区完掘状況（南東から）



(3) F区完掘状況（北西から）



(4) F区完掘状況（北東から）

図版18



(1) F区1号竪穴住居跡（北西から）



(2) F区2号竪穴住居跡（南東から）



(3) F区3号竪穴住居跡（北西から）



(4) F区1号掘立柱建物跡（南東から）



(1) F区2号掘立柱建物跡 (東から)



(2) F区2号掘立柱建物跡 (北東から)



(3) F区2号掘立柱建物跡柱穴P3・P4・P5



(4) F区3号掘立柱建物跡 (東から)



(5) F区1号土坑 (北東から)



(6) F区1号井戸 (北西から)



(7) F区1号井戸土層 (南西から)

図版20



(1) F区1号溝状遺構(東から)



(2) F区1号溝状遺構(北東から)



(3) F区1号溝状遺構土層(北東から)



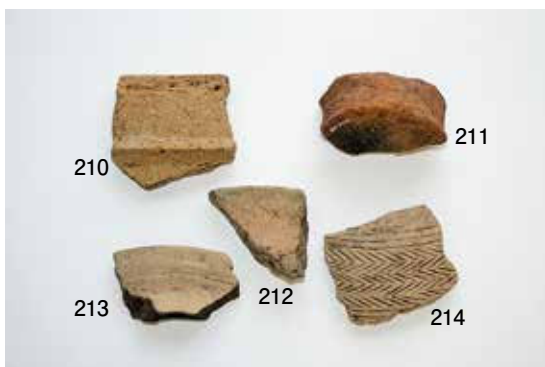
(4) F区2号溝状遺構(北西から)



(5) F区出土遺物



(6) 2次調査クロボク層出土遺物



(7) 2次調査表面採集遺物1



(8) 2次調査表面採集遺物2

報告書抄録

ふりがな	さちくぼばたいせき2じちようさ							
書名	佐知久保畑遺跡2次調査							
副書名	大分県中津市三光佐知における店舗建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	中津市文化財調査報告							
シリーズ番号	第98集							
編著者名	末永 弥義							
編集機関	中津市教育委員会							
所在地	〒871-8501 大分県中津市豊田町14番地3 TEL:0979-22-1111							
発行年月日	令和2年3月31日							
所収遺跡名	所在地	市町村コード	遺跡番号	北緯	東経	調査期間	面積(m ²)	調査原因
佐知久保畑遺跡	大分県中津市 佐知久保畑 926番地2	44203	203151	33° 33' 31"	131° 11' 32"	2019.2.15 ～ 2019.4.19	487	店舗建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
佐知久保畑遺跡	集落	弥生時代 ～中世	竪穴住居跡 13軒 掘立柱建物跡 9棟 井戸 1基 土坑 19基 溝状遺構 11条		縄文土器・弥生土器・ 土師器・須恵器・瓦 器・青磁・陶器 土錘・石鏃・投弾・ 砥石・磨石・紡錘車		なし	
要約	1990年代の調査で発掘された弥生時代から古墳時代の竪穴住居跡からなる集落が南西側の今回調査地にも広がることが確認された。なお、今回の調査では掘立柱建物跡が多数検出され、中世にも集落が営まれていたと考えられる。ただし、以前の調査で確認された縄文時代の明確な遺構は検出できなかった。							

佐知久保畑遺跡2次調査

中津市文化財調査報告 第98集

令和2年3月31日

発行 中津市教育委員会

印刷 榎川原田印刷社

